
モンスターハンター 師と弟子と約束の狩猟戦記

テコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 師と弟子と約束の狩猟戦記

【Nコード】

N6017J

【作者名】

テコ

【あらすじ】

少しだけ、アホな子を弟子に持つ師と、心に傷を負った師を慕う弟子の日々成長な、狩猟物語。

第1話 三時間以内の約束

美しく自然溢れる豊かな大地・

そこは人とモンスターが共存する世界・

当然の如くモンスターは人を襲う。

人は生きる為に様々な工夫を凝らしその過程で生まれたモンスターを狩る人間・・・

その職業を人々はハンターと呼ぶ・・・

《密林狩猟エリア》

様々な種別の木々が生い茂る密林の広場に少女の声がこだました・

「でいヤー！！！！」

裂帛の気合いと共に振り下ろされた一撃（太刀）はドスランポスの同体に深い裂傷を刻み込み吹き飛ばす！

「ガッ！・・・ギヤア！ギヤア！」それでも今尚立ち上がりこちらを睨みつけながら低い唸り声をあげるのはプライドかもしれないが単純な生存本能の表れか・・・

少しの間に互いの動きを読みあう両者のにらみ合いは急に身を翻して逃走しだしたドスランポスによって呆気なく終わる・・・

「あつ・・・！逃げるな！ 待ちなさいよー！」

少女も慌てて駆け出す――が、いかんせん人間の脚とランポスの脚ではスピードが違いすぎるのでその差はぐんぐんと引き離されて行く・・・

「うっ！ このままじゃあ師匠に先を越されるっ！」

《しばらくして》

少女の執拗に続く追撃をなんとかやり過ごす事に成功し別のエリアへと脱出するドスランポス・・・だが、ちょうど移動したエリア中央にリオソウルシリーズを纏った男が自分を見定めながら武器（太刀）も構えずに待ち構えているの姿を視界に捉えてしまう・・・

「ギヤア！ギヤア！」

自らの敵・・・と視認したドスランポスは攻撃本能の赴くままに鋭い爪を突き刺ささん！

と、大きく跳ね上がりながら男に襲いかかる！

しかし、男はサイドステップであっさりと飛び交ってくるドスランポスを回避し・・・そのまま反撃に打って出る！

そんな男の立ち回りに全く気付かずに地面を爪で抉りながら着地したドスランポスは悔しそうにこちらを振り向いた瞬間！

首にドスツという衝撃が走しり体を真横に吹っ飛ばされる！

一瞬自分の体に何が起きたのか解らず視線を下ろすドスランポス・・・すると、

「ギヤアー―ッス！」

視線を伸ばした先には首に大きな風穴が空いてしまい噴水の様に血

飛沫が飛び出している！

視認する事でようやく自らの体に何が起きたのかを理解したドスランポスは激痛に耐えきれず地面にのた打ち回る。

辺り一面に血を撒き散らしもがき苦しむドスランポスを尻目に近づいて行く人影はそのままドスランポスの首に足をつけ無造作に刃を真下へと振り落とす！

「■■■■ー！！！」

迫り来る刃を見たドスランポスは断末魔に近い悲鳴をあげると同時に首を叩き落とされ——その胴体は血をほとばしりながら痙攣を繰り返し・・・数秒後ピクリとも動かなくなる。

「依頼達成・・・後はあいつが来るのを待つだけだか・・・」

ドスランポスが完全に絶命した事を確認した男は直ぐには剥ぎ取りを行わずにもうすぐ到着する筈であるう弟子を待つ・・・すると、

「師匠ー！！！」

もう随分と聞き慣れた声と共にランポスシリーズを纏い、ポニーテールに纏めた赤色の髪の少女がこちらに猛スピードで走ってくる姿が目に入る。少女は衝突寸前で急ブレーキをかけ男の前で停止するとその横に転がっているドスランポスの死体に気づき・・・

「あゝゝ！ もう終わっちゃってる！？」

赤色の瞳を大きく見開いて自分が到着する前に決着がついている事に嘆く少女は男にじと目で睨みながら・・・難癖をつけてくる。

「ズルいですよー！ チス師匠！ あたしがトドメを刺したかったのにー！！」

チスと呼ばれた男はぶーたれる少女にやれやれと肩をすくめ口を開く・・・

「別にズルくはないだろう？約束通り三時間は待ってやったんだからな。それに、スウは今までにドスランポスを単独で3匹は狩ってるんだから別に俺がトドメを刺しても問題ないだろう？」

言葉を聞いて尚「うゝ」とか「でも」とか等を繰り返す弟子に対して少し呆れ顔になった師はこの件を丸投げする為にそのまま無言でドスランポスの死体から素材の剥ぎ取りを開始する・・・と、

「あつ！私も一緒にします！」

チスの思惑通りに先程の文句もどこ吹く風でスウも剥ぎ取りに参加する

《同日、夕刻》

あれから剥ぎ取りを済ました2人はそれぞれ剥ぎ取った皮や爪などを道具袋ポーチに入れ意気揚々とベースに引き上げいき————現在は自分達の村へと帰還する為の準備に移っている。

「・・・・・・・・」

「師匠ゝ？やっぱり支給品の痺れ罌とかは返さないと駄目ですかねゝ？」

「・・・・・・・・」

「師匠ゝ？」

「うん？」

「考え事ですか？師匠？」

「まあ・・・な・・・」

チスに構って欲しくて声をかけたスウだが、大体の所で師の返事がない時は何かを真剣に考えている時だと理解している彼女はそのまま押し黙り黙々と準備を進めていく・・・

「——もう、ドスランポスぐらいじゃあ役不足つか・・・」

小声で一人呟くチスは頭の中で先程のドスランポスの死体を思い出す。

首の傷はチス本人がつけたとして同体や足、顔などの大小の裂傷はスウ自身が付けた傷であり、対象的に所々に擦り傷はあるもののほぼ無傷とっていいスウを見たチスは・・・

「もうそろそろイャンクックに挑戦させるのもいいかもしれないな。」

「えっ？師匠イャンクックがどうかしましたか？」

割と小さい声で呟いたつもりだったが少しだけスウに聞き取られたのか小首をかしげながら上目使いに赤色の瞳を向けるスウにチスは軽く微笑んで頭を撫でる。

「何でもない・・・それより日も暮れてき事だしそろそろカコ村に帰ろう・・・」頭を撫でられ気持ち良さそうに目を細めていたスウ

もチスの言葉を聞き元氣一杯に

「はい！師匠！」

と、答え先を歩き出す師の背中を追い自身も歩を進める弟子と――

――自身の後ろを付き従うスウを感じる師はヘルム越したが、優しい表情で浮かべ少しだけ歩くスピードを緩める。

夕日が優しく照らす密林を師弟の2人は楽しそうに話ながら狩場を後にしたのだった・・・

第2話 依頼達成後の拠点での出来事 修正

大陸最大の都市ドントルマから、東に船で一週間はかかる偏狭の村・カコ村。

沿岸沿いに建つこの村は主に漁業や農業が盛んで近隣の村に海産物や農作物を売買い生計を立てている。

また、安全面では村の外周を高い石の壁で囲っているので飛龍以外のモンスターは侵入出来ない仕組みになっている為、ど田舎ながらもまだマシな人口を擁している・・・

ドスランポス討伐から後にして帰って来た2人が村に到着したのは完全に日が暮れた頃だった・・・

「あつ！チスさん！お帰りなさい！」

「ああ、ただいま・・・今日もケイはご苦労様だな。」

「いえ！これが僕の仕事なんで大丈夫です！でも、心遣い感謝します！」

村の入口に到着した2人を迎える門番のケイ・・・最近の若者には珍しくドントルマや他の大都市に興味を持たず村の門番を志願して日々汗を流す好青年だ。

「ケイ、私には挨拶してくれないの？」

「ああごめんごめん、お帰リスウ・・・」

「うん！ただいま！」

仲良さげに話すスウとケイにチスは軽く微笑み、しばらくは2人の

様子を見ていようと傍観の体勢に入る・

「そういえば今日はドスランポスの討伐に行くって言ってたけど結果は？」

「にひいゝっ・・・ぶい！」

その話題を待つてました！とばかりに食らいつき前時代的ながらVサインを作るスウ・・・

「上手くいったの？やっぱり凄いな・・・」

「えへへ、そう？」

「うん、チスさんが・・・」

「って！師匠の事！？」

お約束すぎる展開に思わずズッコけるスウにケイは更に彼女をおちよくろうとするも・・・

「ケイ、それ以上は止めておけ・・・拗ねるスウを宥めるのは面倒だ。」

チスに釘を刺されて喉から出そうだった言葉を呑み込む羽目になる・

「すみませんチスさん・・・僕の周りには同年代の奴はスウしか居なくてそれで・・・」

バツが悪そうに顔をしかめるケイに苦笑を浮かべたチスは彼の肩を軽く叩き・・・

「何、構わんさ・・それより、そろそろ中に入らせて貰せてもいいか？」

「あっ！はい！」

村に通じる道を開けてもらい――

《カコ村 広場》

「うっんっ！」

村に帰って来た事で張り詰めていた気が抜けたのが大きく伸びをスウ――そんなスウを見て目尻を下げながらチスは自身のヘルムに手をかける・・

「本当に師匠は人相が悪いですね・・」

「しょうがないだろ生まれつきなんだから、人相の悪さは・・」

スウにからかわれながら短髪に刈り上げた黒髪をガシガシと掻くチスの顔立ちは少し――いや、かなり悪そうな顔をしている。

「師匠！今日はこれから報告しに行くんですか？」

この村では基本的に酒場に依頼を紹介して貰い、報酬と報告は依頼主から頂くという形を取っている。

「今回は村長からの依頼だし、この時間帯なら多分酒場いると思うから行ってみるとするか・・」

そう言うチスはスウをつれだつて酒場に向かった。

《カコ村 大衆酒場》

酒場に到着し中に入るために入口のドアを開けると一気にアルコールの匂いと男達の笑い声が2人を歓迎する——正に別世界——

「おおー！ スウちゃんにチスの旦那じゃねーか！今、狩場から帰ってきたのか？」

店に入るなりカウンターに座っていたいい感じに出来上がっている
恰幅いい中年の男性がかけてきた声にスウは屈託のない笑顔を浮かべ・・・

「ただいま！漁長！依頼を達成して、今さっき帰って来た所なの」

と、元気一杯に返事をする。

そんなスウを見て漁長は大きく高笑いした後・・・

「そうかいそうかい、そいつはめでたい、さあ、そんな所に突っ立ってないでこっちに座ってコレでもお食べ。」

漁長は自分の横の空席をポンポンと叩いて、まだ手つかずのアプト
ノスの肉のタタキが乗った皿を横の席に移す。

「コレ、全部食べてイイの！？ありがとー！漁長ー！」

食べ物誘惑に果てしなく弱いスウはすぐに漁長の横に座ってガッツキだす——

そんなスウに漁長は更に

「足りなかったら、もっと注文してもいいんだよ？今日はおっちゃん
の奢りだからお金の事は気にしないでいいからね。」

などと言い出し、その言葉にすぐさま反応したスウは・・・

「ホントに！ありがとぅ！漁長！じゃあ・・・」

と、給仕のキッチンアイルを呼び出し5品ほど注文するスウ――
毎度の事ながら遠慮を知らないスウを見ていたチスは苦笑を浮かべ
ながら漁長に礼を言う。

「すみません、漁長。いつもスウがお世話になって・・・」

「な」に、気にする事はないぜ！チスの旦那。

旦那やスウちゃんにはいつも世話になっているんだからな！」

と言いながら、バシバシ肩を叩く漁長にチスは愛想笑いを浮かべる。

「じゃあ、俺は村長に依頼達成の報告を済ませないといけないんで、
その間スウの事を頼みますね漁長・・・」
「応、任しとけやー！」

とりあえず食事に夢中になっているスウを漁長に任せたチスは酒場
内にいるはずの村長を探す・・・と、酒場の一番隅のテーブルでこの
店のオーナーである女将さんと竜人族の青年が話し込んでいるのを
発見する。

向こうもこちらに気づいたのか竜人族の青年が話し掛けてきた。

「やあやあ、チス君じゃあないか！もしかして僕に何か用？」

「ええ、村長が依頼したドスランポスの討伐の達成と報告を・・・」

一瞬キョトンとした村長だがすぐに思い出したのか、ああっ！と手
をたたいて、背中のポーチから依頼報酬が入った袋を2つ取り出す
村長・・・

「一応、コレがドスランポス討伐の証拠です。」と、ドスランポス

の爪を村長に差し出す。

（こういった討伐依頼は対象であるモンスターの素材を一部分を証拠として差し出すのが通例）

ドスランポスの爪を受け取った村長は――

「うん、確かに・・・じゃあ、コレは僕からチス君とスウちゃんの報酬ね！」

と、言いながら2つに分けた報酬をチスに手渡し――

「それにしても、最近の君は雰囲気が本当に変わったね。」

突然そんな事を言い出した村長にチスは驚き一瞬報酬の入った袋を落としそうになるも、なんとかキャッチして自分のポーチにいれながら答える。

「随分いきなりですね・・・自分では全く変わったっていう実感は無いんですけど・・・」

村長はやれやれと肩をすくめ――

「気付いてないのは本人だけか・・・少なくとも僕が初めて君に会った時よりも愛想もよくなっただし、何よりも優しい目をする様になった・・・」

以前より変化したチスを嬉しく感じているのか、村長は屈託のない笑みを浮かべチスを見る。

それが少し照れくさくなっただのか黒髪の頭をガシガシと掻きながら

「まあ、その話は置いと《師匠》！《ん？》」

と話題をかえようとした矢先・・・入口付近から大きな声が聞こえる……
いぶしかんでそちらに振り向くと――何故だか顔を真っ赤にしたスウが手を振りながら自分の名前を連呼している。慌てて駆け寄ったチスにスウは・・・

「師匠！私、いい感じになってきましたー！」

（コイツ、酒臭い）

近づいてわかった事だがスウから酒の匂いがプンプンする事に気づいたチスは、咎める様な目でスウの隣にいるはずの漁長を見る・・・しかし、

（寝てる…！）

酒に酔ったのかカウンターで突っ伏した様に寝ながら豪快なイビキをかく漁長の手には瓶らしき物を掴んでいた様な痕跡が・・・そして、隣のスウが座っていた席にある酒瓶を見たチスはある結論に達する。

（多分スウは途中でガツキすぎて食べ物を喉に詰まらせてしまった――慌てて近くにある飲み物をひっ掴んで飲んだのが酒瓶だったんだろー・・・漁長が眠ってしまったから誰かが止める間もなく一気に飲み干してしまって酔っ払った…）

「師匠――うみゅー」

ある程度の予想をし終えたチスに甘える様に顔を腕にすりよせてくるスウ・・・

酒が入ってタガがはずれたのかいつもよりかなりスキンシップが激しいスウに困惑するチス。

「スウ…お前、かなり酔ってるだろう?」

「えっ?…酔ってなんかいませんよ。やだな。師匠は!ほら、その証拠を今見せてあげますからね!」

スウは少し千鳥足気味にチスから離れる——その動作に何かイヤな予感がするチス。

「師匠!行きますよ!」

「ちよつ、ちよつと待て!スウ!!」

チスの制止も届かずスウはその場でバク宙をかます…が

「ギャン!!」

当然のごとく着地に失敗して見事に後頭部を地面に強打する…

「あう!う!」

後頭部を抑えてもんどり打つスウはしばらくして——急に体を丸めてピクリとも動かなくなる!?

「だ 大丈夫か!?スウ!」

反応のないスウに心配になったチスはスウの顔を覗き込むと…

「ぐうぐう…」

（寝てる！？）

その場で爆睡をかます弟子に一瞬頭をはたきそうになる衝動を途中で何とか押さえ込んだチスは――

「はぁ・・・」

と、ため息をして辺りを見回す・・・

周囲の村人たちも此方の様子が心配になったのか、皆覗き込んでいる…

「はぁ・・・」

本日2度目となるチスの溜め息が酒場の中にこだました。

《五分後》

結局、何をしても全く反応を示さないスウを起こす事を諦めたチスはスウを背負って帰る事にし、帰り際に女将さんや周りの村人に騒がした事を詫びて酒場を後にした・・・

「はぁ・・・」

帰り道のチスはこの日三度目の溜め息を吐く――

「まったく・・・本当にしょうがない弟子だなお前は・・・っと！」

背中で爆睡している弟子を背負い直しながら罵倒を浴びせるチスだが、その目はどこか優しい・・・

「うっん、師匠・・・」

「起きたか？スウ？」

「私いゝ・・・頑張りますからゝ：ムニヤムニヤ」

「寝言か？・・・で、頑張るから何だ？」

それが寝言だと分かりつつ何となく弟子に付き合うチスにスウは――

「だから、だからずっと・・・一緒・・・」

スウの言葉が一瞬、表情を強張せるチスだが――すぐに表情を緩め一人笑みを零し、

「ああ・・・お前が本当の意味で一流のハンターになって、自らの意志で俺の下から羽ばたいていくその日までは・・・ずっと、ずっと一緒に・・・」

《一時間後》

家に着いたチスはそのまま爆睡するスウをベッドに放り込み1人リビングで、酒を飲みながらスウが言った言葉を思い出す――

「ずっと一緒か・・・」

先程スウが言った言葉を聴いた瞬間に遠い過去に最愛の仲間達と同じ様な約束をした事がチスの頭によぎる・・・

「結局、あの約束は果たせずじまいだったな・・・」

もう、果たす事も出来ない約束を憂い、顔に影を差すチス――だが、すぐに顔を上げ

「なーに、今度の約束は必ず果たしてみせるさ・・・」

いつになく真剣な声で1人呟いた声がりびングに響き渡る・・・

この日の夜、チスの家の灯りが消えたのはいつもよりかなり遅めだった・・・

第3話 ハンターの通る道とスウのやる気 修正

「師匠！私がメインでイャンクックをつて本当ですかー！？」

朝っぱらからチスの自宅にスウの大声が響き渡った・・

《事の発端五分前》

いつもの様に朝食を食べる二人・・

いつもの様に朝飯をがつつくスウを横目にゆっくりと食事をするチス。

「師匠！今日は何の依頼を受注するんですか？」

さっきまでがつついていた箸を止めて上目使いに聞いてくるスウにチスは――

「そうだな・・今日はイャンクックの討伐依頼が着てるから、それを受けようと思ってる・・」

「へえー、イャンクックですか・・私はお留守番ですか？」

普段から飛竜などの討伐依頼を師であるチスが受ける時には経験不足からチスによく留守番を言い渡されるスウは、今回も自分は留守番役を言い渡されると思っている・・

「いや、今回の依頼はお前をメインに行くつもりだ・・」

事も無げにサラリと重要部分を言い渡すチス

「へえー、私がメインですか、そうですか・・・うん？私がメイン

？私がメインでイャンクックを討伐？えっ エエーッ！！！！」

絶叫するスウを尻目にチスはコーンスープを啜る・
と、バン！とスウがテーブルを叩いた・

「師匠！私がメインでイャンクックをつて本当ですかー！？」

「ああ、この前のドスランポスの討伐の時にお前の姿を見てイャンクックを相手にしてもある程度は戦えると確信したからな・スウが弟子入りして三年目だし、そろそろイャンクックとメインで戦わせてみるのもいいと思うんだが・スウはどう思う？」

少し試す様な感じに問うチスにスウは慌てながら答える。

「そ、そりゃあ戦つてはみたいですけど…」

少し煮え切らない回答を得たチスは――

「ふむ・」

と、頷きながらイャンクックについて簡単に説明を始めていく・

「イャンクックは『大怪鳥』という異名の通り鳥の様な外見をし、その体はピンクに近い赤色の硬い鱗で覆われている・

一般的に飛竜として捉えられているイャンクックなんだが、正確にはランポス種など同じ鳥竜種に属している・

では、何故イャンクックが飛竜に捉えられているのか？

それはその攻撃方法や生態が飛竜に酷似している所から着ているからイャンクックはまだ経験の浅いハンターが飛竜と闘う術を学ぶという意味では恰好な教材代わりになる相手だ・」

上手とは言い難いチスの説明を真剣に耳を傾けるスウは

「師匠はイャンクックの行動が飛竜に似てるって言いましたけど具体的に、どういった攻撃をしてくるんですか？」

「イャンクックの攻撃パターンは大きく分けて四つ――

――一つ目は顔を振り上げて火炎液を吐いてくるパターン、これには狙いを定めて打つ時と狙いを定めずにデタラメに打つ時がある。次に二つ目はハンマーの様な嘴で連続してついでくるパターン・

・
3つ目は体を回転して尻尾を鞭の様にしならせて打ちこんでくる攻撃・これは全方向にくる為、慣れるまで非常に避けるのが難しい。最後の四つ目は巨大な体ごと突撃してくるパターン・これはイャンクックが行う攻撃方法の中で最も高い威力を誇っている攻撃なので一番注意が必要だ・とまあ、こんなもんな」

ある程度の説明を終えたチスは一息つきながらスウをチラリと見ると、スウが自信なさげにコチラを見ている・

「師匠……本当に私はある程度は戦える程強くなれたんでしょうか？師匠の話聞く限りまったく勝てる気がしてこないんですが……」

不安がるスウの様子を見てチスはいつもの様に一つ笑みを零し頭を撫でてやる。

「大丈夫だ・お前の身体能力と今までの経験をフルに活かせばイャンクックは勝てない相手ではない・だから自信を持て！」

「で……でも……（ゴス）あ痛っ……！」

まだ少し煮え切らない弟子に入魂と言つ名の頭突きをかます師に弟子は目に涙を浮かべながら師を見る・

「い、痛いですよ！師匠！いきなり頭突きなんて反則です！反則！」

ギヤーギヤーと抗議するスウを少しだけキツイ目をしたチスが論ずる様に話かける・

「三年前にお前が俺に弟子入りを志願した時に語った言葉をもう忘れたのか？一流のハンターに成りたいんじゃないやあなかったのか？答えてみる！スウ・カプリナ！」

「師匠・」

何時もより真剣な師の目に何も言えなくなるスウは三年前に自身が弟子入りを断り続ける師の前で語った言葉を思い出す――

《師匠みたいに強くなって大切な人達を守ってみせる様な一流のハンターに成りたいんです！》

（そうだ・一流のハンターを目指す者がイヤンクック如きで尻込みしてどうする・よし！）

少しずつ表情が引き締まっていくスウを見たチスは目尻が下がりそうになるのを我慢してキツイ目つきで問いたです。

「やるのか、やらないのかどっちなんだ？スウ」

「やります！いえ、やらしてください！師匠！」

スウの返答にニヤリと笑ったチスは「よし!」といいながらスウの肩をガシツと掴んで上体を逸らす!

「えっ、師匠?何を・・・」

「ついでだ!もう一発貰っとけ!」

「いや!師匠!もう気合いは十分入りましたんで結、結構です!」

「問答無用!齒を食いしばれ!」

(ゴスツ)

「ギニャー……!!!!!!」

その日、弟子の成長を嬉しく感じた師匠の気持ちに暴走して理不尽な頭突きが弟子のオデコを直撃した・・・

リオレウスの断末魔の叫び声の様なスウの悲鳴は周辺に響き渡たり、近くにいた住民達は一瞬ビクツとしたが直ぐにチス宅のスウの声だと判断すると皆、頬を緩ませて元の生活に戻っていく・・・

すっかり冷めてしまった朝食を食べ終えた2人はイヤンクック討伐の準備をして竜車に乗り込む。

「忘れ物はないな?スウ」

「ハイ!師匠!」

元氣一杯に答えるスウを見てチスは楽しそうに頷き竜車を出発させる。

「師匠！私はやりますよー！」

スウのやる気に満ちた声が快晴の青空に響いた・・・

第4話 イャンクックの探索とスウの激闘 修正

揺れる竜車の運転席でイャンクック討伐の作戦会議を行うチスとスウ。

「今からお前にイャンクックと戦う際の基本的な立ち回りを教えるからよく聞くんぞ・・スウ。」

「はい！師匠」

「基本的に大体の飛竜は真正面からの攻撃を主体にしている場合が多い、今朝に俺が言ったイャンクックの攻撃方法を覚えているか？」

「えーと、プレスと連続つえばみと回転尻尾・・あと、突撃の4つ・・そうですよ？師匠！」

上目遣いに聞いてくるスウにチスは笑いながら正解の意志を頭をなでる事で伝える。

「その4つ中、尻尾の攻撃以外は全てが正面からの攻撃って事になるから接近戦の場合はまず左横か後ろからの攻撃に徹して、ダウンもしくは畏に掛かった時に弱点部位である腹に攻撃を集中しろ！でも深くは追撃はするなよ。」

相手は最弱と言っても飛竜・・今までお前が戦ってきたどの敵よりも強い。

一瞬でも気を抜くと負けるといふ事を念頭に置いて消極過ぎず積極過ぎずに攻撃するんだぞ！スウ！」

「ハイ！師匠！」

気合いに満ちたスウの返答を聞いたチスは満足したのか弟子の頭を一撫でした後運転に意識を戻した・・・

《二時間後》

密林のベースに到着した2人はアプトノスの手綱を木にくぐり、早速アイテムボックスから支給品を取り出して折半する・・・「今回は閃光玉とか音爆弾とか構色々入っていますね。」

ランポスシリーズに鉄刀（神楽）を装備したスウにリオソウルシリーズと飛竜刀（楓）を纏ったチスが話し掛ける・・・

「閃光玉はいいとしても、音爆弾を使う場合は使った後に必ず怒り状態になるから使うタイミングを良く考えてな・・・スウ・・・」

チスの忠告にコクリと頷いくスウ・・・

《五分後》

ベースを後にした2人は密林の狩猟区域に入りそれぞれ別の区域に別れてイヤンクックの探索を開始する。

本当はチスと一緒に行動したかったスウだが、それでは自分の為にならないと感じてスウからチスに別行動を申し出てた。

チス自身もスウが心配ではあったがスウの気概に押されてこれを許可し、2人は今別々に行動をしている・・・

《sideチス》

スウと別行動をして30分・・

一通りのエリアを探索したが、まだイヤクック発見に至っていないチスは一足先にスウとの合流ポイントに到着し弟子を待つ。

「ふうゝ．．」

と、一息吐き出したチスは辺り一面を見渡してヘルムを脱ぎ額の汗を拭う。

「それにしても、スウの奴遅いな．．」

弟子馬鹿なのかまだ来ない弟子を心配しだす師——すると、合流の為にスウがやって来る筈の方角からペイントボールの匂いが微かに漂ってきた．．

目を細め眉間にシワを寄せたチスはすぐさまヘルムを被り直して急ぎ足にペイントの匂いを追って走り出す！

（どうにか俺が到着するまで持ちこたえろ！スウ！）

心の中でそう叫んだチスは更にスピードを上げてエリアを駆け抜けていった．．

《sideスウ》

師匠と別々の行動をして早20分・

一通りのエリアを探索したがまだイャンクックを発見出来てはいないスウ。

「まだペイントの匂いはしてないから師匠も発見してないと思うんだけど・・・」

自分から別々の行動を言い出したからには何とか師よりも早くイャンクックを発見したいスウは、少し焦り気味にエリアを抜け、最後に自分がまだ探索していない区域に入っていく・・・

スウが入った区域は他のエリアより比較的に広く小川が流れる為ケルビやアプトノスなどの草食動物の水飲み場として活用している。実際に今も数匹のアプトノスがゆったりとした動作で水を飲んでいた・・・

一瞬チラリとスウを見たアプトノスだが、直ぐ危険はないと察知したのかまた水を飲む事に意識を戻すアプトノスにスウは――

「はあゝ」

一人ため息を吐く・・・

「イャンクックを見つけるのって結構難しいな・・・」

一人ボヤきながら水面を見ていると――「バサッバサッ」――突然翼をはためかす音が自身の上空から鳴り響いて・・・水を吞んでいたアプトノスもその音に気づき上空を見上げ急に踵を返し逃げ出す様に走り出す。

スウ自身も上空を見上げて師が言っていた通りの赤色の鳥を確認して一瞬おののくが、直ぐに気を引き締めてペイントボールを取り出す・・

（イヤンクック！見つけた！）

《ズン！》

かなりの重量音と共に降り立ったイヤンクックはスウを見るやいなや甲高い鳴き声を上げてスウを威嚇する！

「クワアッ！クワアッ！」

目の前で威嚇するイヤンクックにスウは取り乱したりせず冷静にペイントボールを投げつける！

勢いよく投げつけたボールはイヤンクックの体に命中しベチャツという音と共に辺りにペイントの匂いが広がる・・

「これで、何も気にしないで戦える！さあ、来なさい！今日のあたしの晩御飯にしてあげるから！」（食うのか？）

威勢の良い声と共に鉄刀（神楽）を鞘から引き抜いて構えるスウと、その啖呵に呼応するようにイキナリ突撃してくるイヤンクック――

「クエーーーーーッ！！！！！！！」

「遅い！」

イヤンクックと戦う事は初めての経験であるスウだが、彼女の持ち味である反射神経と身体能力で難無くサイドステップで攻撃を見切

り回避に成功する。

「クエーーーーーッ!?」

一度加速した体はなかなか止める事は出来ないのか、そのまま木々を薙ぎ倒しながら倒れ込む様にしてようやく停止するイャンクック・

人間ならあれで大怪我をしていてもおかしくないが、イャンクックはまるで何事も無かったように立ち上がり再びスウを睨みながら体当たりをぶちかまそうとする!

「クエーーーーーッ!」

「良いことを教えてあげるわ! イャンクック! 予備動作の大きい攻撃は・・・」 またもや大きく横に飛んで回避したスウは直後に自分がいた場所を通過していったイャンクックに追撃をかますために走り出す!

丁度、彼女から余り離れていない場所に停止したためにそれ程距離を移動する事なく足下にたどりついたスウはその勢いのままに鉄刀を大きくき振りかざし一気に真下へと振り下ろす!

「あたし相手には通じないわよっ! はぁあーっ! ! !」

裂帛の気合いと共に振り下ろされた太刀はイャンクックの硬い鱗に阻まれながらも僅にだが傷付ける事に成功し、スウは続きリズムを維持したまま連続して攻撃を繰り出していく・・・

「はっ! せい!」

三年に渡るチスの地獄の特訓を努力と根性で完遂してきたスウは精密に全く同じ場所に二撃目と三撃目をぶちかます!

たまらず苦悶の声を上げるイャンクックだが、直ぐに闘志に溢れた目でスウを睨み付け尻尾をスウに叩きつけん！

と、体を左に回転させながら尻尾を鞭のようにしならせて襲い掛かる！

——しかし、スウはそれを何と武器を持ったままバク宙で難無く回避に成功する！？

「よつと！」

着地も綺麗に決めたスウはバク宙によって開いたイャンクックとの距離を確認しながらも仕切り直しの意味も込めて太刀を構え直してイャンクックと対峙する・・

イャンクックはイャンクックで自らの攻撃を軽々と回避する自分よりずっと小さい存在に苛立ちながらも・・・

「クエーッ！クエーッ！」

首を大きく持ち上げて火炎液を吐き出してきた！しかし・・・

「言つたでしょ！あたしにそれは通じないっ・・・て！」

予備動作が大きいために何が来るか予測したスウは回避しながらイャンクックに肉迫していく。途中、背後で火炎液が地面に着弾して爆発する音が聞こえてきたが気にせずそのまま前進していくスウは懐に入り込み・・

（狙うはさつき付けた左脚の外側、一点！）

「いきます！そこおおーーーーっ！！！！！」

裂帛の気合いと共に内側から外側に放たれた突きは見事にさつきと

全く同じ場所に直撃して貫通する！

「クエツ！？」

急に足元から襲ってきた衝撃と激痛にたまらずイヤンクックは悲鳴を上げながら横に倒れ込む！

巨体が災いして、なかなか立ち上がる事の出来ないイヤンクックを尻目に弱点部位のある前面に回り込んだスウは容赦なくイヤンクックの柔らかい腹に向かって太刀を振りかぶり・・・

「はっ！せい！やあ！とう！」

弱点部位と言われるだけあって脚と違い一撃ごとに簡単に肉が裂け大量の血が飛び散る様を見たスウは――

（コレなら勝てる！）

予想していたよりもずっと戦えている自分に驚きながらも歓喜しつつ、ある程度自らの勝利を確信したスウ・・・

しかし、この確信が少なからずの油断を誘い数十秒後に手痛いしつぺ返しを喰らう事になるとはまだ幼いスウは知る由もなかった・・・

「まだまだいくわよ！・・・って！？何！？」

更に追撃をかけようとするスウだがイヤンクックから放たれている気配がさつきとは全く違う事に気づき慌てて飛び退く・・・

スウが離れて数秒も経たない内に立ち上がったイヤンクックは嘴の端から火炎液を滴らしながら地団駄を踏むようにその巨大な両脚で地面を踏み鳴らす！

（怒り状態！）

肉体を鍛える特訓以外にも簡単な座学をチスから受けていた事もあってイャンクツクの様子を見て直ぐに怒り状態になっている事を判断したスウは一瞬、怒りが収まるまでは回避に専念してやり過ぐすという考えが頭の中でよぎったが直ぐに、その考えを否定する・

（何を弱気な・さっきまで圧倒的に自分が有利に戦闘を進めてたじゃない！たとえ怒り状態でもさっきと一緒の様な立ち回りをすれば大丈夫！）

スウは知らない・・どれだけ圧倒的に事を運ぼうとも一瞬にしてその戦況を覆す事が可能な存在が飛竜種だと言つ事を・・

「クワアツ！！クワアツ！！」

甲高い鳴き声と共に首を持ち上げて火炎液を吐き出そうとしてくるイャンクツクにスウは・

「少し動きが早くなっているけどさっきと一緒じゃない！もう一回、その傷だらけの脚にキツイのくれてやるわ！」

再び走り出すスウは鉄刀を持ちながら素早く火炎液を回避しつつ前進はするが、さっきよりも明らかに自分の背中に近い位置で爆発する火炎液に驚きながらも構わずイャンクツクとの距離を縮めようとするスウ・

しかし、後10歩という所で何とイャンクツクがほぼ予備動作もなしに突撃してくる！？

「なっ！？・・グフウッ！」

完全に予想外の展開に避ける間も無く直撃して吹き飛ばされたスウは受け身を取る事もかなわず地面に背中からしこたま強く叩きつけ

られる！

「ゲホ！ゲホ！」

背中から落ちたために肺に溜まった空気が逆流して蒸せながらも慌ててイヤンクツクに視線をむけたスウは顔を真つ青に染める・・・

「クワアツ！クワアツ！・・・クエーーーーーッ！！！！！！！」

スウが蒸せている間に既に体制を整えたイヤンクツクは勝利を確信したような目でスウを見ながら突進を繰り返してスウにトドメを刺そうと走り出す！

大ダメージを受けたスウは避ける事も叶わずにただ呆然とその光景をみる・・・

やけにイヤンクツクの動きが遅く感じる。

（コレってもう駄目って事なのかな・・・）

半分死を悟ったスウの頭に自らが師と慕った青年の顔が思い浮かぶ・

ぶつきらばうで手が早く自分が女の子というのに頭突きなんかましてくる人だが誰よりも自分を可愛がってくれた人・・・

「師匠、ごめん《目を閉じる！スウー！！》なさいっ…て師匠！？」

直撃まであと10メートルを切ったと同時にチスの声が聞こえ反射的に目を閉じるスウは直後に強烈な光が瞼越しに広がっていくのを感じる・・・

光が収まったのを確認したスウは恐る恐る目を開くとそこには・・・

「クエツ！クエツ！」

閃光玉によって目を潰されたイヤンクックが苦しそうに悶えている・

「無事か！？スウ！？」

スウの腕を引っ張り上げて俗に言うお姫様だっこをしたチスは心配そうにスウを覗き込みながら問いただす。

「はい・・・師匠のお陰で何とか・・・」

「そうか、無事ならそれでいい・・・飛ばすからしっかり掴まってる！」

「はい！師匠！」

スウの手がしっかりと掴んでいる事を確認したチスは一目散に全速力でその場から逃げ出す！

《20秒後》

閃光玉の効き目が切れてようやく視力が回復したイヤンクックの目の前には後一步の所まで追い込んだ敵の姿はどこにも居なくなっていた・・・

敵を逃がした事がよほど悔しかったのかお昼さがりの密林にイヤンクックの鳴き声が木霊したのだった・・・

第5話 終戦とハンターの大切な事

スウを抱きかかえてベースまで走ってきたチスはそのままテントに付属しているベッドにスウを寝かしつけて、自分は水を汲んで来た後に床に栄養剤グレートとマンドラゴラを広げて秘薬の調合を開始する……

黙々と作業をする師を傍目に弟子は居心地が悪そうに話掛ける。

「師匠」

「うん？どっか痛むのか？スウ？」

「いえ、痛いのは痛いんですけど……何と云うか……その」

「言いたい事があるならハッキリと言っても良いんだぞスウ……」

相も変わらずぶっきらぼうな言い様だが声自体は何時もより優しくに語りかける師にスウは意を決して頭を下げる。

「師匠！ごめんなさい！」

謝るスウを見たチスは彼女が何に対して謝罪しているのかを知らないながらもスウに聴いてみる。

「一体全体お前は何に対して謝っているんだ？」

「せっかく師匠がイヤンクックとの立ち回りと攻撃方法の注意事項を教えてくれたのに、上手く戦う自分に過信してそれを無視して怒り状態のイヤンクックに真っ正面から攻撃して……」

結局こんな有り様を露呈して師匠の足を引っ張った事をです……」

理由を説明していくにつれて泣き出しそうになるスウを見たチスは一つ笑みを零しながら両肩に手を置くと上体を反らす……教育的指導という名の頭突きが飛んでくる！と、感じたスウはグツと身を強張しながらきつく目を閉じ歯を食いしばって衝撃に備える。

《コツツ》

何時もよりかなり控えめな音と共に軽い衝撃がスウを襲う。

「師匠……なんで？」

不思議そうに師を見上げる弟子を見てチスはニヤリと笑いながらスウのオデコにトン……と、人差し指をぶつけて口を開いた……

「俺も初めてイヤンクックと戦った時に同じ様な失敗をしたから……だからお前を怒る事なんて俺には出来ない……」

「えっ！師匠もイヤンクックと戦って同じ様な失敗をしたんですか！？」

驚く弟子に師は苦笑いを浮かべながら簡単な説明をしだす。

「ああ、俺がイヤンクックと初めて戦った時は俺を含めて幼なじみと合計2人で戦ったんだが——その時にお前と一緒に様な感じになってな……イヤンクックに倍返しを受けた苦い記憶がある……」

「へえ！師匠にもそんな時があったんですね。」

「当然だ……俺とて、いきなり全てを上手にこなしていた訳じゃな

い・・・星の数ほど失敗し、仲間に助けられて此処まで成長できた・・・
だからお前も失敗なんて気にせずには次はどう立ち回るかを考える！
そっちの方が大切だろ？な！スウ・・・」

バシバシと背中を叩きながら落ち込んだ弟子を励ますチスにスウも
つられて少しだが笑顔を取り戻してコクリと頷き・・・

「ありがとうございます！師匠！」

自分を気遣ってくれた師に礼をいうスウにチスは照れくさいのか後
頭部をポリポリと掻いた・・・

《10分後》

秘薬の調合を終えて、それをスウに飲ましてダメージを完全に回復
させたチスはスウを連れ立って再びペイントの匂いを辿っていき――

2人はさつきとはまた別の小川が流れる区域に出る・・・

そこにイヤンクックはいた！

まだ此方に気付いてないのか、全く無警戒に水を呑んでいる・・・

2人は茂みに隠れて作戦会議を始める。

「スウ・・・お前ならどうする？」

チスの問いにスウはハッキリとした口調で・・・

「音爆弾を使います！」

少し予想外の返答に驚きながらも更にチスはスウに問いたです。

「良いのか？説明したと思うが音爆弾を使ったら数秒間は無防備になるが、そのあと必ず怒り状態になるんだが・・・本当に使うのか？」

「はい・・・確かにさっきの事を思い出したら足が震えそうぐらい怒り状態は怖いです・・・けどこれ乗り越えないと私はいつまでも前に進めない様な気がするんです！」

だから！音爆弾でいきます！」

確固たるスウの答に納得したチスは自分を成長させようともがく弟子の姿を嬉しく感じ・・・啖呵を切る！

「上等だ！お前の考え口先だけじゃあないっていうのを俺に見せてみる！いくぞ！スウ！」

「はい！見ていて下さい師匠！」

一斉に茂みから飛び出した2人はイャンクック目掛けて走り出す！イャンクックも此方に気付いたのか2人を睨みつけ大きく翼を広げてながら鳴き声をあげて威嚇してくる！

「クワアッ！クワアッ！」

そんなイャンクックにポーチから音爆弾を取り出して投げつけるスウ！

「さっきは、よくもやってくれたわね！これはそのお返しよ！喰らいなさい！」

言葉と同時に投げつけられた音爆弾は綺麗な放物線を描いて飛んでいくとイヤンクツクの眼前でキン！という音と共に爆発すると・・・

「クエツ！？」

人間には無害だが聴覚の発達したイヤンクツクにはかなりヘビーな音だったらしく悲鳴をあげて棒立ちなるイヤンクツクにチスはその柔らかい胴体に目掛けて飛竜刀（楓）を渾身の力で叩きつける！

「おっしやーっ！！」

勢いの乗った横からの一閃は軽々と腹を突き破ると同時に刀身から炎が燃え上がり傷口を焼いていく・・・

苦悶の表情を浮かべて膝をつくイヤンクツクの顔面に更なる追撃を仕掛けるスウ！

「喰らいなさい！ハアアーッ！」岩さえ砕かん勢いで縦に振られた一撃はイヤンクツクの嘴に直撃して大きな亀裂を走らせる！

「クエーー！！」

耳をつんざく様な悲鳴をあげたイヤンクツクは音爆弾の効果が切れたのか翼をはためかして後ろに飛び2人から一旦距離をはなした後、溢れんばかりの殺意に満ちた目を向ける。

その嘴の端には火炎液が溢れている・・・

「怒り状態だ！気を引き締めろ！スウ！」

「はい！」

仕切り直しに太刀を構え直しながら話掛ける師とそれに答える弟子・・・

全く一緒の構えをする2人に怒り状態のイヤンクツクはその巨体を

ぶちかまそうと走り出す・

しかし、それを別々に左右へ移動して回避するチスとスウは追撃の為に自分達の間を通過していったイャンクックに向かって走り出すも、怒り状態のイャンクックはすぐに体勢を立て直して左右から近づいて来る2人の内、スウを睨みつけながら前にステップを踏んでその巨大な嘴を叩き込みんと振り下ろす――が、

「見切った!!」

バックステップと同時に放たれたスウの横からの一撃は振り下されたイャンクックの嘴が地面に降りてくるタイミングを見計らうかの如く完璧なタイミングで直撃する!

「クエツ!」カウンター気味に入った一撃にたたらを踏んだ様に一歩後退したイャンクックはスウに向かって首を持ちあげて火炎液を無茶苦茶に吐き出してくる!

(これじゃあ近づけない!)

攻めあぐねる弟子は視界の端にイャンクックの後方から凄まじい勢いで足下に入り込んでいく師を捉えた!

「師匠!」

「キツいのいくぞ!近距離刺突!!」

凄まじいスピードで放たれた刺突は全く無防備だったイャンクックの左脚を貫き焼き払う・

「クエツ―!」

悲鳴と激痛に体を地面に投げだしてもんどりうつイャンクックを見たチスはスウに向かって叫ぶ！

「ここで一気に体力を削るぞ！気張れよ！スウ！」

「はい！師匠！」それぞれ腹部と眼前に回り込み総攻撃を開始するチスとスウ・

「はあっ！せい！やつ！とう！」

「クゲツ！クゲツ！」

力の限り嘴に連続攻撃を叩き込むスウにイャンクックは悲鳴にならない鳴き声をあげ・・・

怒涛の連撃によってイャンクックの嘴の亀裂が深さを増していくのとスウの錬気が溜まるのはほぼ同時のタイミングだった・

「あい！一閃！ハアー！ー！ッ！！！！」

満を期して錬気を解放したスウの気刃斬りは一閃毎にイャンクックの嘴を的確に捉えて遂にはその嘴を砕いた！

「クゲー！ッ！！ゲボッ！」

己の絶対的な武器である嘴を砕かれたイャンクックは血反吐を吐き散らしながら立ち上がり、片足を引きづりながら何とか2人から逃げようと半狂乱的に走り出す・・・が、

「逃がすわけねえだろ！どっせい！」

「クボアツ!？」

片足を引きづっているためそのスピードは遅く簡単にチスに回り込まれて腹部に強烈な突きを受け・

今までの蓄積したダメージによってまるで尻餅を付いた様に座ってしまったイヤンクツクはそれでも何とか立ち上がろうともがくが気が動転しているのか上手く立ち上がれない・

苛立つイヤンクツクは視界に自分に向かって走るスウを捉えて顔を恐怖に歪ませる。

「決めるよ!スウ!」

「はい!任して下さい!」

イヤンクツクの顔付近に到着したスウはその勢いのまま大きく跳躍し鉄刀(神楽)を振り下す!

——この光景がイヤンクツクが最後に見たものだった・

「これで終わり!あんたの負けよ!ハアーツ!」

勝利を確信して振り下された一撃はイヤンクツクの顔を真つ二つに切り裂き・断末魔の悲鳴をあげる間も無くその四肢を地面に投げだしたイヤンクツクは数秒間ピクピクと痙攣したあと全く動かなくなる・

「はあ・・はあ・・」

肩で息をしながら、その姿をただ呆然と見詰めるスウにチスは・

「依頼達成だ。良く頑張ったなスウ・」

ポンと肩に手を置いて労いの言葉をかけそんな師に気づき慌てて返事を返す弟子は・・・

「あつ・・・有り難うございます。師匠・・・」イヤンクツクの討伐に成功したと云うのにあまり喜んだ様子を見せない弟子にチスは一人頷き・・・

「可哀想に思うか？」

ハツとした様に顔を上げたスウに更に言葉を繋げるチス・・・

「可哀想に想うならお前が目を閉じてやれ・・・それが命を奪った側の牽いてはハンターの責任だ・・・」

チスの言葉にこくりと頷いたスウは割れてしまったイヤンクツクの顔に近付いて小さな声で呟く――

「あんた、中々強かったわよ・・・だからゆつくりと休みなさい・・・」恐怖に歪でいたイヤンクツクの目をソツと閉じて此方に振り返ったスウの頭の上に手を置いたチスはヘルム越したが優しく微笑んで頭を撫でながら論ずる様に口を開いた・・・

「今の気持ちを大切にするんだぞスウ・・・その思いこそハンターにとってが一番大切な事なんだからな・・・」

「はい、師匠・・・」

チスの言葉に今度は上手く笑えたスウは恥ずかしながら嬉しいそうに頷く。

そんなスウを見るチスは二カツと笑って

「じゃあ、この話はコレでošimai!今日はもう日が暮れてしま
そうだから、剥ぎ取りを済ましたらベースで一泊して明日の朝に帰
ろう・・何か質問はあるか?スウ?」チスの問いにスウは――

「あのゝ師匠・・食事当番は・・」

と、遠慮がちに聞いてくる・・

そんな弟子にニヤリと笑った師は

「今日のスウは頑張ったから、夕飯は俺に任しておけ!」

「本当ですか?有り難うございます!師匠!」

(基本的にスウよりチスの方が料理は得意な為)

喜ぶ弟子を見たチスは目尻をさげて笑いながらスウに告げた。

「じゃあ、まあとりあえず剥ぎ取りをしていくか!いくぞ!スウ!」

「はい!師匠!」

日没も近い密林にスウの元気な声が響き2人は仲睦まじそうに剥ぎ
取りを開始するのだった・・

第5・5話 師と弟子の朝の攻防戦

チスとスウがイヤンクツクの討伐に成功して、早2ヶ月・・
あれから更に3頭のイヤンクツクを討伐した2人は久しぶりの休日
を思い思いに過ごしていた。

《AM8:00》

休日という事もあって少し遅めに起きたチスはまだ眠たそうな目を
擦りながら洗面所に向かう・・

《AM8:30》

朝シヤンと洒落込み適当に朝食の準備を始め様とするチス――
そんな彼に突然の来客が・・

「おはようございますだ！チスの旦那！」

「おはようございます。漁長・・こんな早くに一体どうしたんです
か？」

突然の漁長の来客に驚いたチスが問いただと、

「いや、活きの良いアワビと蛸が手に入ったんでそれのお裾分け
です」

アワビと蛸がそれぞれ入った籠を掲げてこちらの問いに答える漁長
にチスは頭を下げ・・

「いつも、わざわざすみません・・」

「な、スウちゃんやチスの旦那にはいつも世話になっているん

だから、気にする事は何もないでさー」

景気良くバシバシと背中を叩く漁長にチスも笑みを浮かべて・

「有り難う御座います。早速、今日にでも頂きますね。」

「応！それでスウちゃんに旨い物でも食べさしてあげて下さいや！それじゃあ、俺は他にもお裾分けする人がいるから今日はこれで失礼するな！チスの旦那もまた今度一緒に酒でも飲みましようや！」

「はい！その時は俺が奢りますから楽しみにしてて下さいね！漁長」チスの返答に豪快な笑い声をあげて漁長は軽く手を振って去って行った。

「アワビを調理するの久しぶりだな・・・何で食おうか？」

家に入った後、とりあえず蛸を氷結晶で冷やした冷蔵庫に突っ込んでアワビを使って朝食に取り掛かろうとするも調理方法に悩むチスは暫くて・・・

「粥にでもするか・・・」

《AM9:30》

とりあえず、いい感じに磯とごま油の香りが食欲をそそるアワビ粥を完成させたチスはまだ爆睡と洒落込む弟子を叩き起こす為に二階へと上がる。

「入るぞ？スウ？」

「・・・・・・」

返事が無いためとりあえず無断で部屋に入ったチスは今だグッスリ

と眠っているスウのこんもりと膨らんだベットに近付いて大きく息を吸い込み・・・

「ほら！もう朝だぞ！さっさと起きろ！スウ！」

「ZZZ・・・」

結構大きな声で起こしにかかるが全く反応を示さないスウにチスは布団を奪いに掛かるという実力行使に出る！・・・が、敵もさることながら体を布団に巻き込んでそれを阻止しせんと抵抗を開始する・・・両者の攻防は一分ほど続き師が有利になり始めた！

「いい加減！大人しく観念《邪魔！！》ぐぼ！！！！！！！！？」

あともう少しで勝利を掴み取れそうだったチスに突如として強烈な蹴りが放たれその一撃は股間にピンポイントでクリーンヒット！

「おっ・お前！そこは反則だろ！」

男にしか痛みが解らない男子最大の急所を押さえて苦悶の表情を浮かべ悶えるチスは眠っているスウを鋭く尖った目で咎める・・・

が、其処にはまるで何事も無かった様に幸せそうな顔で眠っているスウ・・・

・
観ようによつてはまるで邪魔者を排除した様な爽快な表情に見える・

《ブチッ》

頭の中で何かが切れる音がした

疾風の如きスピードで一階に降り立ったチスは冷蔵庫から蛸の入っ

た籠を取り出してそこにごま油を投入し、すぐさま二階に駆け上がりスウの顔面に向かって籠の中身を放り投げる！

ひゅー・・・ベチャツ！

籠の中から飛び出したごま油タツプリの蛸はスウの顔面にピンポイントで着弾し――

その日の昼間、カコ村に今までに類を見ないスウの絶叫が響き渡る・

でも、村人は誰も気にしない・

何故ならその声はチス宅のスウの声だと分かっているから・・

ちなみにこの日のチスとスウの夕飯はごま油をよく効かした蛸とパプリカのガーリック野菜炒めだったとさ・・・

第6話 ドントルマでの墓参り

大陸最大の都市ドントルマの様々な商店が立ち並んだ街道をチスはひとりでに歩いている・・・

何時もと違うフルフルシリーズに黒刀（終の型）を身に纏った姿でスウを連れ立っていないのか何時もよりかなり足早に歩くチスは一角の店の中に入って行き・・・

「うつ！」

店に入ったチスは店内の独特な香りに一瞬顔をしかめそうになるが、直ぐに気を取り直して店員の女性に話し掛ける。

「もし、」

「いらっしやいませ！何かお困りですか？お客様？」

「墓参りに適切な花を一束ほど見繕って欲しいんだが・・・」

《30分後》

花屋を出たチスはその足で酒屋に寄り一升瓶を購入してドントルマの街の外れを足早に歩いて行く。大陸最大の都市と言えどもその全てが活気に満ちている訳では無く、外れに出ると霊園がある事もある。逆と言っても差し支えがないほど静寂に包まれていた・・・

霊園に着いたチスは墓を管理する神父に軽く挨拶をした後に目的の

場所に向かう・・・と、暫くして霊園の一番奥にたどり着いた彼は目的地に着いたのか徐に足を止めて3つの墓石を前にして言葉を掛ける・・・

「久しぶりだな みんな」

感慨深げに目を細めたチスは2つのグラスに酒を注ぎ、それぞれ左と中央の墓石に供え、最後に右の墓石に花束を置いた・・・

「本当はもつとちよくちよく来たいんだが、如何せん今は村の依頼とかスウの面倒でちと忙しくてな・・・」

バツが悪そうに後頭部をボリボリと掻いたチスは次の話題を思いついたのか手をポン！と叩きながら話し出す。

「あつ！そうそう、スウで思い出したんだが最近イャンクックを倒せるぐらいに成長したんだぞ！結構順調に来てるだろ？」

弟子の話をする師の目はどこか、嬉しそうに細められているも・・・全体の雰囲気としてはどこか寂しそうに話すチス・・・

「——イャンクックを相手に必死に戦っているスウを見てたらな・・・初めて二人でイャンクックを討伐した時を思いだすよ・・・」中央の墓石を懐かしむ様に眺めていたチスは一息入れ、その視線を右の墓石に移す・・・

「あれからもう四年・・・早いもんだな・・・気を抜いたら俺も一瞬でオッサンになってしまいうさだ・・・ハハッ」

自嘲気味に笑ったチスだが、直ぐに溜め息を吐いてその笑みを消して呟く・・・

「何だか俺1人だけ年を取ってしまったみたいだ・・・はぁー、お前らが生きていてくれたらこんな気持ちにはならなくて済んだのかもしれないな。まあ、でも折角お前達に救って貰った命なんだから、取りあえず精一杯やれる所まで自分なりにやってみるよ・・・」

よし！と立ち上がって墓石の清掃に取り掛かろうとするチスの背に一陣の風が吹き荒れ・・・

何気なしに振り向くと其処にはS・ソルZシリーズをその身に纏った藍色の髪と瞳を持つ美女が見るからに高貴（良い意味）そうな美少女を守る様に引き連れて此方に向かって歩いて来ているのに気付く・

「げっ！」

知っている顔なのかチスは美女と美少女を目にした瞬間に顔をしかめる――が、向こうは構わずグングン此方に近付いて来て・・・

「久しく会っていないというのに私をみて第一声が『げっ！』とは随分な反応ですね、チス・リエーテ・・・」

藍色の目を少し吊り上げ気味に話した美女にチスはタジタジになりながら言葉を返す。

「何の前ぶれも無しに泣く子も黙る『藍色の双魔』がシュレイドの姫様を連れ立っていきなり現れたら誰だってこんな反応をしてもしょうがないだろ？相変わらず子供つけしなさそうだなソシエッテ・エーテルハイム」

「貴様！？」

「まあまあ、2人共落ち着いて下さい！ソシエツテ・・・お願い・・・ねっ！・・・」

「姫様！しかし！・・・うつ！いえ、わかりました・・・」剣呑な雰囲気になりかけた2人に割って入った美少女はソシエツテを宥めにかかり・・・

ソシエツテはソシエツテでまだ言いたい事はあったが主君の懇願する様な視線に負けて渋々押し黙った・・・

ソシエツテを宥める事に成功した少女は此方に振り向くと仰々しく頭をさげながら挨拶をする。

「お久しぶりですねチス・リエーテ・・・またアナタに逢えた事を嬉しく思います・・・」

一国の姫君に突然頭を下げられたチスは慌てて自分も片膝をつけて返事を返す。

「私にはもつたいたない御言葉ですアルフィーナ姫・・・しかし、その御言葉嬉しく思います」

チスの言葉にフツツと笑みを零したアルヒイーナは手に持った花束をそれぞれの墓石に添える・・・

「シウルツ・ハイネ、テソ・パイロン、レイラ・アンスリウム・・・かつてのG級ハンターが4人も集り、今をもつてしても大陸史上最強の呼び声名高い伝説のハンター集団《4カード》に我がシュレイド王国史上最大の災厄から救われてから四年・・・季節が流れるのは本当に早いものですね」

「《漆黒の暴君》 《槍の守り人》 《黄金の戦乙女》 そして言いたくはないが《赤い影》・・・ドントルマのハンターは当然にして一般の人々からも今尚絶大な支持を得ている事を見てみると・・・会う度に聞いているが本当にドントルマに戻ってくるつもりは無いのか？」

もう何度も答えているのかめんどくさそうにチスはソシエツテに言葉返す

「ああ、今の村を気に入っている事が第一だが、どうも俺はこの街には慣れそうにないっていうのが本音だ・・・」

「そうか、残念だ・・・」
肩をガツクリとおとすソシエツテを見たチスは燦しかげに問う。

「お前、なにか企んでいるだろ？」

「なっ！G級ハンターの貴様が戻ってきたら、厄介な依頼は貴様になすりつけて、自分は姫様の護衛に専念しようなんて少しも思っていないぞ！」

「この野郎！？考えている事がモロに口から出てるぞ！大体、お前もG級ハンターの1人だろ！何を人に厄介事を押し付け様としてやる！」

「非常に残念だ・・・」

「人の話を聞け！？」

更にギヤーギヤーと言い争う2人を傍目に見ながらアルフィーナは頭を押さえて嘆く様に呟く

「これが我が大陸が誇る10人といないG級ハンターの2人だと思うと・・・あ、頭痛い・・・（ゴーン、ゴーン）あっ！」

街の中心にある時計塔の鐘の音が耳に届いたアルフィーナは何かを思い出したのか頭を押さえていた手をパン！と合わせて

「いけない！もうこんな時間！急いで城に戻りますよ！ソシエツテ！」

「はい！姫様！」

それまでチスと言い争っていたソシエツテもこの姫の一声にすぐさま反応してアルフィーナの後ろに控える・・・

「チス・リエーテ・・・突然で申し訳無いのですが私はこれからギルドマスターとの会合があるので礼を反する事になりますが、これで失礼します・・・」

「あつ、はい！またお会い出来る日を楽しみにしています・・・」

いきなりの状況変化に余り着いていけずに取りあえず生返事を返すチスにアルフィーナは軽く一礼してからソシエツテを連れ立って足早にその場を後にする・・・

と、思ったら何故かソシエツテが急に此方に戻って来ていきなりチスの手に一枚の報告書の様な紙を握らせる。

「何だ？この紙は？」

「墓石の清掃が済んだ後にも目を通してみるといい・・・曖昧な目

撃情報でハッキリとした物ではないが一応は念の為だ・・・」

「そうか・・・わざわざありがとな！ソシエツテ・・・」

何時になく真剣なソシエツテを見たチスは何となく中身が解つたのか素直に礼をかえす・・・

「べつ・・・別に貴様の為という訳ではないからな！そこら辺は誤解するなよ！でっ、でわ！わ、私は姫様の護衛に戻らねばならないからコレで失礼する！」

何故かは判らないが顔を真っ赤にしたソシエツテは走り去っていく・・・その姿を見たチスは小首を傾げる。

「どうしたんだ？アイツ？・・・まあ、いいか・・・それより墓石の清掃を始めるとしますか！」

《一時間後》

かなり念入りに墓石を磨き終えたチスはいっ先程ソシエツテから受け取った紙に目を通して・・・

「鋼龍か・・・」

読み終えたのか紙を畳んで懐にしまったチスは墓石に視線を移し語りかける・・・

「もう少しゆっくりしていくつもりだったが、そうもいけなくなってしまった・・・どうやら古龍が東北の地方で目撃されたみたいだ・・・」

一応、大丈夫だとは思うが万が一という事もあるかもしれない・
だから今日の所はこれで帰る事にするよ・

じゃっまた何かあったらくるから、また・・なっ！シュル、テソ、
レイラ・・」

再会の言葉を残し踵を返して霊園を後にしたチスの後ろ姿はやはり
どこか寂しそうだった・

第7話 誇り高き少女の出会いと古龍接近の危機

《am8:00チス宅中庭》

朝一番の中庭からスウの威勢のいい掛け声と共に振り下ろされる木の音が辺り一面に響き渡る・・・

「997・・・998・・・999・・・一千！！・・・ふっ終わったあゝ！」

鍛錬の過程が終わったのか、もう動けないとアピールする様にへたり込んだスウは額に浮かんだ大粒の汗を拭う事もせずにそのまま大の字に地面に寝転んでポケーツと空を見上げる・・・

「うっっんっ！今日も快晴！お日さまがポカポカしてて気持ちいい・・・」

日向ぼつこの様にそのまま目をつむってまどろむスウ。暫くして・

「zzz・・・」

（寝てる！？）

《am9:00》

ガランガラン・・・ガランガラン・・・

「うみゆう？・・・」

安眠中の眠りを妨ぐ来訪者を告げる大きな鈴の音に眉間の皺を寄せ
て目を擦りながら起きたスウは玄関に向かって歩き出す・・・

ガランガラン・・・ガランガラン・・・

「はぁーい、今開けますよっと！」

扉を開けると其処には――緑色の鎧を着てガンランスを背負つ
た銀髪の美少女が一人・・・

「どちら様ですか？」

同年代っぽく見えるが一応初対面なので敬語で尋ねるスウに少女は
即座に返答を返すと・・・

「リーネ、リーネ・アンスリウム、それが自分の名だ・・・突然の来
訪で失礼だが此処に居るはずのチス・リエーテという男に会わして
欲しい・・・」

「師匠？師匠だったら今はドントルマに昔の仲間に出会に行くって
言っ出てったきりまだ帰って来てませんけど・・・何かご用ですか
？」

その言葉に顎に手を添えてすこし考え込む素振りを見せたリーネ・・・

「そうか・・・君は彼からいつぐらいに帰ってくるなどは聴いたりし
ていないのか？」

「うーん一応師匠からは今日の夜から明日の朝までには帰るって聞いてますけど…」

「ふむ・・それなら今日の所はこれで失礼して明日の朝にでもまた来る事にしよう・・邪魔したな」

「あつ はい・・」

そのまま歩き出すリーネをただ呆然と見送るスウ・・・が、何故か歩みをとめたリーネは顔を真つ赤に染めて戻って来る・・・

「どっ、どうかしたんですか？」

スウの問いに未だ顔を真つ赤に染めたリーネはぼそぼそと一人言の様に喋りだす・・

「・・・・か・・・がい」

「かがい？」

「き・・や・・・・が・・い」

「きやがい？」

「今日宿を借りる金もない事に今さらながら気付いたんだ！だから助けてくれ！」

「・・・・・へ？」

《am10:30》

「ハア~~~~ツ・・・」

リビングに深いため息を落としたスウは自分の目の前で幸せそうにケーキを頬張る銀髪の少女に視線を移し話を掛ける・・・

「おいしい？」

スウの問い掛けに表情を崩しながら答えるリーネ・・・

「うむ！実に美味しいぞ！今まで色々な街や村で甘味を食べてきたがこの村のケーキは五本の指に入るぐらいには美味しいぞ！」

「そう・・・そりゃあ美味しいわよね　酒場の女将さんがあたしの為にわざわざ丹精込めて差し入れてくれたケーキをあたしの分も残さずに1人で全部食べれば・・・」

じと目で睨むスウにたじたじになり慌てるリーネ・・・

「うつ・・・済まない・・・余りに久しぶりに美味しい物を口にいらしたので周りが見えずについ君の分まで食べてしまった・・・本当に済まない・・・えーと」

「スウ・・・スウ・カプリナ、それが私の名前・・・」

「ほう、そうか・・・どちらにしても自分が悪かった・・・本当にすまないスウ。」

「もういいよ・・・それより折角こうして会えたのも何かの縁だしリーネの事を教えてよ。」

「自分の事を？」

首を傾げるリーネにスウはニコリと笑いながら頷く・

「だって、その防具と武器を持つてゐるって事はそれそう応の経験を積んでゐるって事でしょ？聴きたいな〜リーネの事・」

近衛隊正式銃創とレイアシリーズに視線を向けてねだるスウに少し困ったような顔を浮かべるリーネ・

「自分の話なんてあまり楽しい物でもないぞ。第一ハンターとしての話なんてスウの師匠に比べたら全然たいした事の無い話ばかりだし・」

「それはそれ、これはこれ！私としては今リーネの事を知りたいの！それに師匠はあんまり昔の話をしたがないし、だからいいでしょ！ねっ？」

尚も迫るスウに根負けしたのか一つため息を吐くリーネ・

「やれやれ・最初に話した通りあまり楽しい話じゃあないが後で文句なしで頼むぞ・」

「うんうん！じゃあ冒頭は自己紹介と家族構成からいつてみよー！」

「自己紹介？うん、リーネ・アンスリウム・17歳だ。家族構成は姉が一人居た・」

「へえ〜あたしと同じ歳なんだ〜じゃあ次は・」

《p m 1 : : 3 0 》

リーネの話を一通り聞いたスウ・・・今はリーネを挟んでスウが作った昼食に洒落こんでいる・・・

「なかなか美味しいぞスウ・・・」

満足げに頬張るリーネにスウは――

「えへへ、そう？そう？」

と照れる・・・

《p m 2 : 0 0 》

「さて、昼食も食べた事だし今度はスウの話を聞きたいものだな・・・

」

「へ？あたしの話？」

「ああ、自分だけ話したただけならイーブンじゃあないような感じがしてな。だから今度は君の話を聞きたい。」

「ううあんまり大した事も無い話だよ？」

「構わないさ・・・音に聴こえし《赤い影》の唯一の愛弟子がどの様に鍛え上げられてきたのかを楽しみにしているだけさ・・・」

「ちよっ！逆にそれプレッシャー！？」

慌てるスウを見てクスクスと笑うリーネとつられて笑ってしまうスウ・・

「じゃあ何か《バン!》・・ら?」

「ぜえぜえ・・大変だ!スウちゃん!!」

イキナリ玄関のドアをぶちやぶらんの如く乱入してきた人物は・

「村長?イキナリそんな荒てて入ってきてどうしたんですか?」

「スウちゃん!!大変なんだ!さっき観測隊の人達が来て・・こゝ、古龍が・・古龍が村の近くの密林地帯で発見されたって・・」

「古龍つて・・あの古龍がですか!?」

村長の言葉に心底驚いたスウの声が部屋の中で響き渡る・

「兎に角!今村のみんなを広場に集めているからスウちゃんも早く来てくれ!」

「はい!準備ができしだい私も直ぐに広場に行きますから村長は先に行つて下さい!」

「わかった・・じゃあ僕は先に広場に向かう事にするよ・・くどい様だけど時は一刻を争う事態だからなるべく早く頼むよスウちゃん・
・それじゃ!」

何時もは何事にも動じない村長が慌ただしく出て行くのをいよいよ大事だと感じたスウは振り返りリーネに話掛ける・

「リーネごめん！さっきの話はまた今度・・・って！何をやる気満々の目になってガンランスを整備し始めてるの！？」

なぜか既に完全武装してガンランスの手入れを開始していたリーネはスウの一言にキョトンとした表情を浮かべる・・・

「何をつて・・・スウが準備して行くという事は君が古龍と戦うという事だろ？だったら自分も共に戦おうと思ったんだが・・・」

「戦うってそんな簡単な・・・古龍がどれほど強大な存在かリーネは知ってるでしょ？」

「無論知っているぞ。」

「だったらどうして？」

スウの問いに軽く微笑んだリーネはその問いに答えを返す為に言葉を紡いでいく・・・

「一つ目はケーキのお礼・・・二つ目はここを潰されたら泊まる場所が無くなる・・・最後に三つ目は極端に時間は少ないが自分はスウの事を友達だと思っているから・・・それだけでは駄目か？」

「友達？・・・」

「違うのか？自分はスウの事を気に入っているんだが・・・」

「うっん、リーネはあたしの友達だよ・・・出会って極端に時間は短いけど・・・」

スウの言葉にフツと笑うリーネ・・・

「だったらスウが自分にかける言葉は一つしかないだろう？」

「うん！・・・あたしと一緒に古龍と戦って！リーネ！これは友達としてお願い・・・きいてくれる？」

「・・・ああ！微力ながら君に力を貸させて貰う事をアンスリウムの名に賭けて誓うよスウ・・・さあ、早く準備をして広場に向かおうきつと今頃村長や村の皆が君の到着するのを首を長くして待っている筈だから・・・」

「うん！直ぐ準備するから待っててねリーネ！」

慌ただしく自分の部屋に入って行くスウの後ろ姿を見たリーネはクスツと一つの笑い声を落とした・・・

第8話 勝率0%の古龍討伐戦

あれから素早く準備を終えたスウはリーネを連れ立って急ぎ足に広場へと向かう・・・

スウとリーネが広場に到着すると其処には既に殆どの村人が集まっていた。中心部の壇上では村長が村人の全員に古龍接近と避難勧告が下された事態の説明が行われ様としている・・・

「もう知っている人もいるかもしれないけど・・・つい今しがた古龍観測隊の人達が来て風翔龍クシャルダオラがこの村のすぐ近くに位置する密林地帯に現れた事がわかった・・・」

ざわざわ・・・

その言葉を聞いた瞬間にざわめく村人達に一瞬苦笑いを浮かべながらも構わず言葉を続ける村長・・・

「ついでに言うとは避難勧告も受けていて更に最悪のタイミングで村のハンターであるチス君も不在と来ている・・・
はてさて、避難するにも今すぐに出来る訳でもないし、どうしたものかね・・・誰かいい意見はある？」

「はい！村長！」

元氣一杯にあげられたスウの手と声にその場にいる村人全員の視線が集まる。

「あたしが密林に向かってみんなが避難する時間を稼ぎます！」

「へ？」

《pm4:00密林地帯》

結局村長や村人の反対を押し切ったスウは現在リーネと一緒に件の古龍の搜索を開始していた・・・

「そー言えばリーネは古龍と戦った事ってあったりする？」

「ない！」

「えらく即答だね・・・」

「しょうがないだろ・・・元来古龍の討伐依頼は基本的にはG級のハンターが受注するものだ・・・今回の様に緊急の事でもないかぎり自分は勿論スウにしても戦う事など皆無なんだから・・・」

「うーん・・・そっか、じゃあ今から戦う風翔龍の噂とかを聞いた事は？」

「噂？」

「うん 特長とか姿とか攻撃方法とか・・・」

スウの質問に顎に手の甲を当てて自分が聞いた事のある噂を思い出しながら話し始める・・・

「あくまで人から聞いた話だが・・・姿形としてはリオレウスやリオレイアの様に典型的な竜の容姿をしていると聞いた事がある・・・

特長としては全身を鋼の鱗に包まれて生半可な武器での攻撃は傷を

つける事もかなわないとか、風を自由自在に操る事が出来きて近接武器では肉迫する事も出来ないらしいとか・・・」

「ほえ、じゃあ殆ど死角が無いって事になるのかな？」

「まあ完全に死角が無いって訳でもないらしい、例えば頭部へのダメージや角の部位破壊、毒状態で風の鎧自体は除去できるそうだがそれでも・・・」

「鋼の鱗に覆われている本体に攻撃を届かせる事は難しい・・・」

「そういう事だ・・・言いにくいが自分とスウでは勝率に例えらば0%と言っても過言ではないというのが現実だ・・・」

リーネの言葉に落ち込みを見せるかと思われたスウだが以外にも全くそんな様子を見せないスウ・・・
不思議になったリーネはとりあえずスウに尋ねる・・・

「スウ・・・君は今の話を聞いて恐怖心やそういった類いの物はないのか？」

「うん！ぜんぜん！」

「完全否定か・・・どうして其処まで落ち着いた精神状態でいられるのか自分としては気になるんだが・・・教えてくれないか？」　リーネに問われたスウは一つ笑みを落として答えを返した・・・

「だって今回の目的は村のみんなが避難する時間を稼ぐ事であって勝つ事ではないから・・・」

「そのイヤンクツクの装備では古龍の一撃でも受ければ死に直結する傷を受けるとしても？」

「うん．．その前にきつと．．きつと師匠がきてくれるって信じてるから．．」

「信頼してるんだな 師を．．」

一瞬呆れた表情を浮かべたリーネにスウはまた一つ笑みを落とす言葉で言葉を繋いでいく．．

「うん！それに今回はリーネもいるからね！」

「なっ！？．．ふふっ．．せいぜい君の期待に応えられる様に善処するでしょう．．」

「うん！してして！．．つと？雨？．．」

話が盛り上がる中で突然スウの鼻の上に雨粒が一粒一粒．．やがて急激に雨足は強くなっていく．．

「何故にいきなりドシャ降り！？．．うゝ、この雨じゃあ一旦ベースに戻ったほうがいいかもしれないね？リーネ．．」

問いかけるスウをチラリと見たリーネは問いには答えずまるで気配を探る様にあたり一面に視線を移していきやがて上空の一点で止まる．．

スウもリーネの視線たどっていき．．固まる．．

「．．どうやらベースに戻っている暇は無さそうだなスウ．．」

「うん．．あれが風翔龍．．」

上空の一点からゆつくりと翼をはためかし下降するそれ・全身を隙間なく包んだ黒き鋼の鱗はいかなる攻撃をも弾き返さんと云う威圧感を放ち、その海のように深い青色の瞳は自らの領域に入った愚かな侵入者である二人をハッキリと見定めている・

「■■■■■■——！！！！！」

形容しがたい雄叫びで威嚇したクシャルダオラは地面への着地と同時に竜巻の様な暴風でその身を包み込んでしまう・

圧倒的な存在感に一瞬呑み込まれそうになるスウとリーネ・

（怖くない怖くない怖くない、絶対師匠が来てくれるから怖くない・よし！！）

「リーネ！いくよ！」

「お、応！！」勇ましく鉄刀（神楽）を抜刀するスウとそれに習い近衛隊正式銃創を構えるリーネに・

「■■■■■■——！！！！！」

本日二度目の砲口をぶちかましたクシャルダオラは上体を大きく反り返りて景気づけと言わんばかりに風の塊を吐き出しす・

（師匠・絶対にあたしが師匠到着までの時間をかせいでみせますから・）

クシャルダオラのブレスをリーネと左右に別れて回避したスウは

心の中で今この場にいない師を思った・・

今ここに勝率0%ながらもスウにとって初めての古龍討伐戦が開始されたのだった。

第9話 稼いだ時間とその結果 修正

「■■■■■■——！！！！！！」

雄叫びと共に吐き出されたブレスをギリギリのところでサイドに避けて回避に成功するスウ・・・

さつきまで自身のいた場所を地面を抉りながら弾丸の様に通過していく風の塊・・・

「あぶな〜・・・」

たった一撃のブレスだけでとんでもない惨状を巻き起こす古龍種に戦慄を感じるスウは自身の背中から嫌な汗が流れる・・・

「スウ！無事か！？」

「うん！まだまだ全然いける！ありがと！リーネ・・・」

戦い始めてから約15分が経過しようとしているが、クシャルダオラのブレス攻撃めに結構な体力を消耗していく事に危機感を感じるリーネ・・・

「正直な話回避のみに専念するといっても先が見えないという分キツいな・・・」

「うん・・・それにこのままただ回避に専念してもギリ貧だしここは・・・」

「攻撃に転じてみるつもりか？」

視線はクシャルダオラを見つめたままリーネの言葉にただ肯定を示す様に首を縦にふるスウ・・・

「できるだけ事はしたいの！だからお願い！リーネ！」

「ふむ・・・この戦いが終わったらケーキの食べ放題で手をうつ・・・」

「うんうんケーキでも何でもご馳走するから（師匠が）・・・」

「ふふっ・・・楽しみにしておこう・・・っ！くるぞ！スウ！」

「■■■■■■—————！！！！！！」

雄叫びと共に物凄いスピードで突っ込んでくるクシャルダオラ！しかし、横っ飛びで地面に着地して何とか回避するスウとリーネ！

「なめんじゃないわよ！くらいなさい！」

リーネよりも一瞬早く立ち上がったスウが懷から閃光玉を取り出して2人の間を通り過ぎていったクシャルダオラに投げつける！

直後に薄暗い森の中を強烈な光が弾けやがて収まっていく・・・すると、

「■■■■！！？ ■■■■——！！！！！！」

この戦いで初めてクシャルダオラが苦悶の声をあげて苦しんでいる・・・

「やった！効いてる！？《ポコツ》あ痛っ！？」

「何の予告も無しにいきなり閃光玉を使うな！危うく自分の目まで潰れそうだったじゃないか！？」

お怒りのリーネに頭をはたかれたスウは・・

「ごめんごめん、それより見て！閃光玉が効いてる！それに・・」

「風の鎧が消えている！？」

「うん・・閃光玉の効き目があと何秒もつか分からないけど今なら何の障害も無く攻撃できる！いくよ！リーネ！」

「応！！」

駆け出す2人はクシャルダオラとの距離を一気に縮めて肉迫していき・・

「せいやあああっ！！！！！！」

助走をつけたスウ渾身の振り下ろしはクシャルダオラの脳天目掛け一直線に振り下ろされる！

が、その刃は高い金属音と共に弾きかえされる！

「かつ、固っ！？でも！」

痺れる指を無理やり押さえ込んで弾かれる事をも分かりながら連続でクシャルダオラの頭部目掛け鉄刀（神楽）叩きつけんと振りかぶる！が、

「っ!!」

何故か振り下ろしを中断したスウはその場でバク宙をかまし距離を離す・・・すると、

「■■■■■■——————!!」

直後にクシャルダオラの鋼におおわれたその太い前脚が大木をも薙ぎ倒さん勢いでさっきまでスウのいた場所を通過していく・・・

(閃光玉の効き目が切れた!?)

「■■■!!■■■——!!」

正確に自身がいた場所に攻撃が来た為に一瞬閃光玉の効果が切れたのかと思ったスウだが攻撃後に見当違いの方角に威嚇の鳴き声をあげてデタラメな攻撃を繰り返している所を見ると直ぐにその考えは否定される・・・

手当たり次第にデタラメな攻撃を繰り返すクシャルダオラに攻め倦めるスウ・・・すると視界の端にスウとは逆サイドから果敢に攻め込んでいくリーネを捉えた・・・

「リーネ!!」

「自分は恐れたりなどしない!はあああ————!!」

体全体の捻りからとてつもないスピードで放たれた高速の突き・・・しかし、それでも突破する事の出来ない鋼の鱗・・・

「ちっ!まだまだ!」

突きを弾かれた事によって少しだけ開いた双方の距離をカバーする様に連続で砲撃を射出するリーネ。

しかし、当然の如くクシャルダオラも黙ってじっとしている訳がなく未だ閉ざされた視界の中で気配と自らが攻撃を受けた方角に狙いを定めてがむしゃらに連続して振り回した爪がリーネに襲いかかる！

「くっ！」

襲いかかる爪を何とか盾でいなしたリーネは軽くバックステップした後そのまま迫り来るクシャルダオラの二撃目を無視してガンランス最大の攻撃手段である龍撃砲の発射体勢に入る。

「リーネ！危ない！」

迫る強大な爪・・・しかしリーネのガンランスは龍撃砲の発射に僅かだが時間が開く為未だ発射にいたらず細く赤い火柱をあげたままでいる・・・

「リーネ！！！」

スウの絶叫があたり一面に響くが当然の如くクシャルダオラの腕は止まらず直撃するその瞬間！

「その腕貫つた！零距离龍撃砲！！！！！」

まるでそのタイミングを待っていたかの如く大きく声をあげ、同時に主の言葉に応える様にガンランスの先端部から龍撃砲が発射され迫り来るクシャルダオラの腕にカウンター気味に直撃しそれを逆に吹き飛ばす！

龍撃砲発射により黒煙が舞い上がる中、スウがリーネに走り寄っていく。

「リーネ無事！？ケガとかしてない？」

心配そうに覗き込むスウにリーネは一つ笑みを零し・

「自分は問題無い、それよりも奴が・」

と、未だ黒煙が濛々と舞い上がる方角に視線を向ける。

スウも釣られてリーネと同じ方角を見ると・

「■■■■■■——————！！！！！！」

リーネの龍撃砲によって腕の鱗が一部剥がれたのか僅かながら血を垂れ流したクシャルダオラがとんでもない殺気を撒きちらし怒り狂った様に吠え叫ぶ！

「怒り状態！？」

「恐らくは・それに閃光玉の効き目も切れているみたいだ・」

スウの問いに補足しながら答えるリーネ・

「さすがに怒り狂ったアレとやり合うのは危険極まりないと思うんだがどうだ？スウ」

「そうだな・俺もそう思う。」

「・・・・・・っ！？」

「・・・・・・って！師匠！？いつの間に！？」

突然2人の会話に割って入ったチスに驚くスウとリーネ・

「つい今し方な・・・それよりもスウ！」

「はっ、はい！」

「あの風翔龍相手によく此处まで頑張った・・・後は俺に任せてお前から2人は撤退しろ」

「師匠・・・でも・・・」

チスの言葉に心配の色を隠せずにいるスウ・・・そんなスウにチスは苦笑いを浮かべながらクシャルダオラに相對する様に背中をむける・

「スウ・・・お前の師が誰なのか俺に言ってみろ・・・」

「伝説の狩人集団4カードの一角にして《赤い影》の異名を持つチス・リエーテ・・・」

「そう今はその糞みたいな謳い文句を信じて此处は俺に任せて退いてくれねえか？スウ・・・」

「・・・はい・・・でも、でも絶対無事で帰ってきて下さいね師匠・・・」

「ああ、約束だ・・・スウ」

「はい、約束ですよ師匠・・・行こうリーネ・・・」

リーネを連れだって戦線を離脱しようとするスウと手を引かれるリ

「リーネ——が、しかし・・・」

「チス・リエーテ！」

「うん？」

それまでスウに黙って手を引かれていたリーネが突然チスの名を叫ぶ・・・

「今あなたに聞く暇がないのは分かっている！それでも自分はあなたに聞きたい事がある！だからこの戦闘を五体満足で切り抜けて自分の聞きたい事の答えをくれ！チス・リエーテ！」

リーネの言葉に一瞬頭の中で？マークが浮かんだチスだがリーネの表情が真剣そのものなので何か自分と因縁のある人物の縁の者だろうと理解したのかとりあえずリーネに言葉を返す・・・

「君にはスウの手助けをしてもらった借りもあるから、とりあえず五体満足で帰ったら俺が答えられる事なら話すよ・・・」

「本当だな？絶対だぞ！」

「ああ、それもついでに約束だ・・・」

チスの返答に満足したのか今度こそ離れていくリーネとスウ・・・それと同時に改めて風翔龍と対峙するチス・・・

会話の途中で攻撃をかましてくると思っていたが此方を警戒して様子を伺っていたのか視線を自分に向けたままじっとしていたクシヤルダオラにチスは軽口を叩く・・・

「どうやら待たせちゃったみたいだな・・詫びとして遊んでやる・・
来い！風翔龍！」

「■■■■——！！！！！！！！」

嵐のような天候の密林地帯にその日一番の獣の雄叫びが木霊した・・

第10話 赤い影 修正

「■■■■■■—————!!!!!!」

「来い、遊んでやる・・・」

その言葉をゴング替わりにして駆け出したクシャルダオラは一気に互いの開いた距離を縮めていく・・・

高速で突っ込んでくるクシャルダオラに対して黒刀を抜き放ち待ち構えるチス・・・

両者の激突間近ぎりぎりの所で横に転んで回避に成功したチスは直後に自身の真横を通過していくクシャルダオラの後ろ脚目掛けて渾身の薙ぎ払いを打ち込む！

並み居る強力なG級武器の中でもこと切れ味に関しては最高の部類に入る黒刀（終の型）はそれまで如何なる攻撃をも弾いてきたクシャルダオラの鋼の鱗を割りその肉を切り裂く・・・

「■■■!?!」

予期せぬ場所への突然の衝撃につんのめる様に転がったクシャルダオラに更なる追撃をかけるチス・・・

「そらそらそらそら そら!!!!!!」

怒涛の如き5連撃に悲鳴を上げるクシャルダオラは堪らず何とか立ち上がり現状の間合いを嫌ったのか大きく後ろに飛ぶ様にして後退する・・・が、

「逃がすわけねえだろ！死に晒せ！」

直ぐさまそれに反応したチスは懷から数本の小型ナイフを手に挟み込む様にして抜き取りそれをクシャルダオラ目掛けて投げつける……唸りを上げて投擲されたナイフは四本……本来ならば古龍随一の堅牢さを誇る風翔龍に対しては玩具に等しいそれ……だが！？

《ザシユツ》

「■■！？ ■■■ー……」

何かが突き刺さる音と共に激痛にのた打ち回るクシャルダオラ……と、それにゆっくりと近づいていくチス……

「■■！？ ■■■！？」

「如何に鋼龍といえども眼球までは自慢の鱗でも防ぎきれないだろ？」

未だに左目を抑えもんどり打つクシャルダオラを無慈悲に見下ろして問い掛ける様に言葉を発したチスはそのまま黒刀（終の型）を大きく振り上げクシャルダオラの脳天目掛けて振り落とし深い裂傷を刻み込む……

「■■■■……」

「終わりか？ 風翔龍？」

苦悶の声をあげるクシャルダオラはチスのその言葉を聞いた瞬間！とんでもない殺気を放ちながら前脚をがむしゃらに振り回してチスを回避させて間合いを離していくと……

おもむろに自らの眼球に突き刺さったナイフを器用に引き抜いてく！

緊急停止によって今まで垂直にしていた上体を一気に仰け反らせ、その反動を利用する事で自らの真下にいるチスに対して尻尾を鉄球が如く勢いで叩きつけたクシャルダオラ・・と、10m程吹っ飛ばされ周りの木々に腕を引っ掛けて何とか停止するチス・

「■■■■■■——！！！！！！」

形勢逆転により先程の借りを变えすと言う様に速攻で追撃を仕掛けるクシャルダオラは自らの口先にその日最大の巨大な風の塊を集約して間髪入れずに一気に三発の風プレスを射出してトドメを差しに掛かる！

3つの方角から迫り来る弾丸の如きクシャルダオラのプレスにチスは・・

「舐めんじゃねええ！」

尻尾の直撃により痛めた体に鞭を打ちながら背後にある木々を利用して壁蹴りの容量で跳躍したチスは見事に風の弾丸の回避に成功する！

着地も完璧に決めたチスは素早く身構えてクシャルダオラの次の攻撃に備える・・すると、

「■■■■■■——！！！！！！」

つい先程のリプレイの様に又もやとんでもない加速で空中から突っ込んでくるクシャルダオラの姿を視界に捉える！

「俺に同じ攻撃は二度も通じねえつつうのをその身に刻んでやる！」

大きく気合いを入れてしゃがみ込んだチスの真上を高速で通過するクシャルダオラはさっきと同様にして緊急停止をして真下にいるチ

スに対してその強靱な尻尾を鉄球が如く勢いで振り抜く・・・が、

「合い！一閃！はあああーっ！！！！！」

通過した瞬間にしゃがみながら左足を目一杯伸ばして横に動き、その左足を軸に体を巻き込む様にして回転したチスは迫り来る鉄球が如き尻尾に黒刀（終の型）を合わせる様に振り抜く！

《斬！》

どこから途もなくそんな音が辺り一面に響き、それに続く様にしてクシャルダオラの巨体が地面に落ちる轟音が密林一帯に轟いていく・・・

「■■■■・・・■■■■！！」

背中から落ち為になかなか立ち上がれずにもがくクシャルダオラ・・・その臀部にはさっきまで付いていたはずの尻尾の大部分が綺麗サッパリと無くなり、自らの絶対防御である龍風圧は落下の衝撃が霧散していく・・・

「終わりにしてやる・・・」

未だにもがくクシャルダオラを尻目に一気に胴体に回り込んだチスは怒濤の勢いで鋼の肉体目掛けて黒刀を突き刺していく・・・

「ふっ！はっ！せい！やつ！とう！」

一撃毎に多くの血が飛び散り辺り一面を赤黒く染め上げていく中でチスの錬気がたまるのとクシャルダオラがようやく立ち上がる事に

成功したのはほぼ同時だった・・・

「■■■■！ ■■■■！！！」

自らがもたついている間にかなりの体力を削り取られたのか威嚇の
声も力無くどこか弱々しくなっているクシャルダオラだがそれでも、
それでも今尚腕を振り上げて攻撃に転じる！

「■■■■！！！」

「どうあがこうがお前の負けだ風翔龍！」

言葉と同時に一瞬、練気とは違う赤黒い何かに包まれた黒刀を振り
抜くチスの一撃は古龍随一の堅牢さを誇るクシャルダオラの片腕さ
えも切り落す！

「■■■■■■——————！！？」

あまりの激痛とまさか、たかだかいち人間の―一撃で自慢の前脚を叩
き落とされるとは思ってもいなかったクシャルダオラは半狂乱的に
暴れ出すも・・・

「お前の負けだ・・・はあああつ！！！！！！！」

隙だらけの攻撃を見切られ、満を持して解放した気刃斬りは赤黒い
何かを纏いながら一振り毎に首筋に放たれ深い裂傷を刻み・・・やが
て・・・

「■■■■■■つ……………」

最後の一撃はその首さえも両断する・・・

断末魔の悲鳴を上げる間もなく絶命したクシャルダオラを見届けたチスは一つ息を吐き出して黒刀を鞘に納めていく・・・

「ふう・・・流石に一人で古龍を相手にするのはしんどいな・・・それに・・・やっぱ歳なんて取りたくねえもんだな・・・」

戦闘に勝利したにも関わらず全く嬉しさがこみあげて来ない自分に苦笑を浮かべただ呆然とクシャルダオラの亡骸をみるチスが零した溜め息混じりの一言はどこか虚しさが滲んでいた・・・

第11話 依頼達成の後始末と聞きたい事

クシャルダオラの討伐を終えたチスは適当に剥ぎ取りを済まして上空を見上げる・・・

嵐のような豪雨はそれを起こした原因であるクシャルダオラの死と同時に少しずつ晴れ渡り今では快晴に近付いていつている空・・・に、浮かぶ一機の気球・・・

チスは見渡しのいい場所に移動した後にポーチから紐が付いた筒を取り出して

「面倒くさいが一応な・・・」

と、紐を引っかくと同時に景気いい音立てながら打ち上げられていく花火の様な何か・・・

「これで観察部隊の奴らもクシャルダオラの死体を回収しに来るだろう・・・」

気球から送られる了承のサインを確認したチスは踵を返してその場を後にした・・・

《10分後》

ゆったりとしたペースで雨上がりの密林を歩くチスは普段からこの密林で活動する際に拠点として活用するエリアに入っていき、そこに自分のことを待っているだろうと思われるスウともう一人の少女を探す・・・すると、

「師匠————!!!!!!」

背後からスウの声が聞こえ、振り向くチスは自分に向かって全速力で突っ走ってくる弟子の姿を視界に捉えて頬を緩ませる・・・
全速力の勢いのままに師の胸に飛び込むスウ・・・そう、その勢いのままに・・・

「ぐえっっ！」

雨上がりの密林にカエルが潰れる様な声と共にドサリとスウに押し倒されるチス・・・

しかし、そんな事はお構い無しに師に問いただす弟子・・・

「師匠！ご無事でしたか？怪我とかしてませんか？」

「スウ・・・！くっ・・・苦しい！・・・」

胸元を押さえこまれガクガクと揺すられるチスは段々と顔色が青く変色していく・・・

（き、キツい！）

「スウ、それぐらいにしておかないないとチス・リエーテが無事ですまなくなってしまうぞ・・・」

チスの顔色が青から紫に変わる頃に背後に控えていたリーネが呆れ口調でスウに言葉を掛ける・・・

「えっ！ああっ！ごめんなさい！師匠！」

「ゲホ！ゲホッ！・・・こっ！殺す気か！？」

やっこの思いでスウの締めから解放されたチスはむせながらも弟子に悪態をつける・・・が、

「ごめんなさい・・・ただ師匠が心配で・・・それで・・・」

「うつ・・・」

気落ちするスウの顔を見ると気まずくなり何も言えなくなってしまう師はガシガシと後頭部を掻き、しばらくした後、おもむろに弟子の頭に手を乗せる・・・

「どうやら俺が考えてた以上に心配させてしまったようだな・・・すまない・・・スウ・・・」

「いえ、いいんです——師匠」

涙目の弟子を宥める師の目は優しく、頭に乗せている手は大きくはないが温かい・・・

「師匠・・・本当に怪我とかしてないですよね？」

「ああ、見ての通りピンピンしているぞ！」

その場で軽く飛び跳ねるチスを見てようやく顔を綻ばしたスウは安堵の息と共に言葉を繋いだ・・・

「ご無事で本当に良かったです・・・師匠くっ！」

結局またもや抱き付く弟子にヤレヤレと肩をすくめたチスはさつきからスウの後ろで言葉少な目に控えている少女に視線を移した・・・

「・・・」

「・・・」

見定める様なチスの瞳を真っ向から受け止めるリーネ・両者の間に沈黙が流れる・

「あれ？師匠もリーネもどうかしたんですか？2人共目つきが恐いですよ？」

「いや、何でもない・それよりもうすぐ日が暮れそうだし一端村に帰る事にしようと思うんだが・悪いけどスウは一足先に村に走って村長達に古龍を討伐したって報告してくれないか？」

「それは良いんですけど師匠はどうするんですか？」

「俺はこのお嬢さんに話があるからそれが終わったら後を追う・だからお前は先に行っててくれないか？スウ・」

「・・・わかりました！じゃあ、私は先に行つときますんで用が済んだら師匠もリーネもちゃんと帰ってきてくださいね！それでは、先行きます！」

何となく師が何を望んでいるのかを察知したスウは軽く2人に声をかけると弾丸の如くスピードで走り去って行く・

「いい子だろ？スウは・・・」

「・・・ああ・・・」

頷くリーネに一つ笑みを零したチスは姿勢を正して改めてリーネに問い掛ける・

「リーネだっけか？さっき俺に聴きたい事が有るって言っていたが

「一体何を聞きたいんだ？」

「……」

「話し辛いか？」

「いや……その……」

なかなか本題に切り出せずにしもどろするリーネに一つ息を吐いた
チスは……

「話し辛いなら少し一緒に歩かないか？もし話せそうになったらその時に声を掛けてくれて構わないから……それでいいか？」

「……（コクリ）……」

チスの提案に言葉なく首を縦に振る事で了承の同意を示すリーネに
苦笑を浮かべたチスはゆっくりと歩を進めて行く……

《それから20分後》

適当に密林地帯を歩くチスとその後ろを只付いていくリーネ……両者の間に会話は一切無く、チスはただひたすらにリーネからの言葉をジッと待ち続ける……

（何を自分は話す事に躊躇っているんだ！

チス・リエーテを探し出す事にどれだけの年月を費やして来たと思

っているんだ！今やっと見つけたんだ！探し求めていた答えを貰うんだ！」

「チス・リエーテ！」

「うん？」

「あなたは今日あの風翔龍を相手にたった一人で大立ち回りをし尚且つ討伐に成功した事に間違いは無いな？」

「ああ・・・」

頷くチスにリーネは・・・

「じゃあどうして！・・・どうして！それだけの強さを保持しながらあなたは姉さんを守ってくれなかったんだ！どうしてあなたが生きていて姉さんは死んでしまったんだ！答える！チス・リエーテ！！」

「姉さん？・・・っ！そうか！お前は！・・・」

姉という言葉に引っかかりを感じたチスは改めてリーネの顔を見た時に気付く、過去に自分達と同じ道を歩み、背中を守りあつた戦友の面影を・・・

「リーネ！リーネ・アンスリウム！それが自分の名だ！あなたのかつての仲間であり、そして！貴方が！貴方が殺したレイラ・アンスリウムの妹だ！！」

夕暮れの密林地帯の一角で少女の悲痛な叫びが響き渡り、雨上がり
の天候とは対照的にその瞳からは一筋の涙が流れていった・・

第12話 涙と過去とこれからと

「リーネ！リーネ・アンスリウム！それが自分の名だ！かつて貴方の仲間であり、そして！貴方が！貴方が殺したレイラ・アンスリウムの妹だ！」

リーネの悲痛な叫びが辺りに響き渡ると同時に一筋の涙が零れ落ちる様を見たチス・

「そうか・・・お前がレイラの自慢の妹か・・・」

「自慢かどうかは判らない・・・が、自分にとって姉さんは、レイラ姉さんは誇りだった！・・・何時か姉さんの様に成りたくて女だてらにハンターの道を目指し夢見た・・・なのに！なのに！姉さんは死んでしまった！他ならぬ貴方のせいで！」

感情を爆発させるリーネは更に声を大にしてなじる様に詰め寄っていく・・・

「貴方は自分に答えをくれる約束をした筈だ！そうだろ！チス・リエーテ！」

「ああ、確かに約束した・・・」

「ならどうして姉さんは死んだんだ？この問いに答えろ！チス・リエーテ！」

「・・・」

リーネの言葉に直ぐには返答を返せず口を閉ざしたチスはやがてポツリと言葉を零した・・

「自分の力不足・・それだけだ・・」

「貴様ああ！！！」

チスの言葉に激昂したリーネはガンランスを抜き放ちその砲口をチス向ける・・

「姉さんの死をたったそれだけの言葉で済ませる気か！？」

「そうとしか言葉が見つからん・・」

今尚ガンランスを向けられても眉一つ微動だにしないチスの言葉にリーネはますますヒートアップして遂には・・

「くっ、殺す！」

ガンランスの先端部から赤い火柱が上がり竜撃砲の発射体制に入る・
・が、それでも微動だにしないチス・・

「くっ！死んで姉さんに詫びろ！チス・リエーテ！」

リーネの叫びと同時にガンランスから竜撃砲は放たれ轟音と共に黒煙が舞い上がり辺り一面を黒く包み込んでいき・・やがて――

「どうしてわざと途中で照準を外したんだ？リーネ？」

黒煙が晴れていく中でチスはリーネに問い掛ける・

そう、彼は無事だった竜撃砲が発射される直前に照準をずらして外したのだリーネ自身の手によって・

「自分がスウの友達だから・貴方が死んだらスウが自分と同じ悲しみを背負ってしまうから・それに・」

リーネの手からガンランスがガシャリと音を立てて零れ落ちそれと同時に瞳から大粒の涙が止めどなく溢れていく・

「こんな事をして姉さんは喜びもしないし帰ってもこないから・

」

綺麗な顔をくしゃくしゃに歪めて泣き崩れるリーネにチスは・

「すまない・本当にすまない・」

ただ、謝る事しか出来ず・

「自分の姉さんを返せ！返してくれ！チス・リエーテ！」

ただ、償う事もできず・

「今日まで・貴方を捜す事だけを糧にして生きてきた・でも、それももう・」

剥ぎ取り用のナイフを抜き取り自分の首筋に刃を当てようとするリーネ・

「馬鹿っ！よせ！」

「邪魔するな！チス・リエーテ！自分は、自分は姉さんの所に！・・」

どうにかナイフ押さえ込む事に成功したが尚も暴れるリーネにチスは・・

「この！ボケナス！！」

一切の手加減なしで渾身の頭突きをぶちかます！

ゴスッ！

かなりヤバ目な音が辺りに響き、そして・・

《四年前》

「——レイラ！しっかりしろ！レイラ！」

荒くれた旧シュレイド城のだった広い広場の一角で仲間の少女を抱き起こし大声で呼び掛けるチス・・

「せ・・先輩？」

「っ！？気がついたか？レイラ！」

「は・・はい・・先輩・・敵・・は？」

チスの呼び掛けに弱々しくも反応するレイラ・・彼女の腹部には致

命傷と言って過言ではない程の深い裂傷が刻み込まれ、その傷口からは赤い血液が止めどなく垂れ流れる・・・

「大丈夫、大丈夫だから喋るな・・・もうすぐ救護アイルがこっちに到着する。だからそれまでどうにかもちこたえろ！レイラ！」

涙目に語り掛けるチスにレイラは話す力も殆ど残ってないのか一つ微笑みを落としかがて、

言葉を紡ぎだす・・・その姿はまるで最後の力を振り絞る様に・・・

「せ・・・先輩・・・わ・・・私・・・私・・・先輩達と出会えて・・・良かったです・・・最後の一瞬まで一緒に道を歩いて・・・本当に・・・」

「さ、最後ってなんだよ！何勝手に終わりみたいな事を言ってるやがんだよ！頼むから諦めるな！レイラ！」

泣きながら必死に叫ぶチスにレイラは優しく微笑み、彼の頬にソツと血に染まった自らの左手を添え幾筋にも流れる涙を優しく拭いていく・・・

「な、泣かないで下さい・・・先輩・・・自分を責めないで下さい・・・先輩・・・私の最後の思い出を先輩の泣き顔なんかで終わらせ無いで下さい・・・」

次々と流れ落ちる涙を優しく拭いながら懇願するレイラにチスは・・・

「無茶、言つなよ・・・」

彼とて仲間であり後輩でもあるレイラの頼みを聞いてあげたいが涙は止まってくれず、それでも必死にくしゃくしゃになった顔を無理

矢理押さえて何時もの軽口を交わす様に不器用な笑みを浮かべたチヌに彼女は・

「・・・呆れるぐらい不器用で自分勝手な先輩・・・でも・・・本当は誰よりもみんなに気を使って、優しかった先輩は・・・私の目標だから・・・だから・・・」

段々と言葉に力が無くなって、少しずつ瞼も閉じていくレイラだが文字通り最後の力を振り絞って言葉を繋げる・

「い・・・き・・・て・・・せ・・・ん・・・ぱい・・・や・・・く・・・そ・・・く・・・

」

言葉の終わりと共にゆっくりと瞼を閉じ、頬に触れていた手は糸が切れてしまった人形のように地に落ちようとしている・・・が、その手前でチヌによって包み込む様に再び上がっていくレイラの手・・・
「本当に酷な願いだな・・・シュルもテソもお前も居なくなつた世界なのに俺だけ生きて欲しいなんて残酷だろ・・・でっ、でもそれでも、それでも・・・約束だ・・・っ！レイラ——！！！！」

もう・・・笑う事も怒る事も悲しむ事もない彼女の手を震えながらもそれでも強く握りしめ泣き崩れたチヌの叫びは何処までも、何処までも響いた・・・

《side out》

「う・・・うう頭が痛い・・・って！なっ！？」

今まで気を失っていたのか痛む頭を押さえようとしたリーネは自分

の手が縄で縛られている事に気づき驚愕・

慌ててボーっとした意識を無理矢理覚醒した彼女は現状の自分の状態を確認する・すると、

「おっ！気がついたか？リーネ・」

「つつっ！！チス・リエーテ！どうして貴方が自分をおぶって移動している？しかも何故だか腕を縛られた状態で！？説明しろ！チス・リエーテ！」

「どうしてって、それを説明すると長くなるがそれでも聞くか？」

「ああ、聞かせて貰おう！」

鼻息荒く頷くリーネにチスはヤレヤレと肩すくめたチスは口を開いた・

「馬鹿な事をしようとするお前を押さえ付けようとした。暴れるお前に本気でム力ついたから手加減なしで頭突きをぶちかましたら白目を剥いて気絶しやがった。そのまま放っておくわけにもいかないんでとりあえず背負って連れて帰ろう思ったが、また馬鹿な事をするかも知れないからとりあえず手を縛った・以上だ」

「なる程・しかしあんまり長くはないな・」

「ああ、そうだな・」

「全くだ・とりあえず縄を外してくれ・」

しばらくして・

「なあ、チス・リエーテ・」

「うん？なんだ？」

「もう一つだけ聞きたい事があるんだが聞いていいか？」

「答えられる事なら何でも答えるって約束したからな．．別にかわんよ．．」

了承の意をチスから受け取ったリーネは質問を直ぐにはせずに間を置いてポツリポツリと言葉を呟いていった．

「．．．さっき私がした事を貴方は馬鹿な事をしたと言ったが、姉さんを含めて仲間である大切な人を失ってしまった時に貴方は自分と同じ様に馬鹿な事をしようとは考えたりした事はないのか？」

リーネの問いかけにチスは．．

「当然．．あつた．．でも結局俺は死ぬ事ができなかった．．約束したんだ．．みんなと．．」

「約束？みんなとは姉さんも含めてか？」

「シユルにしてもレイラにしてもテソにしても身代わりになって死ぬ事も厭わない程大切だった仲間はみんな死に際には共通して生き長らえて欲しいと残してこの世を去っていった．．

俺は仲間として何より友としてあいつらの最後の願いを約束と捉えて自分なりにそれを守ると誓ったから．．だから自分の人生に終止符を打つことなく今を生きている．．それに．．」

「．．．．」

ただじつとチスの言葉に耳傾けて次の言葉を待つ少女にチスは・

「どんなに辛い事があつてぶつ倒れたとしても、また立ち上がって地べたに這いずり回つてでも前を向いて歩き続けて頑張つて行くつて誓つただからな・みんなに・」

背中越しで話すチスはリーネを軽く背負い直す——すると・

「——本当は分かつてた・」

ポツリと呟いたリーネはまるで独り言の近いそれで言葉を繋いでいく・

「姉さんが死んだのは貴方の責任では無いって事を頭の中では分かつてはいたんだ・貴方を尋ねてこの地方に来たのもただ姉さんは最後にどんな事を話し、どんな顔をして眠つたのかを聞いてみたかっただけなんだ・でも風翔龍と闘つた後なのに殆ど無傷で帰つてきた貴方を見て、そんなに強いのにどうして姉さんを守ってくれなかったのかと考えたら腹が立つてそれで——貴方に八つ当たりをしてしまった・」

「・・・」

「これではただ姉さんの死を受け入れられず未だに駄々をこねている子供と一緒になのにな・・・」

独り呟き落ち込むリーネ・そんな彼女を背負いゆつくりと歩を進めるチスは・

「いいじゃないか子供でも年相応で・・・」

「えっ？」

困惑するリーネの声を背中越しに聞いたチスは一旦彼女を背中から下ろして振り向き優しく語り掛ける・

「今はまだ受け入れられなくてもいいじゃないか、子供でもいいじゃないか・・答えが見つからなくて一人が辛いなら俺やスウもリーネの傍で一緒に悩んでやる・・だから当分は俺らと一緒にいる・・リーネ・」

「チス・リエーテ・」

「お前は俺やシュルやテソが可愛がった大切な後輩の妹だ・・泣いてる姿も苦しんでいる姿も見たくねえ・・だから・・なっ!・」

言葉と同時に差し伸べたチスの手にリーネは・

(チス・リエーテ・姉さんが懂れて一番尊敬したハンター・)

おずおずと手を握るリーネにチスは微笑み空いている反対の手で優しくリーネの頭を撫でる・

「これから宜しくな!リーネ・」

チスの言葉にぎこちなくも笑みを浮かべ頷くリーネ・
その笑みはチスにとって初めて見たリーネの笑顔だった・

第13話 師として一番に教えたい事 修正

風翔龍討伐成功及びリーネ・アンスリウムを新たに仲間に加えてから早ひと月、

今日も今日とて修練に身を削るスウの掛け声が朝一のチス宅にこだまする。

「998!999!1000!!・・・ふう〜日課終了!」

修練を終えたスウはその場で二回ほど鉄刀を振った後、満足したのか太刀を鞘に納めてその場に座り込む。

「ふう〜い〜・・・」

予め傍の小枝にかけていたタオルを首に乗せ額に浮かんだ大粒の汗を拭っていく。

——そんなスウに背後から声を掛ける人影・・・

「日課は終わったか?スウ?」

「あっ!師匠!」

チスの呼び声にすぐさま反応したスウはパタパタと擬音がつきそうな足取りで師に駆け寄って来る——その姿がチスには・・・

(うっん、幻覚で犬の耳と尻尾が見える・・・)

「師匠？どうしたんです？私の顔になんかつきます？」

ペタペタと自分の顔に触れるスウを見るチスは思わず――

「スウ！」

「ひゃっ！？ひゃい！」

「お手！」

「わーワン！」

――沈黙が流れる――

「てっ！私は犬ですか！？ペットですか？プギーみたいに可愛がられちゃうんですか？――《ボフツ》」

無礼千万と憤慨し高速で文句を並べていくスウだが自身で放った言葉を想像したのか顔を真っ赤にして俯いてしまう――

（――ペットもいいかも・・・えへへ）

何を想像したのかは彼女の頭の中の事なので説明は不可能だがその何かを思い描いたのか顔を真っ赤にだらしなく笑うスウ・・・

「おーい、スウさん？」

呼びかけにも反応せず自分の世界に浸るスウにチスは――

「だめだこりゃ・・・」

アッサリと匙を投げる――

「スウ、もう少しで朝ご飯も出来上るから妄想が終わったらリビングに来るんだぞ、いいな？」

「えへへ・・・ひゃい！」

未だに妄想の世界に旅立っている弟子を中庭にほっぽって家の中に入ったチスはその足で二階へと上がって行く・・・目的は最近新しく一緒に過ごす様になり今尚眠りの世界に旅立ったまま帰って来ないもう一人の少女を起床させる為に・・・

目的の部屋に到着したチスはノックと共に軽く声を掛ける・・・

「リーネ、朝食が出来上がったんだが起きてるか？」

「・・・」

予想通り返答はなし、対象は未だ夢の世界に飛び立っている・・・

「入るぞ？」

（基本的に室内の部屋はトイレ以外はカギがかかる仕組みになっていない為出入りが簡単にできる。）

室内に入った瞬間、目に飛び込む薄めた様なピンクで統一された家具の数々に顔をしかめるチス・・・

（目が痛くなりそうだ・・・）

自身の部屋とは正反対にして苦手な女性の部屋特有の匂い（チスは花や香水などの香りがきつい匂いをすこぶる嫌う）に顔をしかめる

が構わず対象が寝ているベットに近づき声を掛ける――

「リーネ、朝飯前が冷めてしまっから俺としてはそろそろ起きてくれると嬉しいんだが、どうだ？」

揺すりながら語り掛けるチスの声に少しだけ覚醒したリーネは本能の赴くまま譫言の様に言葉を繋げていく――

「うっ、まだ眠い・・・あと五分だけ・・・頼む・・・」

「まあまあそう言わずに起きてくれリーネ、今日は残念ながら休みじゃないんだし生活の為にもそろそろ依頼を受けないと・・・だからなっ？」

まるで小さな女の子をあやす様に喋るチスにリーネは渋々ながらも上体を起こし――

「ふっ、ふわあぁっっ！」

一発大きくアクビをぶちかました後にしょぼしょぼ目をこすりベットから這い出す・・・

「とりあえず顔洗ってその眠たそうな顔をどうにかして来い。それ済んだらリビングに集合！いいな？リーネ・・・」

「りょーかい、ふわあぁっっ！」

本日二回目のアクビをぶちかますリーネの背中を送り出したチスはやれやれと肩をすくめながら朝食の仕上げの為に一階に降りて行く・

「うん、まあまあだな・・・これ位の味ならリーネもスウも文句は無いだろう・・・あとは・・・」

無難に朝食の仕上げをこなしたチスはキッチンから中庭に繋がる窓を開き外を見渡す・・・

「駄目ですよー師匠！そんな大胆な！」

未だに妄想の世界に飛び立っているのか一人類に手を添えて体をくねらせるスウを視界に捉えたチスは

「何時まで自分の中で浸ってるんだ？スウ！」

「ひゃっ！？ひゃい！」

「飯が仕上がったからテーブルに並べるの手伝ってくれ！」

「はい！直ぐ行きます！師匠！」

慌てながら先程と同じくパタパタと駆け寄って来るスウを微笑ましく感じつつチスはキッチンへと戻っていく――

《いただきまーす！》

スウに手伝って貰って朝食をリビングに並び終えたチスとスウはリーネの到着と共に全員で合掌後朝食に取りかかっている・・・

「――で？今日は何の依頼を受ける気なんだ？チス？」

「それなんだが・・・えーと、フルフルの依頼を受けようと思う・・・」

齒切れの悪いチスの返事にリーネは一旦食事を中断してスウを見つめた後にチスに問い掛ける・

「スウの経験する段階を少し端折り過ぎてないか？」

「ちよつと！？どういう意味よ！リーネ！」

それまでガツガツとかつこんで食事に集中いたスウもリーネの一言に力チンときたのか一旦手を止めて詰め寄っていく・

「か、勘違いしないでくれスウ、自分は別に君の実力がどうこうを言っているのではなくてだな・」

「ああん？」

タジタジになるリーネの言い分も殆ど聞こえてないのか更に詰め寄ろうとするスウ——が途中で頭を後ろからひつつかまれる。

「うゝ何するんですか？離してください！師匠！」

ギヤアギアアと喚く弟子にチスは少し呆れながらも優しく論ずる口を開く・

「スウ、リーネは別にお前を見下しているわけじゃあなく心配しているだけだ。それに言っている事も正しい——普通ならだが」

「何か考えがあるのか？」

リーネの問い掛けにチスは含みのある笑みを浮かべ自身の考えの一部を曖昧に2人へ語り出す――

「リーネが言う様にスウにはまだ絶対的に経験が足りない事は俺も重々承知している――でも今のお前達に一番に教えねえといけない事を教えるには中途半端なドス系のモンスターじゃなしに絶対に苦戦する飛竜じゃないと駄目なんだ。」

「一番教えたい事？口での説明では駄目なんですか？」

もつともな事を聞いてくるスウにチスは――

「そいつは難しい、俺がお前らに教えようと思っているのは口で説明すると物凄く安っぽくなってしまふからな・・・」

「でもフルフルだぞ？私とスウだと下手したら最悪な事態に陥ってしまう可能性も――」

「――はっ、その可能性に陥る事はある得ん！」

リーネの言葉に断言する様に否定するチス。

「しかしだな・・・」

「くどいぞリーネ。お前の心配する気持ちも解らんでもないが本当の意味でお前達を成長させるにはある程度のリスクを犯さないと難しいって事を理解して欲しい・・・それに・・・」

「それに？何ですか？師匠・・・」

「それに、スウにリーネも俺が守りきって見せるだから、俺を信頼しろ。なっ？」

それぞれの頭に手を乗せて論ずるチスに2人は――

「私は師匠を信頼してますよ！師匠！」

「自分としてはまだそれ程共に過ごした時間が短いのでまだまだ難しいが貴方は姉さんが尊敬したほどの人間だ。だからゆっくりと少しずつでも信頼関係を築いてゆけたらと思う・・・」

それぞれの反応を見たチスは照れたのか少しだけきつめに頭を撫でつける・・・

「ちよっ！ちよつと痛いですよ！師匠！」

「せっかくきれいに髪を纏めたのに是では台無しだ！撫でるならもつと丁寧に撫でろ！」

ギヤーギヤーと喚く2人に悪い悪いと苦笑を浮かべたチスはひとまず両手をパン！とならし口を開く・・・

「とりあえず朝食に時間を掛け過ぎると今日の依頼に支障をきたすから、ちと冷めちまつたがさっさと朝食を食べよう。」

「はい！（ああ！）」

元気な2人の返答に頬を緩めますチス・・・

「で、飯食い終わって準備が済んだらリビングに集合って事で・・・あっ！そうそう！沼地でフルフルと戦うから2人共ホットドリンクの準備は忘れ無い様に！」

「了解です！師匠！」

「わかった・・・」

その後素早く朝食を食べきった三人はそれぞれ狩りの準備をする為に各自の準備を進めていく・・・

「太刀以外の武器で戦うのは久しぶりだな・・・」

自室で素早く準備を仕上げ何時ものフルフルZを纏ったチスは最後の仕上げとして武器の点検を始めていこうとする・・・が、手に持ち点検をしているのは黒刀ではなく炎剣リオレウス・・・

「コイツを触っているとお前を思い出すよシユル・・・」

太刀系の点検よりはスピード的に落ちるが、それでも並みの大剣使いより素早く点検を済ましたチスは背中に大剣を背負い最後に鏡の前で自身の姿を確認し苦笑を浮かべる・・・

「ふっ・・・やっぱり殻の小さい俺では大剣みたいな武器は合わねえな・・・シユル・・・」

自嘲気味に笑うチス・・・すると、

「師匠！まだですか？」

準備を済ましたのか先に到着しているスウの声が階下から響く・・・

「今行く！」

少し慌てながら部屋を出るチスはふと自室に飾っている一枚の写真

を見る――

（俺はお前らに教わった事をスウとリーネに教えていつて何処にだしても恥ずかしく無い一流に育ててみせる！だから見守っててくれよな！みんな！）

決意新たに決め込んだチスはスウ達の待つリビングに急ぎ足で向かうのだった・・

第14話 続・スウのやる気 修正

「そういえば師匠はどうして今回に限って太刀じゃなくて大剣なんですか？」

フルフル討伐のため沼地に向かう竜車の中で率直な疑問を師であるチスに投げかけるスウ・・・

「まあ、チームとしてのバランスの考慮と俺自身のハンデって所が本音だな・・・」

「ハンデは何となく解るんですがバランスですか？」

師の言葉に首を傾げるスウ。

そんな彼女にチスは優しく微笑み簡単な説明を始めて行く。

「簡単に説明すると分担って事だな。太刀や双剣、ハンマーなどは攻撃に特化し尚且つ立ち回りの速い武器は前衛で攻守両面で充実した分移動速度の遅いランス、ガンランスは中衛で遠距離からの攻撃とサポートが可能なライト、ヘビィボウガンと弓は後衛つと、まあ、ここまでの説明はスウにも解るな？」

「はい！師匠！残りのバランスの取れた片手剣と大剣が遊撃って事ですよ？」

「そう言う事だ・・・前衛、中衛、後衛と遊撃にそれぞれ一人ずついるのがバランスとしてはチームの理想だが、これがなかなか上手い事に集まらないのが現実だ・・・信念とかプライドとかを理由にな・・・」

「ほえー、じゃあ師匠が今回大剣を使う理由はそういった事からなんですか？」

「まあ、大半の理由は其処なんだが、俺の装備を見たら解ると思うが俺自身が多くの上位下位G級のフルフルを討伐してきた経験があるから太刀で戦っちまうと直ぐに片が付いてしまってお前達の為にならないのも含んで当分は大剣で行こうと思っている。」

「ほえー、そうなんですか・・・ちなみに師匠は太刀を扱った時の力量が百としたら大剣はいくらぐらいになるんですか？」
スウの問い掛けに顎に手を添えて考え込むチス・・・

「そうだな・・・数値で表すなら大体六十位かな・・・」

「へえ、四割近く減少ですかあ、そうなんですかー・・・」

意味深に二度納得したスウにチスは・・・

「スウ、お前まさか四割減少した俺なら勝てるのかと思ってないだろうな？」

「そんな～、まさか其処までは思ってないですよ～。ただ良い所まで行けるかもな～ってぐらいしか思ってないですよ～」

「そうか、ははっ！」

「そうですよ～フッフ」

2人の間に奇妙な沈黙が流れやがて――キンツ！――両者の剥ぎ取りナイフが音を立ててぶつかり合う・・

「この野郎？俺に勝とうなんざ十年早いわ！」

「あたしは別に勝てるとは一言も言ってません！人の話はちゃんと最後まで聴いて行動して下さいよね〜師匠〜？」

「何だとお！？」

「何ですか！？」

「五月蠅いぞ！？貴様等！？」

両者譲らず拮抗した鏖迫りを展開しギヤーギヤーと喚き合うチスとスウに今まで会話に参加せず竜車の運転に集中していたリーネは運転席から顔を覗かせ2人に一喝という名の雷を落とした・・

「これからフルフルの討伐に向かうというのに随分と余裕綽々だなスウ・・体力が有り余っているなら竜車を降りて目的地まで走ってみるか？」

「いや、それはその〜」

言葉に詰まるスウにリーネは更に言葉を繋げていく・・

「はつきりと言ってフルフルはかなりの強敵だ。どういった特長どのような攻撃手段をちゃんと頭の中に叩き込まないと一瞬で棺桶入りが決まってしまうぐらいにな！それともスウは棺桶入りが希望か？」

「流石にそれは・・・」

「嫌ならそんな事をしてないでさっさとフルフル対策をチスから教えて貰うんだなスウ・・・」

忠告を最後にリーネは顔を引つ込め運転席に戻っていく。リーネが戻った姿を確認したスウはホッと胸を撫で下ろし視線を師であるチスに向ける・・・

「ふうー・・・怖かったですね？師匠？」

「そうか？リーネは言葉が粗いから周りに誤解されやすいが別にそこまで怒ってないと思うぞ。寧ろ純粹にお前を心配している風に見えるがな・・・」

「そつだと良いんですけど・・・」

「あんまり悪い方に考えてもしようがないしじゃれ合いもここまでにしてリーネの言う通りフルフルの対策に話を移すとしよするか？スウ？」

「はい！是非お願いします師匠！」

元氣一杯に言葉を返すスウに目尻を下げるチスはゆっくりとした口調で口を開いていく・・・

「まず始めに特長からだが、フルフルの主な活動は洞窟とか薄暗い場所を縄張りとして活動するために目が退化してその役割をほとんど果たさない・・・」

「えっ？それじゃあどうやって捕食や外敵からの攻撃に対応してるんですか？師匠？」

「野郎は視覚が退化してしまった分嗅覚が発達してそれを充分な程補っているからケルビとかの小型の生き物も捕食するし縄張りに侵入したハンターも普通に殺す事もざらにある。」

師の言葉に息を呑むスウそんな弟子を見たチスは鼻で笑う様な素振りで弟子を挑発する。

「どうした？ビビったか？スウ・・・」

「びっ！ビビってなんかいません！何ぬかしていきなりですか師匠は！」

全力否定するスウをニヤニヤして見守っていたチスは不意に真顔になって口を開く・・・

「恐怖を感じ取る事は悪い事じゃあない、寧ろ大事な事だスウ。重要なのは感じ取った後に歯を食いしばって這いつくばってでも前に向かえるか向かえないかが本当に重要な事だ」

チスが冒頭と最後に二回も重要と言葉を挟む時は彼が師として本当に教えた事を話す時の癖だと知っているスウは騒ぐのを止めて素直にチスの言葉を聞き入るスウは恐る恐ると尋ねる様に口をひらく

「——師匠は私がフルフルとやり合ったらどうなると思います？勝てると思いますか？」

スウの問いに一瞬考える素振りを見せたチスは

「目に見えて大いに苦戦はするだろうが、最終的には2人共怪我無く勝利をもぎ取と思う・・・」

「目に見えて苦戦ですか？まあ私らしいと言えば私らしいですけどまだまだ全然實力不足なんですね・・・はぁ・・・」

自らの目指す實力に程遠い自分の力量に思わずため息を吐くスウ・・・そんな弟子に師は頭に手を乗せて豪快に撫でつける・・・

「痛っ！ちよつとだけ痛いですよー師匠」

少し膨れるスウにチスは・・・

「悪い悪い、でもよ今の自分の實力不足を嘆いてもどうしようがないだろ？物事はマイナスに捉えるよりプラスで捉えた方が好転する可能性が高いんだからステップアップステップアップの気持ちで頑張れ！」

なははは、と笑いながらまたもや弟子の頭を豪快に撫でつけるチスに今度は不器用ながらも笑みを浮かべたスウは・・・

「そうですね！何事もうじうじになるより前向きに捉えた方がもつともっと高見にたてる可能性が増えますよね！此からは何を言われても卑屈にならず前向きに捉えて師匠に並ぶ様なハンターになってみせますから誰よりも近くで見ていて下さいね！師匠！」

すっかり立ち直ったスウに満足げに頷きながらもそう言えばまだ立ち回りについて説明していなかった事を思い出し、チスは慌てて説

明を始めた……

《――二時間後――》

「うげえ〜！蒸し暑い〜！」

ベッタリと肌に纏わりつくような湿気とジワジワと上がって来そうな熱気に思わず本能的な叫び声をあげるスウ。

「師匠、沼地ってこんなに暑いもんなんですか？」

「まあ、大体こんなもんだろう……」

「う〜……イメージとしてはもっとひんやりした場所だと思ったのに全然違いますね……」

だれ気味なスウを横目に涼しい顔のリーネは……

「慣れたスウ、慣れたらこの湿気と暑さも別段気にする物でも無くなる。それにフルフルは洞窟をテリトリーに活動するから実質的に暑いのは今だけだ。」

「う〜、慣れるまではいたくないよ〜」

うだうだと話している間に洞窟の入り口があるエリアに入っていく・

「待て、イーオスがいる……」

エリアに入った直後に目的である洞窟の入り口付近にイーオスが陣取っている姿を目ざとく見つけたチスは先を歩くりーネとスウを呼び止めるも――

「ギャオ！ギャオ！」

あつさりと気付かれイーオス達は此方に突っ込んでくる・・・その数ざつと九匹！

「ノルマは一人三匹！スウ！敵さんはランポスよりもタフだから気を抜くなよ！散開！」

《はい！（応！）》

鉄刀（神楽）を抜刀して突っ込んでくるイーオスに迎撃体制で待ち構えるスウ・・・そこへ、早速一匹のイーオスが突っ込んできた！

「ギャオ！」

「甘い！」

前面に跳躍して此方の喉笛を狙ってくるイーオスを最小限の動きでかわしたスウは振り向き様に目標の首筋目掛け必殺の突きを繰り出す！

「はあっ！」

絶対の自信を持って放たれた刺突は吸い込まれる様にイーオスの急所に突き刺さりその命を容易く絶命へと追いやる・・・

「次！」

息つく間もなく構え直したスウは前方に此方の様子を窺っているのかジツとしているイーオスを視界に捉えて今度は自分から突っ込んでいく！

「ギャツ！ギャツ！」

自身に向かってくるイーオスもスウに反応したのか威嚇の声を上げ、スウを迎え撃つ！

双方の距離が己の攻撃範囲に近づいていくとスウより先にイーオスが動く！

「カツ！ペツ！」

まるでそこいらのオッサンが路上で痰を吐き捨てる様に吐き出されたそれはイーオスが持つ毒性の強いブレス・・・しかし、それも・・・

「はっ！せいやぁーっ！」

コンマ数秒の予備動作をスウに見切られ跳躍と共に顔面を斜めにぶった斬られ沈黙する・・・

「予備動作の大きな攻撃はあたし相手には通じないわよ！」

決めゼリフと共に自身のノルマである三匹目のイーオスを睨みつける。

「グルルウウ・・・」

形勢が不利になるや低い唸り越えを放ちながら踵を返して逃げ出そうとするイーオス・しかし、

「逃がすわけねえだろ！」

振り向いた瞬間にチスからの大剣での一撃が叩き込まれ――

《グチャッ！》

重量感タップリの一撃はイーオスの頭を巻き添えにして地面を陥没させる……

「あつ！あたしのノルマ！……な、何て事してくれやってますか！師匠！」

「悪い悪い、ついたぎつちまってな……はは」

ばつが悪そうに後頭部をガシガシとかいたチスは苦笑いを浮かべ話を何とか逸らそうとリーネを見ると彼女も自身のノルマを達成したのかガンランスをしまい込みながら此方に近づいてきていた……

「怪我とかしてねえのか？リーネ？」

「自分なら問題はない。まあ、さすがにあなたとスウの様に早期にノルマ達成は出来なかったのが悔しいがな……」

「そつか、まあ何にしてもみんな怪我がなくてよかった……さあ！こっからが今回の主戦場になる洞窟だ！」

チスの言葉に視線を洞窟の入り口に動かした2人は近づいて覗き込む……

「何かやたらと冷たい風が吹いてる……気持ちいい」

入り口から吹き出す風に涼み、和むスウ・

「今は外にいるから心地いいが中に入ってしまったえばもの凄く寒い場所だから危険のない間にスウも一緒にホットドリンクを飲もう・」言葉と同時にずいっとリーネから差し出されたホットドリンクを受け取ったスウはマジマジと中に入っている赤いドロドロとした液体を覗き込む・・・・

「何か辛くて飲みにくそうできそまずそうにしか見えないんだけど・
・飲まないとだめ？」

上目使いに聞いてくるスウにリーネは満面の笑顔で・

「さつさとのみやがれ（？+笑顔）」

「うっ」

青筋をたてたりーネに睨まれ渋々と蓋を開けたスウは意を決したようにホットドリンクを一気に飲み干す・

「うっ、考えてた以上に辛くも不味くもないけど飲みづらい・」

顔をしかめるスウにリーネはクスクスと笑みを零しスウを励ます・

「まあ、最初は抵抗があるかもしれないが慣れたら別段気にせず普通に飲める様になるからそれまで我慢だ！スウ！」

「うん！頑張る！」

リーネが励ましスウがそれに応える様子を暖かい眼差しで見守っていたチスはまだまだことなく幼さが残る2人に先に進む事を促す・

「あんまり時間をかけると日が暮れてしまつからそろそろ先を急ごう・・・いくぞ！スウ！リーネ！」

【はい！！】

スウとリーネの威勢のいい返事を皮切りにチスを先頭に三人は洞窟へと入っていく・・・

《30分後》

洞窟内を順番に探索していく三人だがフルフルどころかイーオスやケルビ、アプトノスにも遭遇せずになだ漠然とカンタロスなどの昆虫種を排除しながら先に進んでいく・・・

「今回のフルフルは俺が考えてたより強いかもしれないな・・・」

ふと、比較的広いエリアに出てしばらくした時に独り言の様にチスは言葉をこぼした・・・

「どついう事だ？チス？」

すぐに反応を示すリーネにチスはあたり一面を見渡しながら口を開く・・・

「多分このエリアはイーオス達の住処だっただろうな・・・ほら、

そこいら辺にケルビとかアプトノスの骨とかが転がっているし、あそこには密集して卵の殻みたいのが散らばってるだろ？それが証拠だ。」

チスに言われ辺りを見渡したリーネとスウは彼が言うとおり此処が何となくイーオスの巣だったのだと理解する・・

「でも師匠？此処がイーオスの巣だった場所としてもフルフルの強さと何の関係があるんですか？」

「此処がイーオスの巣なのにイーオスどもが一匹もいないのは巢をフルフルに荒らされたってのはスウもリーネも何となくわかるだろ？」

チスの問い掛けに首を縦にこくり、こくりと振る2人・・

「俺が村の人にフルフルが現れたと聞いてからまだ2日も経っていないのに洞窟に入っても昆虫種以外のモンスターが一匹もいないのと入り口付近にイーオスどもが中に入らず指をくわえて屯っていた理由がフルフルの食い散らかしが原因としたら、野郎はかなりの強者だと思っぞ・・下手したら上位クラスに近いぐらいのなっ！・・」

最後の言葉と同時に突然スウとリーネに飛びかかり抱き込む様にして無理矢理2人が今いる場所から距離を離れたチス！その瞬間！

「■■■■■■■■■■！！！！！！」

白いそれは突然洞窟の天井からおぞましい鳴き声をあげながら文字通り落下してきた！

「いたたた・・・」

「痛ううう・・・」

「2人共無事か!？」

フルフルの奇襲から回避させる為とはいえチスの突然の行動についていけなかったリーネとスウは後頭部を地面にしこたまぶつけてしまい悶絶する・・・

「助けてくれたのは有り難いが、せめて危ないとか掛け声をいいながらにしてくれ・・・勘違いしてしまう・・・」

「そうですよ!私も心の準備が必要なんですから!」

「訳の分からん事を言っていないでさっさと戦闘体勢にはいれ!奴さんはやる気満々だぞ!」何故か顔を赤らめてギャーギャーと喚いていた2人だがチスの真剣な言葉に水を打たれた様に慌てて表情を引き締め戦闘体勢に入り改めて視線をフルフルに向ける・・・

「うげっ!気色悪!」

「何度見ても直視したくない容姿だな・・・」

それぞれに不気味な容姿を持つフルフルに嫌悪感示す2人だがフルフルは一向に構うことなく鼻を鳴らして地面に続く三人の匂いを辿っていき・・・

「バインドボイスが来る!気張れよ!散開!」

「はい!!!(応!!!)」

チスの言葉にすぐさま反応したリーネとスウはそれぞれのフォメーションについた瞬間！！！！

「■■■■——————！！！！！！」

新らしい餌を見つけて歓喜したフルフルの特大的叫びが洞窟内に響き渡ったのだった・・

第15話 苦戦と失敗と教えたかった事 修正

「■■■■■■——————！！！！！！」

開戦初っ端にいきなりバインドボイスをしかけてきたフルフルに思わず耳を押さえ込んで固まってしまうスウとリーネ・

「ぐっ！・・・」

「なっ！？」

頭の中では動きを止めてはいけない事はスウもリーネも理解しているが、如何せんバインドボイスをうけた途端に体が全く言うことを聞いてくれなくなってしまう！

（ヤバい！このままじゃあ！）

いきなり窮地にたたされ半ばパニックに陥り何とか体を動かそうと必死にもがくスウを余所に地面の匂いを嗅いで敵の立ち位置を察知したフルフルは顔面を小刻みに震わせる——その瞬間！

「■■■■■■——————！！！！！！」

首がゴムの様に伸びて弾丸の様なスピードでスウに襲いかかる！

（駄目！間に合わない！？）

回避が間に合わないと悟り歯を食いしばって衝撃に備えるスウは自身とフルフルの間に割って入る師の影を視界に捉えた——ギ

イツン

「師匠！」

大剣を盾代わりにいなしで迫り来るフルフルの顔面の軌道を大きく横に逸らしたチスはガードの反動を利用して反撃の一撃を繰り出す！

「どっ！せいいつ！！」

超重量を勢いに乗せ振り切られた横への一撃は伸びきった状態から結構なスピードで戻っていくフルフルの顔面をギリギリの所で引っ掛かる様にして捉えた！

「■ ■ つ！？」

浅い一撃にも関わらず火属性特有の小さな爆発を起こしながら与えた一撃に一瞬ながら怯む素振りを見せるフルフルに今度は滑り込む様にして足下にたどり着いたリーネが強烈な刺突をお見舞いする！

「ハアアアッ！」

裂帛の気合いを乗せて放たれた一撃は無防備なフルフルの横っ腹を打つ！が・・・

「ちっ！」

フルフルのやたらとぶよぶよとした皮に邪魔され攻撃を弾き返される・・・

「リーネ！あんまり突っ込みすぎるな！」

「いちいち言われなくてもわかつている！」

自分自身がフルフルの討伐経験があり、ガンランスの戦い方に絶対的な自信をもつリーネにとってチスの指示と忠告は邪魔以外の何物にも無かったのか、癪癪を起こしチスの言葉を無視しまるで単独での立ち回りを始めてしまふリーネは先ほど弾かれた一撃のスペースを素早くカバーする様に砲撃を始める・・・

「そらそらそらっ！」

掛け声と共に放出されていく砲撃の全てを命中させるもそれ程のダメージを受けた様子を見せないフルフルは地面に四肢と尻尾をつけて反撃の体勢に入る！

「放電だ！一旦距離を離せ！リーネ！」

チスの叫びと同時にフルフルの体を青白い光が包み込み周辺に稲妻を走らせる・・・が、

「——この瞬間を待っていた！」

その直前にバックステップでギリギリ放電の届かない安全圏に移動したリーネはすぐさまガンランス最大の攻撃手段である竜撃砲の発射体勢に入っていく・・・

「自分と遭遇した事を後悔しろ！近距離！竜撃砲！！！！！」

主の声に呼応し放たれた竜撃砲は未だ放電を続けるフルフルの前面に押し出した顔面に着弾してその巨体を横転させる！

「どうだ！チス！」

黒煙が舞い上がる中で自身の实力を見せ付けたリーネは振り返ってチスにどうだ！とばかりに胸を張る・・が――

「ばっ！馬鹿野郎！敵から視線を外すな！」

「リーネ！後ろ！！」

チスとスウの叫びを聞き取り慌てながらフルフルに視線を向けたその瞬間！

「■■■■■――！！！！！！！」

「ぐうっ！！！」

反撃の狼煙となるフルフルのバインドボイスを至近距離でまともに受たリーネは思わずランスと盾から手を離して耳を塞いでしまう・・

（しまった！）

頭の中では今すぐにでも盾とガンランスを拾い上げて敵の次の行動に対応したいリーネだが本能がそれを許さず未だに束縛から脱せずにいる彼女を尻目にフルフルは青白い吐息を撒き散らしながら次の行動にでる！

「■■■■■――！！！」

自身に稲妻を帯電させその体ごと突っ込んでくるフルフルにリーネ

は為すすべもなく受けようとするその時！

「させるかあああつ！」

この状況でただ一人フルフルのバインドボイスの影響を受けないフルフルZシリーズが持つスキルのひとつ、高級耳栓の恩恵に守られたチスがとんでもないスピードで突っ込みリーネを攻撃範囲外に突き飛ばす！

「きゃあつ！」

普通の彼女からは想像もできない女の子らしい悲鳴を上げて尻餅をついたリーネは慌てて立ち上がり自分を守る為に逆に攻撃範囲に入ってしまったチスを目で追う・

「チスーーーー！！」

リーネの叫びも虚しく攻撃範囲内のど真ん中の直線に入ってしまったチスはフルフルが放った体当たりをまともに喰らって吹っ飛ばされる！

「がつ！？」

受け身も取れず体をダイレクトに壁へと強打されるチスに追い討ちを掛けたいフルフルはすぐさま自慢の嗅覚を利用してチスの居場所を感知してトドメをささんと大きく首を持ち上げてブレスの予備動作を取り始める・・・が、

「師匠をよくも！半殺しにしてやる！はあああーーーーっ！」

純粹な怒りと気合いの乗った斜め上段からの振り下ろしはフルフル

の弱点部位である首に深々とした裂傷を刻みつけ、返す刀で自身の持てる全ての技量を駆使して怒涛の連撃を繰り出していく！

「はっ！せい！やつ！とう！」

縦横無尽に振り回されるスウの剣戟に怯んだフルフルはたまらず大きく跳躍して天井に張り付き空洞を利用して別のエリアに逃げていく・・・

「ちっ！仕留めきれなかった・・・って、悔しがってる場合じゃなくて師匠は！？」

「何とか無事だ・・・」

真後ろから声がかかり慌てて振り向くと先程の一撃で痛めたのか右肩を反対の押さえながら此方に歩み寄ってくる師を視界に捉えた――

――瞬間！

「師匠！ご無事だったんですね！私てつきりポツクリ死んじやったのかとおもいましたよ！」

言葉だけを聞いているとこ奴は最低の奴だと誤解されてもしかたない事をのたまうスウだが、チスにはそれがスウなりの最大限の心配だと理解している彼は涙目で自身に駆け寄って抱きつこうとする弟子を――

「むぎゅ〜〜！前にすすめない〜〜っ！」

片手で頭を押さえ込んでそれを阻止する！

「む、何で頭を押さえ込むんですか？」

頬を膨らすスウに苦笑を浮かべる師はスウの問いには答えず視線をリーネに向ける・

「チス・・すまない・・・」

利き腕を胸元に添え、ばつが悪そうにただ謝罪の言葉を口にしたり
ーネをチスは・

「怪我はねえのか？リーネ？」

「へ？」

「怪我はないのかと聞いてるんだが・」

確実に悪態をつかれるかぶん殴られるかのどちらかと思いこんでいたりーネは自分が全く予想していなかった言葉に目を丸くしながらも何とか返事をかえす・

「じ、自分は平気だ！どこも怪我はしてない・・ただ少しだけお尻がいたいが・」

最後の方は声が萎んでしまつて殆ど聞き取れなかったが、とりあえずはリーネに怪我がなかった事がわかったチスは何時もの不器用な笑みを浮かべ口を開く・

「怪我してねえなら上々！何時までもここでボサツとしても仕方ねええしサツサとフルフル探索に戻ろう！いくぞ！スウ、リーネ！」

「えっ！？ちよつ、ちよつと師匠！怪我は！？」

突然歩き始めた師に驚き慌て、それでも師の背中を追うスウと対象的に彼の背中を追う一步を踏み出せないリーネ・

「どうした？やっぱりどつか痛むのか？リーネ？」

ただ棒立ちに突っ立っているリーネに心配になったのか振り返り彼女に近づいていくチスにリーネは――

「――どうして・・・どうして怒らない？貴方の指示を無視して結局は貴方に庇われ怪我をさせた自分をどうして怒らない！」

自分が起こした失態を恥ずかしく思ったのか次第に声を荒げ問いただすリーネ・

「言っただろ？守りきってみせるって、これぐらい想定内だ・・・それに・・・」

「それに？」

「団体の行動時に個人のミスで団体に被害が出たとき時に一番つらいのはミスをした本人だという事を経験上知ってるから・・・わざわざ一番責任を感じている人間を責めてもしようがないだろ？」

「・・・」

チスの言葉の節々に気遣いと優しさを感じ取ったリーネはより自分が行った行動を恥じて言わんとしていた言い訳地味な言葉を飲み込んで押し黙ってしまう・・・

「リーネ・・俺達《4カード》が海千山千の強豪ハンター共を押しのけて最強の座に着けた要因が何だかわかるか？」

突然突拍子無くチスの口から発せられた問い掛けにリーネは小首を傾げながらも何とか答えなくてはいけないと言う焦燥に駆られ本当にそれが答えなのだろうかと疑問を持ちながらも口を開く・

「個々の力とチームワークではないのだろうか？姉さんがいてシュルツ・ハインとテソ・パイロンと貴方と言う絶対的な個の力が上手く噛み合ったから4カードは史上最強のチームとしてのし上がったのではないだろうか？」

上目づかいにチスの反応を伺うリーネにチスは笑みを浮かべ彼女の推察の正解とそれに対する補足の意を伝える為に言葉を繋げていく・

「殆ど正解だリーネ——でも言葉が少し足りねえな。俺達《4カード》の面子は他の強豪と言われたチームより個々が自己犠牲を持ちそれぞれが仲間を守り活かす動きを心掛けて行動し続けたからこそ最強であり最高のチームの称号を受けるまでに登り詰めたんだと思う・・結局それは今でも間違ってるんじゃないと思える友から教えて貰った大切な物だから——」

スウとリーネはただ集中してチスの言葉の続きを聞き入る・・

「——俺はお前達2人を守り活かす動きを心掛ける。だからスウはリーネを守り活かす動きをリーネはスウを守り活かす動きを心掛けて行動して欲しい・・これが今回師として年上としてお前たちに一番教えたかった事何だが・・聞き入れてくれるか？2人共？」

チスの問いに真っ先に反応したスウは威勢の良い返事を返す・

「当然です！師匠もリーネも守って活かしきる動きを私がして見せます！」

「おい、俺は・・・」

自分の事はカウントしなくても良いと伝えようとするチスだがスウは止まらない・・・

「何ぬかしていやがりますか！私個人にとっては師匠ですけどチームとしてみたら一員でもあるから師匠も私達がお守りします！ねっ？リーネ？」

「ああ！自分もチスとスウを活かし守りきって、必ず先程の借りを帳消しにするぐらい勝利に貢献する事をアンスリウムの名に賭けて誓おう！」

先程とは打って変わってすっかりやる気を取り戻した2人を半分呆れながらも優しい眼差しで見守るチスは自身の考えを受け入れてくれた2人にぶっきらぼうな口調ながら礼を言った・

「——ありがとな・・・2人共・・・」

「な、何を突然お礼なんか言ってやがりますか！恥ずじゃないですか！」

「そつだそつだ！頭のネジでも吹き飛んだか？」
突然礼を言われたのが照れくさかったのか顔を赤くしてとんでも

ない憎まれ口をぬかす2人を見るチスは照れ隠しだと解りながらもムカつき――

《ゴスツ》

《ゴスツ》

―― それぞれに一発ずつ頭突きをぶちかます！

「・・・いたたた」

「うゝ・・・頭痛い・・・」

「さっさとフルフルの探索にいくぞ？スウ、リーネ？」

言葉と同時に歩き出すチスに2人はダメージが抜け切っていないが慌てて立ち上がり師の背中を追いかける・

「あゝ！待ってくださいよ！師匠！」

「チス！いきなりの頭突きは反則だぞ！」

頭を押さえ込みギャーギャーと文句を言いながらも慌てて着いてくる2人を背中で感じ取ったチスは一人笑み零しフルフルが逃げた筈である洞窟内の最深部に足を進めて行くのだった・・・

第16話 それぞれの出来る事 修正

ジユウ・・ジユウ・・

洞窟内の最奥に位置した比較的広い広場の天井にぶら下がり首を垂らすフルフル・・と、それを離れた岩場の影から覗き見るチス達・・

「フルフルはまだこつちに気付いてないんですかね？師匠？」

「おそらくな・・それよりもスウは全力で跳躍したらアレに届くか？」

チスの指差す方向を目で追ってある一点に停止したスウは一瞬目をクワツと広げ師が何を言いたいのかを理解し慌てて首を横に振った。

「むっ！？無理です！無理！ジャンプ力には自信がありますけど流石に飛び台無しにはあそこまで届きません！」

「ほう・・じゃあ飛び台があれば届くんだな？」

「考えがあるのか？チス？」

「まあな、2人ともこつち来い」

不敵な笑みを浮かべ手招きするチスにスウとリーネは何か嫌な予感を感じながらも素直に近づくと——彼は自身が思いついた考えをそれぞれに耳打ちする・・

「ここでスウを・・・して・・・きた・・・を俺とリーネが・・・」

2人にしか聞こえない様に小さな声で話すチスの考えを聞いたスウとリーネは・・・

「うゝん・・・そんなに上手くいきますかね？」

「確かに・・・上手くいけば一気に体力を削れるが自分には貴方の動きに合わせられる自信が無い・・・」

不安げに意見を返す2人にチスは苦笑を浮かべ・・・

「まあ失敗してもコツちに直接的な被害がでるわけじゃあねえからやれるだけやってみようぜ。」

「うゝ師匠がそう言うなら・・・」

「失敗しても文句無しなら・・・」

「決まりだな！よし！じゃあ——いくぞ！散開！」

《はい！！（応！！）》

チスの号令を合図に先頭をリーネに置いて一気に速度を上げて駆け出す！

「リーネ！掛け声はお前に任せる！タイミングはスウと俺が合わせ

る！」

先頭を突つ走るリーネにほぼ併走する様に並び声を掛けるチスにリーネは軽く頷きフルフルがぶら下がっている真下近くへ潜り込むと一気に緊急停止しながら振り返り大声で掛け声を始める！

「いち！！」

「おっしゃあ！！」

ほぼ併走して走っていたチスも緊急停止してリーネの横にならび互いの両手を重ね合いそこから！

「にいのっ！！」

一番後ろからとんでもないスピードで突っ込んできたスウが2人の重ね合わせた手のひらに片足を乗せ・

《さあ————ん！！》

一気に跳躍する！

「■■■■！！■■■■————！！！！」

突然の奇襲にようやく反応し真下にぶら下げていた首を持ち上げて弾丸の様に迫って来るスウを撃ち落とそうとするフルフル——だが！

「遅い！！」

軌道を先読みして体すれすれで回避に成功し鉄刀の柄に手をかける

先程リーネと自分で打ち上げたスウのキャッチに走っていた・・

「うっ・・キャッチするならもつと優しくキャッチしてくださいよ」

キャッチの仕方が気に入らないのか文句をぬかすスウに苦笑いを浮かべて聞き流すチスはとりあえずスウを腕から下ろして視線をフルフルに向ける――

「結構削れましたかね？ 師匠？」

「・・・」

問い掛けには答えずただ黙って視線をフルフルに向けたまま眉間に皺を寄せるチスの姿を見たスウは闘いは此処からが本番なのだと感じて気を引き締める・・すると、

「■■■■■■・・・」

ゆっくりとはあるが確実にフルフルは立とうともがき始めた！

「くっ！ さき程の攻撃を食らってまだ余裕は崩しきれないとは・・・」

「やっぱ、敵さんは並の下位じゃあないみたいだな・・・」

いつの間にか近くにきて悪態をつけるリーネに同意するチスは自身

の大剣の柄に手を掛けながら気を引き締め直す・

「気張れよ二人共！真剣な凌ぎ合いはこっからが本番だぞ！」

【はい！（応！）】

息の合った2人の声を背中で感じてそれを鼻で笑ったチスは視線をフルフルに移す・

「■■っ！ ■■っ！ ■■ ■■っ！」

青白い吐息を撒き散らしながら怒り状態に突入したフルフルは稲妻をほとばしながらゆっくりと首を持ち上げていく・

「ブレスくるぞ！食らうと厄介だから避けるよ！2人共！」

チスの言葉と同時に振り下ろされて放たれたフルフルの地を這う電気ブレスは最初は大きな一つの塊からいきなり五つに分散されて三人に襲いかかる！

「わっ！？わわわっ！」

フルフルが持つブレスの特長を事前にチスから聞かされていたスウだが自身が考えていたよりも遥かに回避しづらい事に驚き反撃の鼻を挫かれる・・・

「スウ！無事か！？」本人も真つ青な位ギリギリの所でブレスを回避したスウを心配になって声を掛けるリーネに彼女は・・・

「うん！大丈夫！ありがとね！リーネ！」

自分を気遣ってくれる友に軽く礼を言つて意識を攻撃に切り替える・

「スウ！お前の三方は自分が守りきる！だからスウは前だけを見て全力で突き進め！いくぞ！！」

頼もしいリーネの言葉を真横から聞くスウは心の中で友への感謝をしつつ自分達より先にフルフル下へと到着して師の背中に辿り着く為に一気に速度を上げて駆け出す・

「そこを動くなよ！うおおー！！！！っ！！！！」

自分勝手な言葉を抜かしながら全身を使つて大剣を真横に振り抜いた一撃は動きの遅いフルフルの胴体を完璧に捉える！

「■■■■？ ■■■■■ー！！！！」

フルフルが苦手とする火属性にあたる炎剣リオレウスでの真横からの一撃に体をくの字に曲げたフルフルはそれでも何とか踏ん張つて反撃の放電を繰り出す！が、

「甘い！」

対フルフル戦では相当な経験を持つチスは余裕を持つてそれを回避する為に一旦距離を離し放電が収まるのを待つ・・と、

「師匠！」

背後から追いついたスウとリーネがチス傍に駆け寄つてそれぞれの獲物を抜刀しフルフルを睨む――

「スウ！リーネ！お前達は放電が収まったと同時に右足だけに攻撃を集中しろ！野郎を転かして一気に叩くぞ！」

チスの言葉に黙って頷くスウとリーネは視線をフルフルに向けたまま放電が収まるうとするタイミングを見計らって一気に走り出す！

「ハアーーーーッ！！」

先陣を斬ったスウの外側からの一撃はぶよぶよとした皮に邪魔されながらもフルフルの右足に小さくない裂傷を刻みつける！

「■■！！？ ■■■ーーーーー！！」

一瞬動きを止めて苦痛な鳴き声をあげるフルフルだが直ぐ様体勢を持ち直して反撃出ようと動き出す――が、

「ちと黙ってる！！どっ！せい！！！」

チスに大剣で横面を張り飛ばされる事で脳を揺らされて目眩を起こしてしまったフルフルは行動する事が出来ない！

「リーネ！ここで行くよ！タイミングは――」

「自分がスウに合わせる！」

それぞれ意識しながら呼吸を合わせ動き出したスウとリーネの二人はフルフルの右足目掛けてなだれ込む様に迫っていく・そして、

「合い・・・」

「・・・一閃！！」

リーネの予測した通りに放電を終えたフルフルは匂いを嗅ぎつけてリーネの位置を把握し突然跳躍して此方に突っ込んで来る！

「くっ！・・・」

動きが遅いといっても怒り状態ならそこそこ俊敏な動きを行えるフルフルの攻撃を何とかかわすリーネはそれと同時に彼女自身が背中に背負うガンランスから竜撃砲の発射体勢が整った合図であるカチン！という金属音を耳にする・・・

（竜撃砲を足がかりにしてもう一度好機を作れるか？・・・出来るのか？自分に・・・）

間近で着地するフルフルを観察しながら一瞬の間に自問自答して考えを固めたリーネはチスを見る・・・

「チス！貴方に助けて貰ったさっきの借りを今度は自分が返してみせる！」

その言葉と同時にチスの返答を待たずに駆け出すリーネにフルフルは・・・

「■■■■！■■■■――！！！！」

即座に反応してリーネの動きを停止させる為にバインドボイスを仕掛け様と予備動作を取る！

（姉さん・・・自分を導いて来れ！）

今は亡き姉に願う少女は予備動作を終えて今にもバインドボイスをぶちかまそうと動くフルフルを無視して竜撃砲を発動させると同時に天井スレスレまで届かん！という勢いで真上にガンランスを放り投げる！その瞬間！

「■■■■■■——————！！！！」

フルフルのバインドボイスがぶちかまされリーネは本能的に耳をふさいで立ちすくんでしまう！

「くっ・・・！」

「ぐっ！リーネ！」

リーネが突っ込む様を見てすぐさまフロアに動いていたスウもバインドボイスを受けて固まってしまうがそれでもリーネの助けになろうと必死に足掻く彼女の視界を小石が結構なスピードで通過していき——

カンッ

と、音を立ててスウの前にいるリーネの防具にぶつかる・・・

「なっ！？・・・」

一瞬何が起きたのか解らず驚き振り向こうとするリーネを後ろから石を投げつけた張本人が大声で叫びそれを遮る！

「振り向くな！リーネ！今ので動ける筈だからお前は自分の出来ることの最善を尽くせ！」

「は、はい！」

チスの声に後押しされて深く集中していくリーネは未だに自分がバインドボイスで動けずにいると勘違いして攻撃に転じようとするフルフルに頭の中で考えている通りのカウンターを実行する！

「タイミングは・・・完璧！竜撃砲！・・・発射！！」

言葉の冒頭で先程天井近くまで放り投げて回転しながら落下して来るガンランスをひっ掴み放たれる竜撃砲はジャストのタイミングで此方に体当たりをぶちかまそうとするフルフルの胴体を打ち抜き悶絶させる！

「■■！！？ ■■■——！！！！」

予想も出来ない突然の衝撃に土手っ腹をぶち抜かれたフルフルは激痛に悲鳴をあげながらも何とかそれでも踏ん張ろうとするが——
——遂には耐えきれず片膝をつく・・・

「好機到来だ！チス！スウ！二人共頼む！」

「任せろ！リーネ！お前が作ったこの好機を絶対にものにしてやる！いくぞ！スウ——！！」

「はい！師匠！」

言葉と同時に一気に駆け出す師と弟子にフルフルは氣力を振り絞って首を小刻みに震わせて弾丸の様に首をチスに向けて伸ばしてくる！が、

「緩いわ！はあっ！」

大剣の重みもどこ吹く風で跳躍したチスは真下を通過していくフルフルの首を大剣で突き刺す！

「■■■■■■——————！！！！」

ウナギを割捌く時の様に大剣で首を突き刺され余りの激痛に痙攣をお越しながらのた打ち回るフルフルにトドメの一撃を与える為にスウは走る！

「決めるよ！スウ！行け————！」

「はい！任して下さい！合い！一閃！！はあああ—————っ！！！！」

裂帛の気合いで鉄刀を突き刺し真一文字に切り落とすスウの一撃に首を見事に割られたフルフルは声を上げる事が出来ない代わりにピタン！ピタン！と跳ねさせ遂には全く動かなくなる・・・

「やりましたかね？師匠？」

最後の一撃を放った本人的には手応え充分に感じたが一応それでも不安になったのか恐る恐る確認を取るスウにチスは・・・

「ああ！依頼達成だ！」

ただ一つ満足げに頷きフルフルが絶命した事を伝える・・・すると、

「やった——————り——————ネ！師——————匠！」

余程三人で勝利した事が嬉しかったのか喜びを爆発させてチスとり

ーネに飛びつくスウ・

「お、おい！スウ！苦しい！」

「リーネ！私達やったんだよ！師匠が絶対苦戦するって言ったフルフルに大した怪我も無く勝ったんだよ！ちゃんと三人の力を合わせて！」

「あ、ああ・・・そうだな・・・やったんだな・・・私達は・・・」

最初はスウのテンションに押されて喜びの小さかったリーネも次第に少しずつ嬉しさがこみ上げてきて・・・スウを抱き返す！

「やったな！スウ！私達は勝ったんだ！三人の力を合わせて！」

「むぎゅー！？苦しいよー！リーネーー！」

自分が人に抱きつく事は慣れているスウも人に抱きつかれるのは慣れていないのか呻くスウとそれを無視して更にキツく抱き締めるリーネを優しく見守るチスは二人に声を掛ける・

「良く頑張ったな！二人共！さあ、あんまりこのくそ寒い洞窟にいても仕方ないからさっさと剥ぎ取りを済まして此処を出よう！」

「はい！師匠！・・・リーネ！どっちが先に剥ぎ取りを済ませるか競争だよ！」

「上等だ！自分の实力を見せてやる！」

きゅきゅきゅじゃれ合いながらフルフルの亡骸に駆け出す2人の背

中をやさしく見つめ微笑んだチスは自分もゆっくりとスウトリーネ
の後を追うのだった・・・

第17話 新たな太刀 修正

フルフル討伐から数日後のカコ村で和氣藹々と歩くスウとリーネ・
・
2人の目的地は村で唯一の武器と防具を扱うエンヤ婆さんの店だった――

「リーネ！早く早く！」

「ふふつ、そんなに急がなくても新しい太刀は逃げだしたりはしないぞスウ。」

そわそわと自分を急かすスウに優しく微笑み後を追うリーネ。

「うゝ、逃げ出したりはしなくても早く見てみたい気持ちを抑え切れないの！だから行こ！」

「やれやれ、しょうがないなスウは・・・」

スウに手を引つ張られて苦笑いを浮かべるリーネだが、スウの気持ちをよく理解している彼女は嫌そうな表情一つ浮かべずただ黙って急かすスウに合わす様に歩くスピードを上げて加治屋を目指す・・・

「こんにちはー！エンヤの婆ちゃんいるー？」

「はいはい、居ますよ。今日はスウちゃんが新しく新調した太刀を取りに来る日だからちゃんとさつきから此处で待ってましたよ。」

加治屋に入ったスウを出迎えてくれる竜人族の老婆は柔和な笑みを

浮かべてスウに言葉を返す・・

「エンヤの婆ちゃん！もう太刀出来てる？」

「ええ、出来ていますとも・・丁度ついさっきに仕上げを済まして奥にしまつてあるから取つて来るまでその椅子に掛けて待っててくれんかの？」

「うん！わかった！」

屈託な笑顔を浮かべ了承するスウを見る老婆は一つ笑みを零してそのまま店の奥へと入っていく・・・

「それにしても偏狭のこの村によく竜人族の加治師がいるものだな。」

リーネの言う様に基本的に竜人族の大半の加治師は高い技術を売りにして出稼ぎなどを理由に故郷を離れドントルマなどの大都市に出てしのぎをしている為力コ村の様な偏狭な村に居を構えるのはとても珍しい。

「うーんと、エンヤの婆ちゃんは何か師匠がドントルマから引つ張つて来たつていう話は聞いた事があるけど・・どうなのかな？」

愛らしく首を傾げるスウにとりあえずヘッドロックを掛けるリーネは1人呟く・・・

「むぎゅー！！！」

「うーん、不思議だ。」

もがくスウを余所に一人思案するリーネだが奥からエンヤ婆さんが大事そうに一振りの太刀を持って出てきたため考える事を中断してスウを解放する。

「待たせたねえ。スウちゃんの新しい太刀・六尺二寸、斬破刀だ。」

「げげほ！あ、ありがとうございます！うわー！かっこいいー！」

言葉と同時にエンヤ婆から差し出された斬破刀を受け取ったスウは斬破刀が持つ魅力に思わず感嘆の声を上げる。

「抜いてみてもいい？エンヤの婆ちゃん？」

まるで新しい玩具を手に入れた子供の様に目をキラキラと輝かすスウにエンヤ婆さんは優しく微笑み頷く。

シュツ・・・

群青色の柄に手をかけてゆっくりと引き出されていく刀身にスウの目はますます輝きを増していく・・・

「綺麗・・・」

「確かに・・・」

斬破刀の持つ独特な刀身の美しさに思わずスウだけでなくリーネも相槌を打ち刀身の全体に視線を走らせて行き——そして気付

く。

刀身の茎の部分に独特な文字が刻まれている事に・

「白々善房？何これ？」

小首を傾げて此方を見るスウとリーネにエンヤ婆さんは小さく笑い
2人の疑問に答える。

「白々善房しやうしやうぜんぼうそれが加治師としての私の名さ。長い年月を修行に費や
して一流になった加治師が師事した人や作品を評価した者につけら
れる二つ名みたいな物さ。スウちゃんに何時までも無名の太刀を持
たす訳にもいかないしその斬破刀とスウちゃんが良い縁を築いてい
ける事を願って今回は彫らして貰ったんだよ。」

「ありがとう！エンヤの婆ちゃん！私この太刀を大事にするね！」

心優しき加治師の粋な計らいに感謝したスウは早速斬破刀を背中に
装備してその場で一回転して見せ2人の評価を仰ぐ・

「どうかな？似合ってるかな？」

「まあ、ぼちぼちでは？」

「よう似合っているよ。スウちゃん」

「えへへ・・・そう？」

とりあえずどつちつかずのリーネは華麗にスルーして素直に似合っ
てると言ってくれる言葉に照れるスウは店内にある全身を写す鏡の
前に立ち調子に乗る。

「やれやれ、スウがあの状態では家に帰れるのはまだまだ時間がかかる事になりそうだ。」

一人調子に乗って鏡の前で様々なポーズを撮って騒ぐスウを見るリーネは肩をすくめて小さく呟く様にボヤいたのだった……

《一時間後》

「師匠！ただいま戻りました！」

「おっ！おかえりスウ。何かリーネが疲れた感じになってるな。」

まだまだ元気一杯のスウとは対比的に少しげんなりしたリーネはチスの言葉に反応して億劫気味に言葉を返す。

「・・・チス、人の買い物に付き合わされて長い時間を待たされる事程疲れる物ない・・・」

「あはは・・・ごめんねリーネ。」

謝るスウにとりあえず生返事を返すリーネ。

「そう言えば今回は斬破刀を造るとか言ってたが出来具合はどうだったんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！見てくださいこの出来！刀身の美しさ！」

実は自慢したくてたまらなかったスウは話題がでるやいなや待って

ました！とばかりにすぐさま背中に背負った斬破刀を師に差し出す。

「ふむ・・・」

斬破刀を受け取って簡単に見聞し始めたチスだがしきりに頷くだけでなかなか口を開こうとせず不安になったスウはとりあえず言葉を掛けてみる。

「どうですか？私としてはかなりの出来だと思っんですけど・・・」

「ああ、良い出来だ・・・流石は白々善房が打っただけはあるな。スウも今度エンヤの婆さん会ったら改めて礼を言うんだぞ。」

「はい！わかりました！師匠！」

師の言葉に直立になって返答するスウにチスは苦笑を浮かべながら斬破刀を弟子に返し更に何かを自身の考えを口にしようとするがその時それを遮る様に《グウ》とどこからともなく腹の虫が鳴く音が・・・

「・・・・・・・・」

「わ、私じゃないですよ！師匠！」

何気にスウへと視線を向けると全力否定でアピールされたので今度はリーネを見ると・・・

「すまない・・・気にせず話を続けてくれ・・・」

顔を真っ赤に染めた彼女は自分の醜態を隠そうとチスに話の続きを

促すが彼自身はとても続きを話す気にも成れずに二人に提案してみる・・・「メシにするか・・・」と、

「そ！そうですね！師匠のつまらんくそ長い話を聞いてるよりチャツチャとご飯を食べた方が時間を有意義に使えますしね！リーネもそう思うよね？」

一応は花も恥じらう女の子であるが故にリーネを気遣い師の提案に真っ先に食らいついたスウだが如何せん突然だったので言葉を選ばなすぎた彼女はこの数秒後にチスから三発も渾身の頭突きをプレゼントされる羽目になる・・・（彼女には悪気は無い）

「よし！今日はからあげの甘酢あんかけにレタスチャーハンで中華三昧と行くか！」

先程の頭突きによって行動不能になったスウとそれを介抱するリーネをほっぽりだして1人キッチンに突撃していくチスはテキパキと効率的に調理を始めていく・・・

《三十五分後》

「これは凄いな・・・」

テーブルに並べられた2つの大皿に思わず感嘆の声をあげるリーネにお皿を並べていたスウはまるで自分が作った様に胸を張って同調する。

「あのね！師匠は中華が得意なの！しかも完成するのが速いの！」

我が事の様に自慢するスウに専用の皿にキムチを盛り付けてテーブルに置きながら彼女の言葉を聞くチスは苦笑を浮かべて口を開く・

「別に得意と言う訳ではないんだぞ人並みだ。それにある程度の時間で完成まで持つて行くのは日々の炊事を怠らなけりやあ誰だつて出来る様になるから別段凄い事じゃあ無い・・さあ、中華は冷めたら考えられないくらいくそ不味くなるからさつさと食うぞ！では！いただきます！はむはぐはむ・・」

「あゝっ！！私の取り分！この馬鹿師匠！がつがつ一人でかつ込むなゝっ！」

「もぐもぐ（囃む音）世の中はすべて早い者勝ちと相場が決まつてる事をお前は知らないのか？」

「ムキーツ！だったら私にも考えがあります！ハグハグハグハグ」

「お前この野郎？甘酢ばつか食うな？」

照れ隠しにほぼ一人で喋つて勝手に自己完結していきなり食べ始めるチスとその行動に対抗して自分も凄いスピードで食事をし始めるスウの2人を見るリーネは一人笑みを零し改めて思う。

（誰かところやって食事を楽しむのはやはり良いものだ・・これから先もずっとこんな雰囲気の中で食事が出来る事を願いたい物だな・てっ！そういえば自分の取り分！？）

慌てて甘酢の大皿の確認をしてみると哀れさつきまで山盛りにあつた甘酢はスウの暴挙によつて三分の一以下まで数を減らしていた。

（おのれ！スウ！自分はまだ一口も食べていないと言うのに！）

怒るリーネは一瞬スウの頭をはたきたい衝動に駆られるも何とかそれを押さえ込み力業で残りの甘酢を自分の小皿へと移す。

「ズルいよリーネ！皿ごと持って行くなんて！」

「ふふん、この世は弱肉強食で早い者勝ちとさっき言ってたのはスウじゃあなかったか？」

勝ち誇ったリーネにスウは悔し紛れ罵声を吐く。

「鬼！悪魔！Aカップ！無乳！」

「くわっ！胸の大きさは関係ないしスウにだけはそれを言われたくないぞ！」

尚も唾をとばしあいながら互いに喚き合う2人を半ば呆れながら見守る火種となった張本人は自分の食事を済ましたのか懷から煙草を取り出して一服と洒落込みながら一人呟く・・

「平和だねえ・・」

しかし、この時のチスの言葉とは裏腹にその平和な関係が崩れ去る程の不幸がすぐ目の前まで忍び寄って来ている事に三人はまだ誰も気付いてなかった・・・

第18話 新たな国の守人と不幸への始まり

首都ドントルマの中心部に位置する時計塔・・・の内部に居を構えるギルドの総本山、時計塔本部の待合室でチスは一人コーヒーを楽しみながら煙草をふかす。

「めんどくせえ・・・」

周りの視線も少しは気になるも今の自分の率直な気持ちを言葉にする彼はガシガシと頭を掻きながら不機嫌にソファーにどっかりと座り込むチスに顔見知りなのか背後から苦笑を浮かべたギルド嬢が宥める様に声をかけてきた。

「もう・・・せつかくチス様やソシエツテ様以降全く現れなかったG級ハンターが七年振りに一人だけ認定される事になったんですからそんな事ばかりおっしゃらずに素直に祝福してあげてくださいまし・・・あつ！コーヒーのお代わりはいかがですか？」

「貰おう。祝福はしているが何で一番田舎の遠い村に住む俺がわざわざたった一人だけ本部に召集されて他のG級の奴らは召集されないかを疑問に思っているだけだ。」

語尾にふん！と付け加え憮然とした表情でコーヒーを音を立てて啜る彼はやれやれと肩をすくめて戻って行くギルド嬢の後ろ姿に視線を向けながら未だ始まらない認定式に苛立った・・・

（何故だか胸騒ぎする・・・虫の知らせって奴か？兎に角、式が終り次第速攻で村に戻るう。）

内心嫌な事が起こる予感がして止まないチスはそれを振り払う様に立ち上がり辺りを見回す・・・と、偶然にも旧友を発見！

「おっ！？ソシエツテじゃねえか。お前も来てたのか？」

「ああ、久しぶりだなチス。私としては来るつもりは無かったんだが他のG級ハンターが皆色々な事情から来れないらしく困ったギルドマスターが「普段全く来ないチス・リエーテとソシエツテ・エーテルハイムを強制で参加させてはどうだろう？」と言う鶴の一声で

参加を余儀無くされた。」

そう話すソシエツテは先程チスがしていた様にソファーにどっかりと座りぶつぶつと「折角の休暇が潰れた」とか文句を言いながらギルド嬢にコーヒーを注文する。

「そういえば今回G級に仲間入りする娘は私達の二つ年下にあたるみたいだな。」

「へえ、なら養成学校じゃあ俺達と入れ替わりで入ったとかか？」
基本的にハンターになる為には養成学校で二年間の教練を受けて認定試験に合格するか、大陸直属のハンターに弟子入りし三年の月日を過ごすかのどちらかに別れる。前者は修行の期間が短い事がメリットとして大きいが大半の生徒は基礎的な事しか教えて貰えない為に経験、応用的に見た時後者に比べる劣る。後者は後者でそれ程長くないハンター寿命の中で一年長く修行をすると言う事がネツクになり、個人の事情などで1日でも早くハンターになりたい者は前者を、三年と言う歳月でしつかりとした地盤を築きたい者は後者を選んでそれぞれライセンスを手に入れる。

「いや、学年でいえば我々の一つ下にあたる筈だ・・・」

「意外だな。俺達の一個下でレイラ意外にそんなすげえ実力を持つ子が居たなんて全く知らなかったぞ。何て名前なんだ？」

「アイビス・クローチェ・・・二つ名では《金色の激流》と呼ばれている弓使いだが知っているか？」

「うーん、二つ名は聞いた事がないがアイビス・クローチェって名の方はどっかで聞いた事がある。」

問い掛けに素直に答えるチスを見るソシエツテは軽く微笑みを零すも直ぐ真顔になり口を開く。

「G級ハンターの早期育成はギルドの至上命題だが、如何せん私達以降の世代は才能の面では豊かな輩が多いが精神面の脆さ故に一度挫折してしまえばそのまま崩れ去って行く者が大半だ。だから今回の認定で他の後輩達に対しても強い発奮材料になってくれるといいんだが・・・」

王族の御庭番を任せられ尚且つ先の災厄を経験しているソシエツテにとって国家の存亡を揺るがす程の強大なモンスターがもしも一度現れてしまえば今度は最悪な結末を迎えてしまうかもしれない・・と思う彼女の不安を言葉の端々に感じたチスは彼女の肩を軽く叩いた。

「ソシエツテ、お前の気持ちも分からんでもないが、また災厄が訪れるのか訪れないのかを今からビビっても何にも始まらんだろ？」

「しかしだな・・」

「俺達はハンターとしてはもう若くはないがまだ一応体は動く。だからその間に自分の出来る事をお互いに頑張つて最善を尽くそうじゃねえか・・」

チスの言葉を聞いたソシエツテはふうふうと息を吐き出し表情を和らげ――

「結局、それしかないな・・よし！」

掛け声と共に立ち上がってチスに視線を向けたソシエツテは一つ笑みを零し・・・

「チス・・今度酒でも奢つてやるから私に感謝しろ。」

素直じゃないが彼女なりに精一杯の感謝の言葉を口にする。

「おう、糞高い酒をパツカパカ飲んでやるから、ちゃんと大枚を銀行から落としておけよ。」

此方は此方でひねくれた言葉を返す2人は互いに小さく微笑み合うと、ちょうどそのタイミングを見計らった様に先程のギルド嬢が2人に声をかけてきた。

「チス様、ソシエツテ様、アイビス様の認定式の準備が済みましたので、そろそろ席に・・」

「わかった・・直ぐに向かう。」

ギルド嬢の言葉に頷いたソシエツテは視線チスに向けて口を開く・・
「さっ！折角の後輩の晴れ舞台なんだ。先輩である我々が遅れては示しがつかないし、そろそろ行こう・・チス。」

《本部一階広場》

認定式の準備が整いそれぞれ席に着いたチスとソシエツテ・・・しばらくするとギルドの大御所であるギルドマスターが壇上に上がり口を開く・・・

「本日は突然の呼び出しにも関わらずこれだけの面子がよく集まってくれた。まずその事に感謝したい・・・」

「長くなりそうだな・・・」

「何時もの事だろ・・・」

小声で言葉を交わすチスとソシエツテはギルドマスターのそれはそれは長い話が早く終わってくれる事を頭の中で願いひたすらに待つ・・・そして、

「・・・と、まあ少々前ぶりが長くなってしまったが、そろそろ今回の主役に登場してもらう事しよう。入って来なさい・・・アイビス・クローチエ。」ギルドマスターの言葉と同時に入口前で待機していたギルドナイトが左右に別れて扉を開けその奥から1人のハンターが勇壮な音楽と共に入って来る。

「ほう・・・」

割れんばかりの拍手の中を登場するガノトスZシリーズを纏ったアイビス・クローチエの容姿に思わず感嘆の声上げるソシエツテ・・・

「ガチガチに緊張して・・・初々しいな。」

「そうだな可愛げのかけらも無かったどっかの誰かさんとは大違いだ。」

「?まあ、認定式の前日にハイネの馬鹿と朝までドンチャン騒ぎを起こして二日酔いで死にそうな顔をしていた奴には言われたくないがな。?」

「・・・」

「・・・」

「・・・ふん! (グシャツ) ↑何かを踏みつけた音」「ぎゃっ!?!」ソシエツテが行った突然の暴挙に激痛が走り思わず足を抑えてうずくまってしまふチスにソシエツテは・・・

「どうした？拾い食いでまして腹でも痛めたか？」

してやったりの表情でわざとらしくチスの顔を覗き込む・と、

「こ！．．このボケナス！やりあがったな！ぶつとばすぞソシエツテ！」

「やれる物ならやってみる．．貴様とはそろそろ白黒をつけたいと思っていた所だ。」

「上等だ！」

最後の言葉をゴング代わりに此処が自分達の後輩の晴れ舞台だと言うことをスツカリ忘れたお馬鹿さんな2人は殴り合いを始めてしまふ．．．

「おい！誰かその馬鹿2人を止めるんじゃ！」

ギルドマスターの声が辺りに響き渡るも頭に血が上ったチスとソシエツテを止める事は誰にも出来ず．．．結局、事態が収まったのは30分以上がたってからだった．．

《本部室長室》

「この馬鹿者共がーーーーー！！！！！」

魂の叫びが頬を打ち、窓ガラスを割る。

場所は本部室長室．．お馬鹿さんの2人は正座を強いられ目の前には修羅が如く顔で佇むギルドマスターとその横でオロオロとするアイビス・クローチエ．．．

「貴様達には大陸を代表するハンターとしての自覚、先輩としての自尊心はないのか？折角、後輩が晴れ舞台に立つというのにそれをぶち壊す先輩がどこにいる！」

「あ．．あの、私は気にしていませんから、その．．先輩達を許して貰えないでしょうか？」

「しかしだな．．アイビス・クローチエ、本来なら貴殿の晴れ舞台になる筈だった今回の認定式を訳の分からん子供のような理由で殴り合いをおっ始めて式場をぶっ壊したのだぞこの二人は．．」

アイビス・クローチエの進言に洩る表情を浮かべ尚も言葉を繋げ様とするギルドマスターだが、

「リエーテ先輩とエーテルハイム先輩は私の憧れであり目標でもある人達です・・だから、お願いします！」

本来なら一番怒っていてもいい筈の立場である彼女にこうも頭を下げられれば流石のギルドマスターも肩をすくめ、

「ヤレヤレ、わかった・・アイビス・クローチエの気持ちを汲もう。そこの馬鹿二人も足を崩せ。」

お許しが出たので取りあえず正座を崩しすぐさま立ち上がるチス・・と、それに習って立ち上がろうとするソシエツテ・・だが、

「くわ！」

立ち上ろうとした矢先に足に痺れを感じたソシエツテは奇声をあげてそのまま尻餅をつく。

「おいおい・・」

目の前で面白可笑しくステン！と尻餅をつくソシエツテに一瞬爆笑しそうになるチスだが流石にそれを此処でしたらまたケンカになリかね無いので何とか笑いそうになるのを我慢して必死に呆れ顔を作り手を差し出す・・

「うゝ、正座など嫌いだ・・」

差し出されたチスの手を掴みながら何とか立ち上がるも口を尖らせるソシエツテ・・

「いやはや仲が良いのか悪いのかわかんのう、お前達は・・」

「あはは・・」

苦笑と愛想笑いを合わせた様に笑うアイビスにチスはソシエツテを連れ立って改めて自己紹介を始める。

「さっきはあんな醜態を晒してしまって申し訳なく思ってる。悪かったなアイビス・クローチエ、俺はチス・リエーテって言うんだ・・よろしく。んでこっちはソシエツテ・エーテルハイム・」チスに促されたソシエツテはバツが悪そうな表情を浮かべ・・

「ソシエツテ・エーテルハイムだ・・さっきはごめんなさい・・」

「い、いえ！そんな、とんでもない！あ、あの！アイビス・クロー
チエです！新参者ながら末永く可愛がつて下さい！」

先輩二人に謝罪されたアイビスは少しテンパってしまう。

「見て感じた様に精神年齢は君より下かもしれないけど一応ハンタ
ーとしてそこそこ経験は積んでるから解らない事があつたら何でも
相談してくれ・・・」

「はい！先輩！・・・あつ！？今のはい！は先輩達の精神年齢が下つ
て言うのの意味じゃないですよ！？」

コロコロと表情を変えるアイビスに思わず苦笑を浮かべたチスは・

・
「わかつているから、そんなに慌てなくて良いんだぞ・・・」

慌てる彼女を落ち着かせる為に優しい口調で語りかける。

「あ、あの・・・ありがとうございます・・・先輩・・・」

恥じらうアイビスに軽く微笑んだ彼は軽くよし！と彼女の肩を叩き
口を開く・・・

「んじゃあまあ、当初予定は達成出来たし、そろそろ行くわ・・・」

「もう行くのか？せめて今日ぐらいはゆっくりして行つてはどうだ
？」

「そうしたいのは山々だが、村の事も気になるし今回は早々に立ち
去る事にするよソシエツテ・・・でも、だからといってさっきの奢り
の件を忘れた訳では無いから今度来た時には覚悟しておけよ！あと、
ギルドマスターももう大分年なんだからあんまり怒ると体に悪いぞ・

・
」

「誰のせいで怒っていると思ってるんだ？貴様は・・・まあ、何にし
ても村に戻るなら気をつけて帰るがいい・・・」

ぞんざいな態度で手を振るギルドマスターにポリポリと頭をかいだ
チスはそのまま背をむけて、

「じゃあ行くわ。三人共、またな！」

「あ！あの！先輩！」

「うん？アイビス？」

一人扉に向かって足を運ぼうとするチスに背後からアイビスの声が掛かり振り向く・

「えっと、あの、今度機会があれば私に指導をお願いします!」

「???・俺が君に教えられる事があるのか怪しい所だが、まあ機会があればそんな時にな・」

その言葉を最後に今度こそ、そのまま扉を開け退出していくチス・

《しばらくして・》

「——憧れのハンター達をその目で見て感じ、何か掴めたかの？
アイビス・クローチェ・」

ソシエツテも退出した室長室でアイビスに問うギルドマスター・
「はい、やっぱりあの御二方は私が思った通りの人達でした。ギルドマスターに無理を聴いていただいて感謝します。」

「何、別に構わんよ・にしても、さつき馬鹿騒ぎと会話を含めて貴殿に其処まで想われる要素がああ2人にあるとはワシには思わんのじゃが・」

首を捻るギルドマスター見て尚アイビスは表情を崩さずゆっくりとしかし、ハッキリした口調で口を開く。

「私も御二方の事を何も知らなかったのなら、軽蔑していたと思います・でも、養成学校時代と先程のお話の途中で手を合わせた時にやっぱり先輩達は昔の先輩達のままなんだなって、私嬉しくて・」

「握手をした時に何か思う所があったのか?」

「はい・引いてしまうぐらい凄い手でした。半分これはもう人間の手にゃないと思ってしまっぐらいに・」

「ほう、手と目はその者の生きてきた道を物語ると言うが、貴殿がそう感じた所を見ると本当の様な。あやつらも最初は貧困の世代と揶揄されていたが結局、最終的には同世代で史上最多のG級ハンターを輩出し英雄の世代とまで称えられる程までに成長した。ドン

トルマは1日にしてならず・アイビス・クローチエ、貴殿もG級の位に立つ身になったが初心を忘れる事なくこれからも日々精進して頑張つていくのじゃぞ。」

「はい！ギルドマスター・・・」

威勢の良いアイビスの返事に満足したのかギルドマスターは一人頷き目尻を下げるのだった。

《一週間後》

「ふう、やつとこさ着いたな・・・」

一週間という長い船旅を終えてようやくカコ村に帰ってきたチスはわざわざドントルマからこの田舎まで乗せて貰った船の船員、船長に軽く礼を言つて船を降りる・・・と、

「旦那ーーーー！」

いきなり自分を待つていたかの如く名を叫びながら漁長が駆け寄つて来た。

「旦那！大変なんだ！スウちゃんとりーネ嬢が！」

かなり鬼気迫つた表情の漁長を見るに事がただ事では無いと察したチスは同時に自身が悪い予感的中してしまった事を心の中で嘆く。

「あの2人に何があつたんですか！？」

「スウちゃん達が・・・スウちゃん達が轟竜に襲われた村人を救出しに雪山にいつちまつた・・・」

「っ！あの馬鹿！」

「兎に角！旦那は酒場にいる筈の村長に会つて詳しい事情を聞いてくれ！俺は旦那が直ぐにでも狩場に行ける様に馬を手配しておくから！」それだけ言葉を残し慌ただしく走り去つて行く漁長・・・

「ちっ！スウの奴、あれほど俺がいない時に無理な依頼は受けるなと言つたのに！」

一人苛立ち弟子であるスウに悪態をついたチスは急ぎ足に村長が居る筈の酒場へと足を運ぶのだった・・・

第19話 雪山での救出活動とリーネの覚悟（前書き）

皆様あけましておめでとう御座います。相も変わらず遅筆で拙い作品ですが本年度もどうかよろしくお願いします。

第19話 雪山での救出活動とリーネの覚悟

「正気か！？スウ！」

チスが不在のカコ村でリーネの問いただす声が酒場に響き渡る。

「私は本気よ！リーネが行かないのなら私一人でも村の人を救出しに行く！」

「君の気持ちは分かるが相手は轟竜だぞ！少しは冷静になって考える！」

「……」

ピシヤリと言い放つリーネの言葉に一瞬押し黙ってしまふスウ・

「兎に角、今日か明日の朝にはチスが帰って来る。それまで待つんだスウ……」

言葉を何とか捻り出してスウを説得するリーネだが、その表情はまるで苦虫を噛み潰した様に顔をしかめている・彼女も本心ではスウが言う様に今直ぐにでも救出に向かいたい・でも、相手はあの轟竜、《絶対強者》の異名の通りその強さと獰猛さは上位の飛竜種きつての存在・

（仮に襲われた村人を救う為に自分とスウが罔になっても救い切れるかどうか・最悪な結末も十分あり得る。）

頭の中で考えを整理しようとすればする程自分の無力さに嫌気がするリーネ・

「もし……」

「うん？」

「もしも、今師匠の帰りを待ってそれで今助けられた命を救えなかったら？師匠の乗って帰って来る船が天候とかで1日でも遅くなったら？その時はどうするの？リーネ……」

「それは……」

今度はリーネが言葉に詰まり、ここぞとばかりにスウが自分の思いの丈をぶつける。

「リーネの言ってる事は正しいと思う。普段の私ならリーネの言葉を素直に聞いて従うと思う。でも！今度の件は違う！後悔したくないの！今ここで何も出来ずにジツと師匠を待つしか出来ないなら私がハンターになった意味が無くなっちゃうの！」

「スウ・・・」

スウの心からの訴えにリーネは何も言えなくなり・・・

「リーネ・・・お願い・・・わかって・・・」

「どうしてもいくのか？スウ・・・」

リーネの問い掛けに迷い無く首を縦に振るスウに彼女は・・・

「やれやれ、自分の強情さも相当だと思っていたが、君の強情さには負けるよ・・・」

「ごめんね、リーネ・・・」

「なに、いいさ・・・」

《チス到着後のカコ村酒場》

「———という事があつてね・・・」

村長からスウとリーネの話を聞いたチスは眉間に皺を寄せながら・・・
「そうですか・・・」

本来なら言葉の最後に舌打ちでもしたい気分だが目上の存在である村長が目の前にいるのでそれをグツとこらえるチス・・・

「スウちゃんもリーネちゃんも救出に向かうって事を僕達に話すと止められるって思ったんだろぅね。僕達が今朝に君の家に訪ねた時にはもう二人は出発した後で・・・その、申し訳ない。」

申し訳なさそうに頭を下げる村長にチスは・・・

「頭を上げて下さい村長・・・ある程度の事情は解りましたから兎に角俺も今すぐ準備を済ませて雪山に向かいます。」

「うん、ドントルマから帰って間もない君に頼むのは酷な事だと分かっては居るんだけど、轟竜に襲われた人達は新しくこの村に住む

予定になっていた家族連れだ．．出来れば救って上げて欲しい．．

「ええ、やれるだけの事はしてみます。」

その言葉を最後に何時になく真剣な表情で酒場を後にするチスの背中を彼がみえなくなるまで見つめた村長は一人呟く。

「頼んだよ．．チス君．．」

《チス宅 武器弾薬庫》

酒場を後にしたチスは速やかに帰宅し武器庫に突貫する。

「ホットドリンクに砥石、回復薬グレートに秘薬と閃光玉．．あとは――」

火急の事態という事もあって雪山への必需品を高速で準備するチスは最後に黒刀（終の型）を見やる．．と、

【この太刀はずっと貴方様に見つけて貰う事を夢見待ち続けていたのです．．】一瞬、黒刀と自分が初めて出会った時に白々善房から贈られた言葉が頭の中でフラッシュバックし思わず黒刀に魅入られそつになるチスは慌てて考えを振り払い黒刀を手に持つ。

「ずっと待っていたか．．」

一人呟いたチスは柄に手を掛けその曇り無き刀身を覗き込む。

「今回の依頼でお前の力に頼る様な場面がきつとある気がするんだ．

．だから、そんな時は頼んだぜ相棒。」

言葉を零し黒刀を一撫でした彼はそのまま背中に太刀を背負い急ぎ足に自宅を後にしたのだった．．

《同日午後の雪山》

「う~~~~っ！くそ寒い~~~~っ！」

カコ村を出てから一日半、本来なら竜車でも2日は掛かる旅路を最高に急いで雪山へと到着したスウとリーネの二人は早速村人が襲わ

れたと思われる山頂付近に足を進め様とするもそのあまりの寒さに思わず身を縮めてしまう。

「取りあえず危険のない今のうちにホットドリンクを飲んで先を急ごうスウ・・・」

言葉と同時に差し出されるホットドリンクに一瞬嫌そうな表情を浮かべるスウだが直ぐにそんな事は言つてられないと思い直し受け取った彼女は蓋を外して一気に飲み干す。「ぶはっ、不味い・・・さっ！いくよリーネ！」

「ちよっ！？チョット待て！自分はホットドリンクをそんなに早くは飲めないんだ！」いやはや何をするにしても慌ただしい二人である・・・

《しばらくして――》

とりあえずホットドリンクを飲み終えた二人は山頂部分繋がる道を目指し駆け足でエリア移動を繰り返していく・・・と、

「待て！ブランゴが居る！」

リーネの言葉に視線を先に向けると確かにいる・・・雪の様に白い毛を全身に纏ったコンガに似た牙獣種が三匹程――

「どうする？スウ・・・」

問い掛けるリーネの言葉を聞いたスウの反応は早かった。

「猿に時間を掛けている暇はない・・・速攻で潰す！いくよ！リーネ！」

「応！」

言葉と同時に駆け出した二人はスウを先陣に未だに此方には気付きもしていないブランゴに奇襲を仕掛ける！

「はあっ！」

「ゴアッ！？」

全く無防備な状態のブランゴにスウが放った斬破刀での一撃はその腹を打ち抜きおびただしい量の血を噴水の様に吹き上げさせ付加属性によってその身に稲妻を走らせる！

「ぐううっ・・・」

「あんたの負けよ！そのまま・・・沈みなさいっ！！！」

斬破刀の一撃よってほんの少しだけ出来た隙を見逃さず振られた二刀目は強靱なブランゴの首を物ともせず叩き落とし焼き払う！

「ゴアッ！ゴアッ！！」仲間の一人を無慈悲に失った事でようやく自分達が外敵から奇襲を受けていると理解した他のブランゴは何とか一旦間合いを離そうと跳躍するも・・・

「残念・・・後ろに下がった時点で貴様の負けだ・・・散れ！」

後ろで待ち構えていたリーネに背後から突きを放たれその腹にどでかい風穴を開けられ悶絶する・・・と、瞬く間に二人の仲間を殺され怒り狂った最後のブランゴがリーネに向かって鋭く尖った氷の塊をサイドスローで投げつけて来る！が、

「甘い・・・」

「ゴアッ！？」

僅かな敵の反撃を鼻で笑うリーネは未だに自身の槍で突き刺しているブランゴを盾代わりに投げつけられた氷の塊を防ぐと、用は済んだとばかりにガンランスを抜き取り今度は自分が反撃に出る！

「悪いが貴様に時間を割いている暇は無い！そのまま死ぬ！はああああーっ！」

気合い一閃で放たれる刺突はブランゴの片目を抉りそれだけでは終わらずに砲撃をぶちかまして吹っ飛ばす！

「グウウ・・・」

情け無用なリーネの攻撃を受け雪の上を転がされたブランゴは軽く呻き声を上げた後にそのまま動かなくなる・・・

「っ、強い・・・」改めてスウは思う・・・リーネは強い。

今まで彼女と共に行った戦闘ではチスやスウの身体能力をフルに活かした派手な動きの影に隠れて目立たない立ち位置で孤軍奮闘していたリーネだったが先日のフルフル戦から立ち回りがガラリと変わり現在ではまさしく中衛としての理想の動きを体現している・・・スウがその才を嫉妬してしまう程に、

「さて、猿も片付いた事だし急ごう——スウ？」

ブラングの血がベッタリと付着したガンランスを専用の手拭いで軽く拭いスウを促すリーネは自身の言葉に反応を示さないスウを不審に思い振り向く・・

「スウ？どうした？」

「えっ！？・・うつん！何でもない！行こうリーネ！」

「あ、ああ・・・」何時もと違うスウの挙動に小首を傾げるリーネは疑問を持ちつつも先を急ぐ彼女に対して追い足を急がせた・・

《雪山山頂エリア》

「う、嘘・・」

「酷いな・・これは・・」

足早に目指して来た自分達の眼前に広がる光景に2人は言葉を失う・・無理もないまだ17才のリーネとスウにとってその山頂での光景は余りに残酷な現実だった。

救出対象が搭乗していた筈の竜車は無惨にも全壊し、竜車を引いていたポポは轟竜に食い殺されたのか真っ白な雪のキャンパスの一角を赤く染め上げ、現在はその残りカスをギアノス達がむしゃぶりついている・・

「そんな・・」余りに残酷な結果に膝を崩しかけるスウを咄嗟に支えたリーネは・・

「しっかりしろスウ！まだ全部が全部駄目だったと決まった訳じゃない！へこむのはしょうがないと思うが、それは全てを調べ終えた後にするべきだ！」

「・・・うつん、そうだよね・・ごめんねリーネ・・」

一瞬崩れかけた心をリーネの叱責により何とか踏ん張り踏み留まったスウは視線を真っ直ぐに全壊している竜車に向け足を進める。

「ギアア！ギアア！」

「邪魔よ！さつさと散りなさい！」

群がるギアノス共を排除した後に竜車を調べていき・・そして――

「・・・・・・」

「スウ・・・・・・」

言葉を失うスウにどんな言葉をかけてあげればいいのか悩むリーネ・それ程までに竜車の中は悲惨だった・・外見以上に・・

「リーネ、私・・また助けられなかった・・」

救出しようとした村人を救う事が出来なかった絶望からか雪の上に膝を付きボツリと言葉を零すスウ・・そんな彼女をリーネは後ろから優しく抱きしめ、言葉を選ぶ様に口を開いた。

「スウ・・今の自分では幼くて君を上手く励ます事は出来ない・・でも、聞いて欲しい。どんなに凄腕のハンターでも救える時もある・・当然救えない時もあると自分は思う・・スウがどんな辛い思いをしてハンターを目指しチスを頼って弟子入りしたのかは分からないが、私としては君に今眼前にある現実も真摯に受け止めてそれでも理想を追いかけ続けて欲しい。」

「リーネ・・・・・・」

人によつては解りづらい言葉なだけかもしれない、でも・・それでもそれが目の前に居る銀髪の友の不器用な励みはスウにしっかりと届いた・・と同時に・・

「寒・・よう・・ぱ・・ま・・ど・・」

何処から途もなく泣き声まじりの子供の声が耳に届く・・

「スウ！？子供の声だ！？きつと襲われた村人の子だ！急ぐぞ！」

いち早く反応しスウの手を引っ張り駆け出すリーネは子供の声が聞こえた場所を見つけ様と風潰しに山頂エリアを探索していき・・そして、

「パパ・・ママ・・寒いよ・・助けてよ・・」

エリアの隅によく見なければ気付かない程の小さな空洞にその身を丸めてうずくまる少女を発見する・・

「見つけた！スウ！子供を見つけたぞ！早く来い！」

別々で探索を進めていたスウもリーネの声を聞いて直ぐ様彼女の下

「スウ、さつき自分が君にかけた言葉で救える時と救えない瞬間があると話したのを覚えているな？」

「うん．．」

「まさしく今の一瞬が救える時だ君は沢山の人を救いたくてハンタ―になっただんだろ？ならスウにはその子を救う責任がある筈だ。」

「でも！」「行くんだ！スウ！その子にもしもの事があつたらどうするんだ！」

「———わかった。リーネが時間を稼いでいる間に私はこの子をベ―スまで連れて行く。でも！でも絶対何とか怪我無く持ちこたえて！これは親友としての頼みだよ——リーネ。」

「ああ、任せろ！」

頷くリーネを見たスウは視線を少女に向け無言でその子を抱き上げる．．すると、

「お姉ちゃん．．」

少女が心配そうな顔でリーネを見つめている．．

「大丈夫！お姉ちゃんは強いんだからそんな顔をする必要なんて何も無いんだぞ！なっ？」

「う、うん．．」

不安がる少女を安心させる様に話すリーネは同時にスウに先を急がす事を視線で促せる．．

「さっ！行くよミアちゃん！飛ばすからしっかりとスウお姉さんに捕まって！」

「う、うん！」

少女の了承の意を聞いたスウは最後に一瞬だけリーネに視線を向けた後に文字通り走り去る様にエリアを離脱して行く．．

「スウ．．君に会い、友となり、少しの間だったけど同じ時を過ごせて本当に良かった．．」一人山頂エリア残ったリーネはその言葉を最後に腹をくくり視線をティガレックスに向けると相手もようやく此方に気付いたのか殺気をプンプンと撒き散らしながらリーネを睨み付け両方の前脚を地に這わせ威嚇の雄叫びをぶちかまして来る！

「■■■■■■――！！！！！」

「数多の英雄を輩出して来た名門アンスリウム家最後の末裔・・リ
ーネ・アンスリウム・・参るぞ！」

轟竜の威嚇をさらりと流し一つ構え言葉と落とすリーネは自身の背
中に背負いし物言わぬ戦友を抜き放ち決死の覚悟で轟竜ティガレッ
クスに挑んで行くのだった・・

第20話 激闘と無惨 修正（前書き）

作者の妄想で今回の話に幾つかのオリジナル要素が出てきます・・
悪しからず。

あと、結構残酷なシーンもありますので悪しからず・・

第20話 激闘と無惨 修正

《雪山山頂エリア》

「リーネ・アンスリウム・・・参る!!」

言葉と同時にガンランスを抜き放つリーネに対して体を低く屈めたティガレックスは一気に跳躍しその鋭く尖った爪を突き刺ささんと襲い掛かる!

「■■■■——!!!!」

「ぐうつ!!重いっ!」

ティガレックスの放つ一撃を何とか自身の盾で防ぐリーネ・・・だがその速く重い一撃は全ての武器の中で最も高い防御力を保持するランス系の盾をもってしても衝撃を逃がし切る事が出来ず2メートル程後ろに後退させられてしまう!

「クソッ!だが!」

何とか踏ん張り切つて開いた間合いをカバーする様に砲撃を打ち込むリーネ・・・だが、

轟竜の強靱な肉体に阻まれその効果は薄く——

「■■■■・・・■■■■——!!!!」

体を軽く丸めて駒の様に回転させ尻尾を打ちつけてくるティガレッ

クスの攻撃を打ち込まれて吹っ飛ばされてしまっ！

「くあっ！？」

岩壁に体を強打しながらも何とか停止するリーネは苦痛な表情を浮かべつつ視線をティガレックスに向ける——と、

「■■■■■■——————！！！！」

何と敵は既に体制を整え、此方に向かって猛スピードで突っ込んで来ている！

「それは反則だろ！？」——くおおーっ！！！」

轟竜の俊敏な動きに悪態をつきながらもガンランスを自身が回避するであろう場所に投げ出し寸での所で緊急回避するリーネと、彼女が先程までいた場所に突っ込んでいくティガレックス——

《ズドオオオ——————ン！！！！》

辺り一面に轟音が響き渡り砂塵が舞い上がる中で何とか回避に成功し武器を拾い上げたりーネは急ぎティガレックスに視線を向ける——
すると、

「■■■■！！？ ■■■■■——！！！！」

何と敵さんは岩壁に齒がめり込んで抜けないのか必死にそれを抜こうともがいている！？

「——よく解らんがチャンスのような……今なら何の遠慮なし

に攻撃できる！いくぞ！」

とりあえず深くは考えずに、今この瞬間を好機と捉えたりーネはなだれ込む様にして一気に距離を縮め――

「狙うは一点！悪いがその片目――貰ったああー！っ！」

迷い無く一直線に打ち抜く様に放たれる一撃は、彼女の宣言通り吸い込まれるが如くしてティガレックスの左目に突き刺さる！

「■■■■！？■■■■！――！！！」

自身の左目を突然に失った轟竜はその激痛に苦悶の声を上げるも、すぐさま片目を奪いしりーネに殺気を向けながらいち早く岩壁から牙を抜こうともがく――が、

「まだまだ・・・攻撃は始まったばかりだ！そのまま動くなよ！そらそらそらそら――そらあっ！」

砲撃を交えた連撃に為すすべ無く受け身になるティガレックスに、りーネは竜撃砲を発動させ――

「零距离貫つた！――竜撃砲！発射！！！」

「■■■■！――！！？」

竜撃砲をともに食らう羽目になり悲鳴を上げる轟竜だが・・・・・・のけぞった拍子に岩壁に突き刺さっていた牙が抜け――

「■■■■――！！！！」

今までの溜まりに溜まった鬱憤が爆発したのかバックステップと同時に顔面と前脚に赤細い模様を走らせた《絶対強者》は、その日一番の雄叫びをぶちかます！

「怒り状態か・・・」

偶然にもバインドボイスの影響を受けない場所に居たりーネは分かりやすく怒り状態に突入したティガレックスに視線を向け、今の自分ではこの状態になったティガレックスにはどうあがこうが適わない事を悟り――

「フフツ・・・今更ビビってもどうしようもないが、精々悪あがきだけはさして貰おう！いくぞ！」

今まさに此方を睨みつけながら何かしろの攻撃をぶちかまそうと身構えるティガレックスを見るリーネは悲壮な決意の中、ガンランスを持つ手に力を込めるのだった・・・

《雪山拠点》

リーネに轟竜をまかせて少女を安全な場所に連れ出す為に一時的に離脱していたスウは途中、ギアノスなどに襲撃を受けるも何とかコレをやり過ごし・・・無事、少女と拠点へと到着する。

「此処まで来たら、もう安全・・・と、」

言葉と共に抱き上げていた少女を下ろすスウは休む間もなく視線を山頂に向け眉間に皺を寄せ――

「リーネ・・・」

自分達の為に1人残り、今まさに苦戦を強いられている筈の戦友を思い鋭い視線を山頂に向けるスウに・・・

「もう此処は安全な場所なの？スウお姉ちゃん？」

「えっ？あゝ、うん一応ね・・・」

「じゃあ、ミアは大丈夫だからスウお姉ちゃんはリーネのお姉ちゃんを助けにいつてあげて・・・」

「でも・・・」

「お姉ちゃん、さつきからずっと、リーネのお姉ちゃんを助けに行きたそうな顔してるよ・・・」

「うつ・・・それは・・・」

「ミア知ってるよ！パパが昔、ハンターは戦友のためならどんな場面でも駆けつける大馬鹿者って言ってたから！だから！」

まだ年端もいかぬ少女の訴えを聞いたスウはその言葉に胸を打たれ、そして・・・腹を括る。

「ミアちゃん―― わかった！お姉ちゃん、リーネの馬鹿を助けに行く！」

「うん！」

彼女の言葉に嬉しそうな反応を示すミアにスウは今すぐにでも飛び出して行きたい衝動を抑えて、論ずる様に口を開く・

「ミアちゃん、リーネを助けに行く前に2つだけお姉ちゃんの頼みを聞いてくれるかな？」

「2つ？」

「うん、一つ目は何があっても絶対に此处から外には出ない事、二つ目はチス・リエーテって名前の目つきの悪いおじさんがきたら私とリーネは山頂付近に居るって事、お願い出来るかな？」

スウの言葉を真剣に聞くミアは子供ながら自分が何をしなければいけないのかを販推し、そして・・・

「うん！任せて！」

元気一杯に返事するミアにスウは少しだけ安心したのか、1人頷き少女の頭を一撫ですると、

「じゃあ、お姉ちゃん行ってくるね！頼んだよミアちゃん！」

「うん！お姉ちゃん、頑張つて！」

背中側から感じた声援に後押しされながらスウは急ぎ足に拠点を後にするのだった・

《しばらくしての雪山山頂・・・》

「■■■■■■・・・」

「はあ、はあ・・・」

ティガレックスが怒り状態に突入して一方的な防戦を強いられて早15分・・・

敵の容赦ない連撃に晒されたリーネは自身の自慢でもあるレイアシリースの防具をボロボロしながらも何とかこれを耐え、今もこれから何らかの攻撃を仕掛けようとする敵に鋭い視線を向けている・・・と、

「■■■■■■――！！！」

不意に小さく四肢に溜めを作った轟竜はそのまま右前脚で雪が積もる地を巻き込みながら全力で振り抜くと、人間大の三つの雪の塊がリーネに向かって襲い掛かって来る！

「ちいっ！」

今回の一戦で初めて見る敵の攻撃に舌打ちをかましながらも、自身の山勘で何とかこれを回避するリーネにティガレックスは休む間もなく更なる追撃を仕掛ける！

「■■■■■■――！！！！！！！」

猛ダッシュで突っ込んで来るティガレックスにリーネは・・・

「舐めるな！怒り状態でもない貴様の一撃ぐらい私の盾で防いでみせる！」

啖呵と同時に盾を敷くリーネは迫り来るティガレックスを見据え衝撃に備える！

「■■■■■■——！！！！！」

「グウッ！」

盾を持つ腕が痺れる程に強烈な衝撃に晒されるも何とかティガレックスの一撃をいなしかわしたリーネ——だが、敵の攻撃は単純に一撃だけでは終わらず・

「■■■ツ■■■ツ！・■■■■■■——！！！」

何と、さっき自分を通過して行つた筈のティガレックスが方向転換して、再びリーネ目指し突っ込んで来る！？

「なあっ！？ぐおっ！！！」

予想外の敵の攻撃にギリギリのタイミングで盾を敷くリーネだが、如何せん反応が遅れた為に敵の勢いをいなし切れず吹っ飛ばされてしまう・

「くうつつっ！」

尻餅をつき、痛む体に鞭を打ちながら視線をティガレックスに向けると——敵さんは自分にトドメを刺さん！と、二度目の方向転換をしてリーネに襲い掛かる！

（ヤバい！？）

突っ込んで来る筈のティガレックスの衝撃に思わず歯を食いしばる
リーネ——だが、

「目を閉じて！！リー————ネ！！」

「スウ！？」

自身の耳に届いた相棒の声に反応し反射的に目を閉じた瞬間、強烈な光が目蓋越しに展開し・・・そして、

「■ ■！？ ■ ■————！！！」

突然に襲い掛かった光の凶器に目を潰されたティガレックスは攻撃を強制的に中断させられもがき苦しむ！

「リーネ！無事！？」

「スウ！？どうして戻って来た！？それにあの子は！？」「ミアちゃんは大丈夫！無事に拠点まで連れて行ったから！戻って来たのはリーネが大切な友達だから！以上！文句ある？」

不器用に笑い問い掛けるスウにリーネは・・・

「文句ある！ありありだ！この大馬鹿者！——でも・・・感謝はしてやる。」

此方を此方で不器用な言葉を返すと、照れくさいのか閃光玉によつ

て視界を潰されたティガレックスに視線を向け・

「スウ！敵さんと真つ向からぶつかっても勝ち目は薄い！閃光玉の効き目が切れる前に自分がシビレ罠を！スウは敵の誘導を！」

「うん！了解！」

リーネの指示と共に駆け出すスウは一気に距離を潰して自分達とは見当違いな方向に攻撃を繰り返すティガレックスの前面に回り込み、群青色の柄に手をかける！

「キツいの行きます！はぁー！ー！ーっ！！ぜい！！！」

縦からの抜刀切りから瞬時に体を廻し二撃目へと繋ぐスウの連撃をまともに顔面に受けたティガレックスは悲鳴をあげながら一步後退を余儀なくされる・・・

「■■■■・・・」

自身の急所の一つでもある頭を揺すられたティガレックスは軽くかぶりを振ると同時に閃光玉の効き目も切れたのか、ハッキリとスウを見定め明確な殺意を含みながら睨み付ける。

「さあ、あんたの相手はあたしよ！遊んでやるからかかって来なさい！」

言葉と共に斬破刀を背中に戻したスウはティガレックスの意識が自分に向けられるように仕向けると――いきなり全力でシビレ罠目指し走りだす！

「……■■■■——————！！！！」

いきなり背を向け走り出す敵を見たティガレックスはコンマ数秒程反応が遅れるもすぐに強者が弱者をいたぶるがよろしく危険な笑みを浮かべ、スウに猛追を仕掛ける！

「スウ！こつちだ！」

シビレ罨を仕掛け終え、更には罨の両サイドにいつの間にか大樽爆弾を仕掛けたリーネはスウに向かって声を大にして張り上げる！
(ポーチは四次元ポケット、鉾石、爆弾、罨、何でもござれ！)

「リーネ！フルフルの時みたいにあたしを打ち上げて！」

「なっ！？随分といきなりだな！タイミングは！？」

「あたしに合わせて！」

「了解！」

真後ろから猛追を仕掛けて来るティガレックスに未だギリギリ余裕を崩さずにリーネに提案するスウは更に走るスピードを上げ――

「いくよ！リーネ！1、2の――」

「さあああっん！！！！」

掛け声と同時にシビレ罨を軽やかに飛び越え、リーネの手によって一気に後方へと跳躍するスウ――と、背後から猛追を仕掛けているティガレックスは当然……

「■■!?!■■■■・・・・!!!!」

まんまとシビレ罠に引っかかり攻撃を強制的にストップさせられる。

「スウ! 敵さんに罠が有効なのは持つて8秒! 出来るだけ削るぞ!」

「はっ・・・と、了解!」

跳躍によってティガレックスの背面に着地したスウは、同時にリーネの声に反応し――

「その尻尾・・・私が叩き落とす! はああー! ! ! ! !」

啖呵と共に轟竜の強固な尻尾に連撃を叩き込み稲妻を走らせる!

「今日のスウは絶好調だな・・・自分も負けてられないか・・・」

傍目でスウの動きに感心しつつ、ティガレックスがシビレ罠にかかってからの秒数を数えるリーネは背中に背負いしガンランスを抜き放ち、そのまま竜撃砲の発射体制に入り・・・

「此処が勝負所! そのまま動くなよ!・・・竜撃砲――発射! !」

赤細い火柱をあげるガンランスが主の言葉に呼应し発射された竜撃砲は轟竜に直撃し、飛び火して大樽爆弾を誘爆させ、あたり一面を黒煙で包み込む!

「げほ、げほ・・・リーネ、上手くいったあ?」

所で回避し、なんとそのまま軽く跳躍し轟竜の背中に飛び乗ってしまう！？

「スウ！？何を！？」

これにはフォローに動いていたリーネも驚き、我が目をうたがうも——スウはお構いなしにスルスルと轟竜の体を移動し、ある一点に狙いを定めると、一気に跳躍しながら斬破刀を引き抜く！

「これが私の剣の道！今度の一撃は相当キツイわよ！」

言葉と同時に剣先を小刻みに震わせたスウの斬破刀はみると雷を帯電していき・

「合い！一閃！——属性、大回転斬りいい————っ！！！！！！」

裂帛の気合いで風払いが如く払われた稲妻は寸分の違いなくただ真っ直ぐに轟竜の尻尾へと吸い込まれていき・そして、

「■■■■■■————！！！！！！？」

わずか、たった一撃で轟竜の強靱な尻尾を叩き落とす！

「■■■■■■……………」

「なっ！？」

自分が見たこともない攻撃方法で轟竜の尻尾を叩ききったスウをリーネは思わず絶句した。

無理もない・・・つい先日フルフルを大苦戦の末に何とか倒せた自分よりハンターランクの低い彼女がリオレウスやリオレイアに匹敵するとも謳われるティガレックスの尻尾を自身の目の前で意図もたやすく叩き斬ったのだ。例えば、元々からスウにはとんでもない才能がある・・・と、読んでいたリーネでも流石に度肝を抜かれるのはいたしがたない。

「リーネ！？私の必殺技、ちゃんと見てくれた！？」

「・・・」

「リーネ？」

「・・・はっ！？スウ！今のは何だ？どうやってやったんだ？」

突然、自分のやった攻撃方法に食いついてくる親友にスウは小首を傾げながら口を開く・・・

「どうやって、って言ったら属性を持つ武器は単純に振るだけで雷とか出てくるでしょ？だから小刻みに刃を動かしたらもしかして今みたいな感じになるかな・・・って、思ってた試したら・・・」

「さっきみたいな攻撃になったと？」

「うん・・・っていうかリーネ！今はそれより轟竜！」

第三者から見たらやつと思いついたのか！と、ツツコミたくなるくらいだが・・・自分達が飛竜と対峙している事を思い出したスウとリーネの2人は慌ててティガレックスに視線を向けると――
敵さんは尻尾を切られた衝撃でぶっ飛ばされたのか少しだけ、しか

し、それ程離れていない場所で何とか体勢を整える姿を視界に捉える。

「スウ！さっきのは何回も出来るものなのか？」

「うーん、多分後二回が限界・・・それ以上したら斬破刀が折れる・・・」

「充分だ・・・勝てるぞ！スウ！」

「うん！頑張る！」

リーネはこの時自分が判断ミスをした事に気づいていない・・・
どんなに強力な攻撃手段を持っていたとしても敵は現時点では自分達より格上の存在・・・必然的にこり押しすればどういう事になるのか、この時の彼女は興奮の為か気付けなかった。

「■■■■！！！」

上体を起こし改めて自身に迫る敵を威嚇するティガレックスにスウは気圧される事なく近づき攻撃を繰り出す！

「はぁー！ー！っ！ぜいつ！！！」

一撃、二撃と繰り出す剣戟に自身が苦手とする雷属性を顔面を打ち込まれたティガレックスは軽く苦しみながらも少しずつ苛立ちだし

「はっ！やぁぁぁー！ー！ー！ー！！！」

肋を狙ったリーネの渾身の一撃に遂にブチギレ——絶対強者は己

の身を赤く染め上げ真後ろに跳躍した・

「バインドボイスが来るぞ！気をつけるスウ！」

「うん！」

「■■■■■■——！！！！！」

リーネの言葉と同時にティガレックスは強靱な両前脚を地面に突き立て怒号を放つと、すぐさま殺意満々な視線をスウに向け猛ダッシュを繰り出す！

「早っ！？」

怒り状態中とそうでない状態のスピード差に驚くスウは突っ込んで来るティガレックスを何とかギリギリ回避に成功するが・・・

「■■■■■■・・・■■■■■■——！！！！！」

当然、先程の様に敵は回避したスウを通過した瞬間にばたばたと体の進行方向を変えて彼女に襲いかかる！

「ちよっ！？チョツとタンマ！？」

スウの声も虚しく先程の仕返しとばかりに目を血走らせた大きく跳躍し、鋭く尖った爪を突き刺さん！と、腕を振り抜く！

「■■■■■■——！！！！！」

「つつつつ！」

「スウ！危ない！」

《ガッツッ！！！》

雄叫びを上げ放たれるティガレックスの一撃に直撃は避けられないと悟ったスウは無意識に目を固く瞑ってしまい——リーネはそんなスウを救おうと自身の身を両者の間に割り込ませ盾を敷き、攻撃を防いでみせる！

「がつ！？痛・・・っ！」

今回の轟竜との戦いで幾度となく衝撃に耐え激しく消耗してしまったりーネは痺れる腕を思わずかばってしまい——そして見てしまう。

その一瞬の隙をずっと待っていたかのように加虐的に細められた轟竜の目を・・・

「■■■■■■——————！！！！！！」

「やばっ！・・・ぐおおおっ！？」

一瞬、彼女自身も何が起こったのか解らなかった・・・ただ、ティガレックスが目細めた瞬間に危機を察知して反射的に盾を敷くが、直後にとんでもない衝撃で敷いた盾をぶっ飛ばされてしまう。

客観的に見れば、敵は腕を振り抜くと同時にその反動を利用して間髪入れずに二撃目で尻尾をリーネに叩きつけて彼女の盾を弾き飛ばし——そして今はがら空きとなった左腕目掛けて・・・

「■■■■ツッッ！」

地獄の底から響く様な低い声と共に山頂は閃光玉を使った時の様な赤色の強烈な光に包まれ・・・そして、

[illegible]

「何！？何が起きてるの！？」

悲鳴と思われる轟竜の声が聞こえ……しばらくすると光が収まりスウの疑問は解けた。

「師匠？・・噓・・」

収まった光の先に師と八つ裂きされた轟竜がいた・
スウはこの時初めて知る事になる。自分の師が何故《赤い影》とい
う異名で呼ばれているのかを・・・・

「あれが……《赤い影》の……本当の意味……」

血よりも深い赤色の何かに包まれた黒刀を手に持つ悪鬼の様な師を見たスウの言葉は小さく辺りに響いたのだった……

第21話 リーネ・アンスリウムの近況

「■■■■■■——————！！！！」

まどろみの中から聞こえる轟竜の雄叫び・・・

「ごめんなさい、リーネ・・・ごめんなさい、師匠・・・」

自分達から離れてしまった得難き友の言葉・・・

「嫌ああああ——————っ！！！！！！」

この日の自分の朝は最悪の目覚めから始まった。

「夢・・・か・・・」

目が覚めた瞬間に最近は見ることのなかった悪夢にうなされていたのだと理解した私は、とりあえず自身のベッドの横にあるテーブルに手を伸ばしある物を掴み取る・・・

カチャカチャ——————カチッ

「随分と慣れたものだな————この《義手》にも・・・」

まあ、片腕を失ってから三年もたてば慣れるのは当たり前か・・・そんなたわいのない事を考えながら私は寝間着からハンター御用達のインナーに着替え、自室からみんなの居るであろうリビングへと足を進めて行った。

「おっ？リーネ、おはよう・・・丁度、今から起こしに行こうと思っ
てたんだが、その必要はなかったな。」

「おはようございます。《御師》・・・」

リビングに入った私に声を掛けてきた目つきの悪い男は、チス・リ
エーテ・・・

大陸に10人と居ないG級ハンターの一人で、不屈世の天才と謳わ
れるソシエッテ・エーテルハイムと肩を並べる程のシュレイド王国
屈指の太刀使いだ。

三年前の事故後から片腕を失った私は再起を図る為、正式に彼に弟
子入りを申し出て、その時から呼び方も変えた。

だって、正式に師弟の契りを交わしたのだから何時までも呼び捨て
では彼に失礼だと思ったから——まあ、彼の場合はそんな事
を気にする玉じゃ無いとは思うのだが、一応礼儀は礼儀、ケジメは
ケジメだ・・・文句あるか？

「ミアはまだ起きて来てないのですか？」

「ああ、まだ寝てるみたいだ。あいつも来年には養成学校に通う事
になるんだから俺としてはもう少し朝に強くなって自分から鍛錬に
励む様になって欲しいんだけどな。」

もう此処にはいないかつての誰かの姿を思い出す様に懐かしみ、遠
い目をした師に私は口を挟まず彼を見つめる。

三年前の事故後、スウは——スウはただ謝罪の言葉が綴られた一枚
の紙切れを残して居なくなってしまった・・・

私は彼女を助けたいが為に轟竜に挑み左腕を失い、大小様々の裂傷

を体に受けた事に対して何の後悔も無い。

もしも、時間が戻って同じ場面に出くわしても私はきっと同じ行動をするだろう。

と、そんな事を思っていると階上からバタバタと五月蠅い足音が聞こえて来た——どうやら我が家の将軍様がお起きになったご様子だ・・

「おじさん！お姉ちゃん！おはよう！」

《おはよう、ミア》

朝からやたらテンションが高いミアに挨拶を返す自分と御師・

我が家のマスコット兼将軍様・・ミア・キュゼツク。

三年前に私達の住むカコ村に移住するさいに轟竜の襲撃に会い両親を失った少女・・

今でこそ元氣印を絵に描いたミアだが、愛する両親を一度に失い一時は自分の殻に塞ぎ込んでしまった時期もあるが——

まあ、色々あって現在は御師の下でハンターを目指して来年度から養成学校に通う事になっている。

「おし！全員集まったことだし、メシにするか。お前ら皿を並べろ。」

《はい》

御師の言葉の下に私とミアは小皿等々を並べ、御師が料理を運んで来た所で全員着席・・

《いただきます!》

合唱を合図にどっかの誰かさんみたいにかっこみだすミアを尻目に、
ゆつくりと食事を楽しむ私と御師――

ああ、お粥が美味しい。

「そういえば、御師の今日の予定は決まっていたりするのですか?」

「うーん、とりあえず現状では急を要する依頼も無え事だし、空いてるっちゃあ空いてるが・・・どうしてだ?」

「いえ、でしたら昼にでも指導をつけて頂きたいと思っていたので・・・」

「指導?何時もの稽古じゃなくてか?うーん、俺がお前に教えられる事はもうあんまり無いと思うんだが・・・」

頭に?マークを浮かべる御師に私は言ったださ・・・上目遣いで、

「基礎はある程度完成したと思うんですが、まだ不安の方が強くて――だからお願いします!御師!」

酒場の女将に曰わく、

「男なんてみんなバカだから、リーネちゃんみたいな美人さんに上目遣いをお願いしたらイチコロだよ!」

と、いう言葉を参考にしてやってみたのだが、御師相手に通じるだろうか?

「ま、まあ、お前がそう言うのなら修練に付き合っても構わないが・・・」

やった！通じた！女将ありがとう！

「では、お願いします！」

「わかった、わかった——ミア、お前もメシ食って小休止したら走り込みな。」

「う、はい・・・」

しかし、ミア・・・お前嫌そうな顔し過ぎだ。

《しばらくして》

朝食を食べ終わった私達は適当に時間を潰して小休止した後、村の外にでた。

「よし、ミアはとりあえず村の外壁、30周を2セットな。」

「は、はい！」

一瞬、めちやくちや嫌そうな顔になりそうになるも、御師の顔を見た瞬間にそれを引っ込めたミア——
御師、流石にその目はダメだ。ただでさえ悪人顔なのに・・・

「ミア、ハンターを本気で目指すなら基本体力は必要不可欠だ。」

「は、はい・・・」

「俺が何を言いたいかわかるな？」

「はい・・・」

「じゃあ、張り切ってスタート！」

「おーっ！」

かけ声から駆け出すミアを見送る御師は、ミアの姿が見えなくなる
と振り返り口を開いた。

「よし、じゃありーネはとりあえず俺の前でそいつを自分の思う通
りに振って見せてくれ。」

「はい！」

返答と一緒に私は自分の背中に背負った武器の柄に手を掛け、一気
にそれを真下に振り下す。

「ふっ！————やああ————っ！」

超重量の重みを抜刀の勢いのままに叩きつけられた《大剣》は地面
を陥没させ、息着く間もなく私は全身を真横にひねり風払いを敢行
し・・・

「どっ！ぜいつっ！！」

仕上げとばかりに逆方向に放り投げる様にして大剣を切り上げる。

「どうですか？」

一通り自分の思う通りに練習用の大剣を振るった私は御師に太刀筋の確認をとってみる——と、彼は少し考える素振りを見せて言葉を選びながら口を開いた。

「ええつと・・だな。どの動きも平均的な大剣使いより上手いと思う。ハンデを乗り越えて、よく頑張ったな・・リーネ。」

「あつ、ありがとうございます！」

ずっと以前にスウを誉める時のように頭に手を乗せて自分に語りかける御師。

その目は悪人面のくせに何故だか優しく見えて、誉められた私は嬉しくて舞い上がってしまいそうになる。

「まあ、後、欲を言うなら横の動きの精度を上げる事を薦めるが・・それは、追々つて事で頑張れ。」

「は、はい！御師！」

新しい課題を貰った事で俄然、やる気を上げる私を見た御師は軽く微笑み・・練習用の盾を持ち上げて声をかけて来た。

「リーネ・・気分が良いついでに今日は本気で稽古相手になってやる。」

「本当ですか！？」

「ああ、全力でお前が思う通りの一撃を打ち込んでこい。」

「はい！では——尋常に勝負です！」

「応！！きやがれ！！」

「行きます！はああああっ！！！！」

《夕食後のリーネ・アンスリウム》

「・・・で、結局おじさんには一撃も届かなかった、と・・・」

「しょうがないだろ！相手はあのチス・リエーテだぞ！善戦しただけでもマシだ！」

結局、先程の稽古で御師に課せられた修練を終ったミアをほっぽって殆ど一日中打ち込み続けた私と御師は夕暮れとミアの冷たい視線に気づき、慌てて稽古を中断して夕食と將軍様のご機嫌取りに奔走したのが、つい先程・・・

そして、現在はご機嫌取りのついでにミアと一緒に入浴中・・・読者サービスが出来ないのが残念だ。

「ねえ、お姉ちゃん。」

「うん？何だ？背中に届かない場所でもあるのか？」

何気なしに話かけるミアに自分が思い当たる返答を返した私——
がどうやら不正解のようだ・・・ミアの顔はぶーたれている。

「もう！そんなんじゃない——お姉ちゃんは何で大剣使いになったのかなって、聞いてみたくて・・・」

「大剣使いになった理由か・・・」

「聞いて欲しく無かった質問だった？」

むう、少し思案する顔になってしまったか、悪いことを聞いてしまった様な顔ではつが悪そうに視線を左腕や体に向ける將軍様に私は

「ふっ、子供の癖に変な気遣いをしなくても構わない、ぞっと！」

一発強力なデコピンをぶちかましてやった。

「いた~~~~っ！！」

おでこを押さえて半分涙目になるミアに反撃されまいと私は即座にシリアスモードに移行して、ポツリと言葉を零した。

「一番大きい理由を挙げれば——やはり、左腕を失った事だな。」

「え？」

「ミアも知っているとは思うが、私は元々ガンランスの使い手だった——が、この義手ではあの大きな盾を持つ事が難しくなってるな。」

「お姉ちゃん・・・」

「ハンターになってずっと、ガンランス以外の武器を操った経験が乏しい私は再起の為にどうすればいいのかを悩んでな。」

「……」

「結局、御師のアドバイスを受けて、三年の修練を末に隻腕でもどうにか大剣を扱える様になった訳だ……」

色々な武器を触って、悩んで、苦しんでた時、大剣を選ぶきっかけになった御師の言葉を今も鮮明に覚えてる。

《誰よりも仲間の事を大切に思い、気遣うお前だからこそ、一番神経を使う遊撃のポジションについて欲しい。》

「お姉ちゃんは……」

「うん？」

「お姉ちゃんは今でも——今でもガンランスが好き？」

「なっ!？」

問いかけに一瞬、言葉が詰まってしまった私にミアは更に問いかけて来る……

「お姉ちゃん、凄く寂しそうな顔してた。上手く言えないけど、それって大好きなガンランスで戦え無いからだよね？」

「それは——ふっ……」

やれやれ、子供は純真だ。

「自分では割り切っているつもりでもミアにはばれてしまったか・・」

「うん、ごめんなさい」

「いいさ、謝る事はない——確かにミアの言う通り私は、ガンランスで一流のハンターになる事を夢見ていたんだから・・」

純真な心にあてられたのか、いつになく自分の奥底にあった本心をポツリと零してしまう私・・

「もちろん、片腕を無くした事に後悔はない——ただ、長いギルドの歴史にガンランスの名手として、己の名を刻み込んでみたかった・・それだけだ。」

「お姉ちゃん。」

「ははっ、柄にもなく熱く語ってしまった様だ。忘れてくれ・・」

いかな、ついついミアの前でこんな事を話すとは、私もまだまだ青い。

「お姉ちゃんの夢は・・」

「うん？」

「お姉ちゃんの夢は——私が！」

不意に何時になく真剣な表情になったミアはとんでもない事を言い出した。

でも、その目と声は純真で、真っ直ぐで、私は鼻で一笑する事が出来なくて、私は――

「ふつ、難しいと思うが・・頑張れ。」

エールなんぞを送ってたりする。

《深夜》

「うん？」

疲れていたのか、風呂上がりから直ぐに就寝した私は、夜中に喉の渴きから目覚め、水分を求めてリビングに向かうと――御師が一人で酒を転がしていた。

「リーネか・・眠れないのか？」

「いえ、少し喉がかわいただけです。御師は？」

「見ての通り、一人酒に洒落込んでいる。」

「そうですか・・」

足下に視線を向けると、何本かの酒の空瓶が御師の座っているソファの下に転がっていた。

「御師、あまり言いたくはありませんが、程々にしないとお身体に

影響がでます。それに、煙草の量も日に日に増えていつている様ですし・・・」

スウが居なくなつてからの夜の御師は毎日こんな感じだ。いや、どんどん酷くなつていつている気がする。

「はいはい、これ飲んだら今日はもう終いにするから・・・」

適当に私をあしらおうとする御師にムカつき、不意打ちで御師の言葉が終わる前に私は聞いてやったさ・・・

「御師—— やっぱり、スウが居ないと寂しいですか？」

三年の歳月の間、ずっと—— ずっと聞けなかつた事を・・・

「・・・いきなりな質問だな。まあ、寂しいか寂しく無いかを聞かれたら、そりゃあ、寂しいし心配だ。あんなのも俺が初めて持った弟子に違いはないんだからな。」

自分で聞いてみて何だが、えらく素直な返答が返ってきたのにびつくりだ。

御師は酔つ払うと素直になるみたいだ。

「スウと俺が初めて会つてから、もう六年—— あの野郎、必死こいて弟子入りを志願してきやがつてな。《師匠みたいな一流のハンターになつて、大切な人を守る様になりたいんです!》とか、ぬかしやがつて・・・」

「・・・」

「俺は一流なんかじゃないからダメだって言っても聞かなくてな。」

「・・・御師は一流のハンターです。」

「はん！この世で一番大事だった三人の戦友も守れなかった奴の何が一流だ！」

追加、御師は酔うと子供みたいになる。

ぎゃあぎゃああと喚く御師に少し呆れ、とりあえず自分の用事を済ませようとグラスに水を注ぐ自分。

「——リーネ、最短で上位の位を目指すぞ。」

「えっ？わ、わわわ！？」

グラスに水が満たされていく中、不意に低い声でとんでもない言葉が耳に届いて、びっくりした私は水を零してしまった。

「御師！今なんと？」

「聞こえなかったか？最短で上位ハンターを目指すって、言ったんだが・・・」

あっけらかんと話しているが、私にはわかる——御師のあの目は本気だ。

「御師、私は三年前から殆ど狩猟経験が無い状態です。それを踏まえて仰っているんですか？」

そう、今までの三年間の殆どは大剣をともに振れる様になる！を

前提にやってきただけで、実質的な狩りは言いにくいが全くしていない。

「お前が不安になるのは解る——が、それは大丈夫だ。」

「はい？」

大変失礼だが一体何を根拠にこの人は言ってるのだろう？
我が御師ながら疑った目で見ていたら、御師にいらまれた。

「お前が不安なのは実戦の感と動きとかだろ？それならお前が思ってる程鈍っちゃいないから、心配するなっ、と言っている。何の為に俺が毎日稽古をつけているとお前は思っている。」

くうっ！今一瞬、御師が頭悪いなコイツって目で見てきた！悔しい！

「稽古って、私が打ち込んだ一撃を御師が弾いたり、ちょっと間合いが離れたら御師がいきなり盾ごと突っ込んできたり、懷から拳くらの石を取り出して本気で投げつけてきたり・・・って、あ！」

「そついう事だ——だから、安心しろ。」

御師はようやく気付いたか、って顔で一人でに笑みを浮かべ、昼間の様に頭の上に手を乗せてぎこちなさそうに撫でつけてくる。

この人にはかなわない——ちゃんと、私の事を考えていてくれた。

再起を目指す私自信が気付かない場所でも、自分を導いていてくれた。

今なら、どうしてスウが御師を心から信頼しているのかが解る。

「ありがとうございます！御師！」

だから精一杯の感謝の気持ちを込めてお礼を言ったら・

「けっ！さつさと寝に上がれ。」

とか、とんでもない言葉が返ってきた。

でも、それが何となく照れ隠しだと解った私は――

「御師！ありがとうございます！」

早口にもう一発お礼の言葉をぶちかますのだった・

第22話 スウ・カプリナとアイビス・クローチェ

「嫌ああーーーーっ！！私の腕が！私の腕が！！」

轟竜との闘いに敗北を喫した私達を師匠が助けてくれて早3日……

あの後直ぐに師匠が救護アイルを呼び出して、色々と手を尽くしたんだけど、リーネの左腕は切断しないといけなくなってしまった。

目が覚めて、自分の左腕が無くなっている事に気づき涙するリーネの声を聞いた私は怖くなって、それで……

「ごめんなさい、リーネ。ごめんなさい、師匠……」

ただ一枚の紙切れを残して私は大好きな故郷とも言える場所から逃げ出した。

《数日後》

パチ…パチ、パチ

「……………」

あれから何日かたった。

カコ村を離れる時に私が持ち出したのは、防具と武器と道具、それに幾ばくかのお金……

生まれてからこの方、孤児院とカコ村しか知らなかった私には当然行く場所も帰る場所も無い。

だから、まずは街に向かう事にした。

目的の街は貿易都市のヒューム……

不屈世の天才、ソシエツテ・エーテルハイムと師匠が養成学校時代を過ごした街。

師匠がハンターとしての基礎と地盤を固めた場所に——私は何故かは解らないけどヒュームに足を運ばなくてはいけない様な気がする。

野営をしながら、漠然と焚き火の炎を眺めそんな事を考えていると

……

……ガサ……ガサガサ

「だ、誰！」

林の中から何かが動く音が聞こえ、私は直ぐさま斬破刀を手に臨戦態勢を取り、声を張り上げる。

ランポス？……いや、林の中での音は一つ、敵が小型の鳥竜種なら単体で行動する事はまず無い。

でも、だったらこの音は？

未だに聞こえてくる音に首を傾げる私は、更に声を大にして少しづつ林に近づいて行く。

「後10秒しても出てこないなら、私からそっちに行って叩き切るわよ！それが嫌ならさっさと出て来なさい！」

斬破刀を抜き放ち、小刻みに剣先を震わして雷を帯電させて行く私に音源は……

「ちよつ！？ちよつと待ってください！私は敵なんかじゃありません！今、そっちに行きますから！」

「人間？しかも女の人？こんな時間に？」

声が聞こえて数秒もしない内に今私の浮かべた疑問は全部解けた。

「まったく……最近の10代は血の気が多すぎです。いきなり叩き斬るとか、ありえません。」

「いやあ、その……」

「初めてのG級依頼からヒュームに帰る途中で野営をしているアナタを見かけて、この密林地帯は最近になってドスランポスの出現が確認されたから危ない、とお伝えしようと来た私にこの仕打ち……あんまりです。」

茂みの中から現れた綺麗な金髪を持つ女性ハンターは、ぶつくさと文句を羅列し続けている——うん？でも、今とんでも無い事を聞いた気がする。

「ちよつ！ちよつと待って下さい！今！何の依頼から帰って来たって！」

「何って、G級の依頼からですけど……」

美しい金髪を靡かせて、私の質問に小首を傾げながら答える女性に私は驚愕を隠せなかった。

正直、びっくりだ。

こんな闘いを好まなさそうな人が、ソシエツテや師匠と同じ上位の壁を越えて大陸に己の名を轟かす10人と居ないG級の位に立つ英雄の一人なんて誰が信じよう……

でも、彼女が身に纏っている防具は図鑑で見た事があるけど、確かにガノスZシリーズ――

「信じられませんか？」

「っ！？いえ、その……」

「ふふつ、大丈夫ですよ。慣れてますから……」

頭の中で信じられないと考えていたのが、顔にでてしまっていたのか、それを指摘されて焦る私に彼女は軽く微笑みかけ、不意に真顔になる。

「私の名前はアイビス・クローチエ、2つ名は《金色の激流》で、一応はG級の位の末席を汚す者です。」

言葉口調は丁寧だけど、雰囲気はさっきまでとは全く別人と云っていいぐらい、鋭い覇気を醸し出すアイビスさんに面食らう私……で

も、

「ス、スウ・カプリナです！宜しくです！」

こんなんでビビってたなら、ただでさえ師匠に顔向け出来ないのに、もっと上乘せしてしまう。

「スウ・カプリナですか……そうですか、では、失礼ですがスウさんは何故この場所で野営を？」

思いのほか自身が考えていたよりしつかりと言葉を返す私に少しだけ驚いたアイビスさんだけど、すぐさまそれを隠して質問をぶつけて来た。

だから、私は――

「実はですね……」

師匠とリーネの事は伏せながらも、それ以外は正直にアイビスさんに話す事にした。

自分がヒュームを目指している事も、とりあえずはそこを拠点にして活動を考えている事も……

「そうですか……ヒュームを拠点に……」

此方の事情を聞いたアイビスさんは顎に手を掛けて考える素振りを見せるとおもむろに口を開いた。

「さっきも言いましたが、奇遇な事に私もヒュームを拠点に活動を

しているハンターです。ですので、アナタさえよろしければ私の竜車でヒュームの街までお送り致しますが……どうでしょう?」

「え! ホント! ?」

「はい、此処で会ったのも何かの縁ですし、旅は道連れとも言いますし……ドーン! と私に任して下さい!」

誇らしく胸を叩くアイビスさんに感謝しながらも心の中で思う。

あんまり大きくはないな……と、

「まあ、でも……ありがとうございます! 感謝します!」

「いえいえ、困った時はお互い様ですし……それに……」

「? 何か顔についてます?」

流し目で全身を覗くアイビスさんに疑問を感じた私は、率直に問いかけてみると……

「いえ、何も! ただ……少しだけ雰囲気があの人に似てると、思っただけです。」

「あの人?」

「ふふつ、あんまり気にしないで下さい。……さつ、話はまとまった事ですし、この場所に長居は無用です——行きましょう。」

さつきの言葉にえらく引っかかりを感じるも、先を急がせるアイビ

スさんに促され、私はとりあえず野宿用に敷いていた簡易毛布と焚き火の火を消してその場を後にしようとした——瞬間……

「ギャオ！ギャオ！」

よく聞き覚えのある動物の鳴き声がこだました。

「ふー……どうやら一歩遅かったみたいですね。」

やれやれと面倒くさそうに肩を竦めるアイビスさんは自身の腰に引っかけていた獲物を抜く。

「スウさん、どうやら私達はドスランポスの群れに囲まれてしまった様です。」

「え！？いつの間に！」
ホントびっくりだ。

「多分、この密林エリアに入った時点からずっとマークされていたんでしょね……まあ、なってしまったものはしょうがないですし、ここは共同で……」

「はい！敵の包囲網を突破しましょう！」

言葉と同時に斬破刀を引き抜くと、それが開戦の合図になったのか見計らった様にランポスが雪崩れ込んで来た——その数はざっと九匹……

「行きます！はああっ！」

先陣を切り飛びかかって来たランポスの腹を打ち抜いた私は、噴水

の様な血飛沫上げる敵を蹴り倒して、次々と迫り来るランポス共を迎え撃つ。

《ギャオ！ギャオ！》

二匹で同時に挟み撃ちの様に左右から大きく跳躍し、鋭い爪を突き刺そうと襲い掛かるランポスに私は……

「舐めんじゃないわよ！空中戦は私の十八番！ふっ……やあああああー！ーっ！！」

—— 右に向かって跳躍すると突っ込んでくるランポスの首を横からの一閃で叩き斬り、返す刀で背後から迫る敵の顔面をぶった斬った。

「ギャエエー！ーッ！！」

訳の分からん悲鳴を上げてドサリと倒れたランポスを見下ろし、思いつきり睨みつけてやる。

「今の私は気が立ってるわよ！半端な覚悟で来るなら……一匹残らず叩き斬る！」

啖呵と共に殺気立った私は斬破刀に雷を溜める為に刃先を震わせようと動き出したら……

ヒュン…ヒュヒュヒュッ！

一本の矢を皮切りに私の頭上を連続して矢が通過していき……

パキパキパキ……

「ギャエ!？」

そのすべてが、敵を複数に撃ち抜き凍結させていく。

「スウさん! 援護します!」

「アイビスさん!」

「他のランポスの動きは私が牽制します! あなたは自分の思うがままに戦って下さい!」

「はい! ありがとうございます!...です!」

言葉の語尾で背後から隙をうかがっていたのか、いきなり襲い掛かるランポスを回避しながら頭を一文字に吹き飛ばし、返答する私は初対面ながらも師匠と同じ位に立つ彼女の言葉を信じ――

「行きます! ふっ――とう!」

助走をつけて跳躍し、敵陣に突っ込む。

「ギャオ! ギャオ!」

「合い!...一閃!」

四方を威嚇の声で囲まれる中、着地した私はお約束の掛け声と同時に斬破刀の柄に手を掛け...そして、

「必殺! 大回転斬り――いっ!」

裂帛の気合いと同時に渾身の力で至近距離にいたランポス達の首筋に剣を走らせる。

「ギャーーーーッ!？」

飛竜を相手にしている訳ではないので雷を帯びる事もなく純粹な力で振り抜いた一閃は、今にも噛み付こうと動くランポスの顔面を数体纏めて斬り払った。

「グルルル……ギャオ!ギャオ!」

戦況の不利を悟り、此方の出方を窺う様にして仲間を呼ぶ鳴き声をあげるランポス……しかし、

「させません!———そこです!」

言葉と共に超スピードで連射された矢は寸分違わずランポスの喉を突き抜き、背後の木に打ちつける様にして絶命へと追いやった。

「凄い……と言うかエグい……」

「スウさんには言われたくありません!」

素直な感想を言ったらアイビスさんに怒られた——私って、そんなに残酷な方じゃないと思うんだけどな……

「兎に角、ある程度は敵も排除できた事ですし、今の内に竜車へ戻って此方を離れましょう。」

「え？でもドスランポスは？」

「ドスランポスは後日にも駆け出しの方々にお任せすれば大丈夫です。ですので私達は今の内に……」

「…はい、了解です。」

内心は少しだけ不満は残るが相手は自分よりも遥かに格上の存在、ここは言うことを聞いておいた方が良好だろうと不承不承ながら頷いた私を確認したアイビスさんは先頭をきり一気にランポス達の包囲を突破していく。

《しばらくして》

「此処まで来れば、もう大丈夫でしょう。」

途中何度かランポス達と小競り合いもしたが、負傷する事もなく目的地であるアイビスさんの竜車に到着した私達……が、

「ギャオ！ギャオ」

「っ！ドスランポス！？アイビスさん！」

何とかやり過ごしたと思ったのに考えが少し甘かったと思いつつ、即座に戦闘体制に入った私は隣にいるアイビスさん指示を仰ぐと……

「やれやれです。本来ならG級の私が手を出さず、駆け出しのハンターに任せなくてはいけないのですが——少々ひつこすぎた様です。排除します。」

綺麗と言うより可愛い顔立ちをした彼女には似合わない顔で、目を細めたアイビスさんは私の声も聞こえてないのか返答もせず、いきなり己の腰に差していた弓を抜く。

「鋼氷馬弓こうひまきうの威力——身を持つて思い知らせてあげます！」

殺気全開で言葉の終わりと同時に背中に背負った矢筒に手を掛け、素早く三本の矢を抜き取り弓を引いたアイビスさんは……

「三連、行きます！踊りなさい！」

恐るべき早打ちで一瞬の内に三本の矢を打ち放つ。

「ギヤス！？ギヤス！？」

三本の全てをぶちかまされたドスランポスはぶっ飛ばされ、地面をのた打ち回る。

「ギヤオ！ギヤオ！」

頭の危機に反応したランポス達はドスランポスを守る為に、無謀にもアイビスさんに突っ込んで行くも……

「邪魔です！拡散4連！乱れ打ち！」

鋼氷馬弓の前に幾つもの風穴を開けられ倒れて行く。

「グルル……」

自分が倒れている間に息絶えて行く部下達を見たドスランポスは、戦況の不利を悟ったのか一瞬だけある一点を見つめ、逃走を図るが……

「逃がしません！貫通4連！」

未だ彼女の弓の射程圏を抜けられず、体に風穴を開けられ悶絶する。

「ギャエツ！？ギョルルル……」

脚を射抜かれ、氷の武器による特性か所々凍りついたドスランポスは動きに制限を掛けられながらも必死にエリアを抜けようともがくが……

「これで詰みです！行きますよ——四連一点！釣瓶打ち！」

彼女が発した通り、間髪いれずに放たれた四本の矢は真っ直ぐに直線を描き——

「カギヤアアア！？」

その全てが眉間のほぼど真ん中に突き刺さり致命傷を与える。

「……ギア……ガギ……」

アイビスさんの攻撃を受けたドスランポスは一瞬だけヨロヨロと歩くも、目の前の木にぶつかるバツタリと倒れ、そのまま動かなくなった。

「完全封殺……ですね。」

敵が完全に沈黙した状態を確認した所で小さく呟いた彼女は鋼氷馬弓を腰にしまった。

「凄い……」

今度は純粹にそう思った……

純粹にこれが今の自分と師匠やソシエッテ、そして目の前に居るアイビス・クローチエとの絶対的な実力差……

「スウさん？」

「え！？」

「敵も一掃した事ですし、剥ぎ取りを済まして私達もヒュームに向かいましょう。」

「あ、はい！でも、残ったランポスは？」

「長を失ったのです。ほおって置いても問題は無い筈です。」

「……そうですか、分かりました。」

余りの実力差を目の前で見せられ、気の無い返答を返す私にアイビスさんは何かしる思う物があつたのか――

「ひゃう！？」

突然頭の上に手を乗せ、驚く私に軽く微笑んで口を開いた。

「大丈夫ですよ。あなたはきっと強くなれます。だって、戦い方も物事の捉え方もあの人に凄く似ていますから……」

「あの人？誰ですか？それ？」

「私が目標にしているハンターの一人です。私に天部の才が無くてもG級の位に着ける事を教えてくれた方にあなたは似ている……だから、大丈夫です。」

優しく微笑み言葉を繋ぐアイビスさんに安心感を覚え、似てる人が誰なのかも聞けず——結局、しばらく励まされて剥ぎ取りを済ませると竜車に乗り込み、一途ヒュームの街を目指すのであった…

…

第23話 師弟の出会いと試験と同居への誘い

「ねえ！おじさんがチス・リエーテ？」

「あん？確かに俺はチス・リエーテだが、てめえ誰がおじさんだコラアツ！！俺はまだ23歳だ！！」

「ひえー！？ごめんなさい！」

乱暴でいかれた酔っ払いのチンピラみたいな悪党面のおじさん……それが初めて見た師匠の第一印象だった。

「何？俺の弟子にしてくれて？駄目だ駄目だ！他をあたれ！」

「私！絶対頑張りますから！だからお願いします！」

嫌がる師匠に必死になって頼んで……

「チス・リエーテの弟子にさせて貰うまで、私絶対この場所を離れません！」

昔ながらの方法で師匠を困らせて、実際に1日程ほったらかせられて……

「おい、お前の名前は？」

「スウ、スウ・カプリナ——です。」

「そうか、じゃあ、スウに質問だ。どうしてそこまでしてハンター

になりたいんだお前？理由を言ってみる。」

あの時、師匠のキツい目と口調に泣きだしてしまいそうになったけど、私は頑張ってた……

「強く……強くなりたいんです！チス・リエーテみたいに！——強くなつて自分が大事だった物の全部を守り抜きたいんです！」

なけなし勇気を出して、震える声でも精一杯に叫んでお願いしたけど……でも——

「悪いな——そう言った思いが有るなら、余計に他を当たってくれ……」

何の理由も話す事も無くバツサリと断る師匠に腹が立って……

「どうしてですか！？チス・リエーテは災厄を振り払ってシュレイドの国を守った英雄じゃあないんですか！？」

今なら解る——師匠が何でこの時すごく寂しそうな顔をしてたのかを——でも、この時の私は今よりもっと子供で、師匠の事を何も知らなくて考えも無しに自分の事しか頭に無く勝手な事ばかり並べて……

「いいか？俺はお前みたいなクソガキが考えている様なハンターじゃあねえんだ！大事なもんを————守り抜きてえもんを最後の最後まで守り抜けるハンターに成りたいんだったら、俺みたいな糞じゃなくてもっと凄腕の奴に弟子入りを頼め！！解ったか！！」

ボタン！と思いつ切りドアを閉められて、それで私、泣いちゃって

……

「グスッ……う、うう……うわああーん！……」

雨まで降ってきて、寒くて……凍え死んじやいそうで……

「ちっ……いつまで人の家の前で泣いてやがんだ……これじゃあ俺が悪魔みたいじゃねえか……」

（お前は他人から見たら充分に悪魔だ。）

「おい！」

「グスッ！グシュッ！——？」

「そんなに人様の家の前で泣かれたら迷惑だ。鬱陶しいからサッサと中に入って来い！」

結局、最後は困り果てた師匠が折れて家の中に入れてくれた。

「あ、あのー！」

「スウとか言ったか？とりあえずは風呂に入ってきて来い！話はそこからだ。」

「あ、はい……でも、あたし着替え……」

「いいからサッサと入れ！張り倒すぞ！」

「ひっ！？はいー！」

半ばお尻を蹴られる様にして浴場に追いやられる。

「お前、身長は？」

「えつと…146です。」

「そうか、最低でも30分はキッチリ入っとけ！でないと弟子の話は無しだ。解ったな？」

「は、はい！」

この後、私がお風呂に浸かって出てくる頃には何故かセンスの欠片も無い着替えが置いてあった。

「あ、あの……」

「もう充分に体は温まったか？」

「はい、お陰様で……それと、着替えありがとうございます。」

「けっ……」

お礼を言ったら、この態度……めちゃくちゃ居心地が悪い。

「カチ、カチ」 ↑ 煙草に火を着ける音

「ふー…んで、お前を弟子にするかどうかの話だが…」

「弟子にしてくれるんですか!？」

「まあ、そうだな…あくまで俺の条件を満たせばの話だが…」

「条件……ですか？」

目の前に居る悪魔に思わず身構える私……

「ああ、でも、まあそんなに難しい物でもない——単純に明日の朝から俺の出した試験をお前が一週間の間に達成出来るかどうか、それだけだ。やってみるか？」

多分、この人の事だからとんでもなく意地悪な内容の様な気がするけど——でも、

「やります！その条件をクリアして絶対にチス・リエーテの弟子になってみせます！」

こんな機会はもう絶対に無いと思う私は腹を括り、それに乗った。

「ほう、そうか……なら今日の所は飯を食ったら、早朝から動く事になるし早めに寝ろ。」

「はい！」

次の日から師匠が出した条件達成の戦いが始まった。

「はあああつ！——ぜい！」

「ほう！とつ！——にしても、無茶苦茶な太刀筋だな。」

私が振る木刀を軽々と受け流し、軽口を叩く師匠……

「こんなんじゃないやあ、一週間どころか一生かかっても俺に一撃当てるなんて出来ねえぞ。」

「当てます！絶対に！」

師匠の出した条件——この一週間の間に行う稽古で師匠の体に何らかの攻撃を当てる。

まだハンターにもなっていない私が、師匠に攻撃を当てるなんて事が出来るなんて思っていない——でも、それでも私はこの条件に縋るしかなくて……頑張るしかなくて……

《一週間後》

「はあ……はあ……っ！ぜい！」

「おつと……」

もう、試験が始まって一週間が切ろうとしている。

あれから毎日の様に必死に打ち込みを繰り返すけど……攻撃は全然当たる所かすりもしない。

「最初の約束通り今日までに当てねえと、弟子にする話は無しだからな。」

「っ！そんなの！いちいち言われなくても——わかってます！」

師匠に最後通達されて余計に力んで太刀を振る。

「はあ…はあっ！」

手が痛い……普段から武器なんか振ってなかったから豆が潰れて血が出てる。

「あのなあ……根性は認めるけど、それだけならどうにもならねえ事がある。だからそろそろ……諦め…うん？」

「——たかない……」

「何だつて？」

「諦めたくない！——だつて！ここで諦めたら！私は！」

言葉と同時に立つのもキツい体に鞭を打って、出鱈目に剣を振る。

「痛っ……やああっ！」

「お、おい……」

「諦めたらあの子達に顔向け出来ないから！」

「何を言つて……」

師匠が防御しからない事を良いことに、必死になってがむしゃらに剣を振る。

「だから…だから！」

「……………」

「目の前に見える全部の大事な人を守り抜く為に！私は！私は！」

言葉と同時に私の体の周囲を赤色な覇気が包み込んだ。

「なっ！？練気！？」

「——強く！強くなるんだああ——っ！っ！」

感情の赴くままに振られた木刀は防御に徹した師匠の木刀を無視して地面を叩いた。

「……………」

「……………」

「…………絶対に当てさせるつもりは無かったんだが——どうにも…………俺の負けみたいだな。」

やれやれと肩をすくめる師匠の頬には一筋の赤い線が走り、木刀は私が叩いた所からスッパリと割れて地面に落ちた。

「まさか何の訓練も無しに練気を扱ったのは正直驚きだ。」

後で聴いた事だけど練気は普通、それそう応の訓練を経てから初めて扱える物らしい…………単純に太刀で攻撃していたらいきなり勝手に溜まる物じゃないそうだ。

「兎に角、なつちまったもんはしょうがないしな。約束通りにお前を弟子にする。」

「……………」

「宜しくな、スウ！」

「……………」

「うん？スウ？」

「げっ！？こいつ立ったまま気絶してやがる！？」

《半日後》

「スウ姉ちゃん！俺、絶対に凄腕のハンターになるんだ！」

「私も！ハンターになって稼いで、この孤児院の子供達がちゃんとした夢を叶えられる位の環境を作るの！」

「みんな……………」

「行きなさい！スウ！せめて貴方だけでも！」

「先生……………」

「うっ、うっ……………」

「目、覚めたか？」

「……はい——つて！試験！？」

内心、起きた瞬間に師匠の悪党面があった事には驚いたけど、それ以上にこの時の私は試験の事を思い出して慌てて起き上がろうとするも……

「あ、あれ？体が……」

何でか全然体が動いてくれなくて……

「ぶっつけ本番で練気が発動したんだ。動けなくて当然だ。」

「練気？それって何です？それより試験は！？」

「……その事なんだが——スウ・カプリナ！」

「は、はい！」

「今日からお前を俺の弟子として認める！わかったか！」

「……え？」

「リアクションが薄いな。何か問題でも？」

「だ、だって私、試験……」

「精魂尽き果てて覚えてねえか……スウ、お前は自分の力で俺の条

件のクリアを勝ち取ったんだ。」

「わ、私ですか？」

「ああ、紛いなりにもお前は俺の条件をクリアして見せたんだ。――無理難題を超えて条件を満たしたお前を弟子に迎えた事を俺は誇りに思う。頑張ったなスウ。」

この時に私は初めて師匠の優しい表情を見た瞬間に安心して……

「ふ、ふえゝゝん……」

また泣いちゃって……

「はっ、泣き虫な野郎だな。」

「だ、だって……」

頭を乱暴に撫でられて憎まれ口を叩く師匠の行動を、今回はそれがこの人の精一杯の励ましだとわかった。

「スウ――強くなろう。何者の追隨も出来ないぐらい……大事なもの全部を最後まで守り抜ける偉大なハンターに……」

「偉大なハンター……」

「そうだ。頑張れるな？」

「はい！絶対やり通してみせます！」

師匠……知ってますか？

この時から私が決めた夢……

師匠と肩を並べて歩けるようなハンターになる。

今は背中しか追えない未熟者だけど、いつか——いつか絶対に追いついてみせますから、その日まで……

「スウさん、スウさん……起きて下さい。もうすぐヒュームの街に着きますよ。」

「う、うん？アイビスさん？」

「おはようございます寝坊助さん。」

目を覚ませば、昨日からお世話になっているアイビスさんが目の前に——てっ言うか、いつの間にか朝！？

「もしかて！私、竜車に乗ってからずっと寝てました！？」

「それはもうぐっすりと、正直今も起こす事を躊躇ってしまつぐらゐに幸せそうな顔で夢の世界に飛び立っていましたよ。」

あちゃー、やつちゃった。

「ご、ごめんなさい！アイビスさん私が寝ちゃったせいで徹夜させちゃいましたよね？」

「私は気にしますが……まあ、気にしないで下さい。」

「うわぁ〜っ！本当にごめんなさい！」

そんな事言ったら余計に気になります！と、思ってたなら……

「（クスクス）冗談ですよ。」

「はへ？」

今なんと？

「昨日は元々から徹夜してヒュームに帰るつもりでしたから、スウさんが寝てしまっても何の問題は無かったんです。」

「そうなんですか？」

「はい、だから本当に気にしないで下さい。」

「ほっ…よかったです。」

一瞬焦って損した。とか思ってたその後もこんなやりとりしていたら、段々と街の入口が見えはじめてきた……って！入口の門デカっ！？
「うわぁー大きな門！何でこんなにでっかいんですか？」

「ドントルマをはじめにシュレイド王国の重要都市には飛竜種対策の為に外壁を高く設定しているんです。……まあ古竜種にはあんまり効果は無いんですけど……」

「へえー、そうなんですか……」

本とかで見た時あるけど想像よりもずっと大きな壁……これが殆ど効果の無い古竜って……

「ヒュームの町が過去に古竜の襲撃を受けたのは、炎王龍 テオ・テスカトルと老山龍 ラオシャンロンの二回……何れも外壁を突破されています。」

「両方ですか？」

「はい、両方です。」

頷くアイビスさんの視線を辿ると、確かに外壁は大きく一カ所が新しい石に修繕されているのが分かる。何かとんでもなく大きな山が其処にぶつかったみたい……

「外壁の色が違う場所は老山龍の攻撃による物です。」

「げっ、あれが？」

「ええ……」

「でも、あんな所まで攻められて街は大丈夫だったんですか？」

もつともな事を尋ねる私にアイビスさんは――

「はい、一部建物の損壊は在りましたがギリギリの所で敵の進路を変えて何とか事なきをえました。」

「へえ、アイビスさんはその戦いに参戦したんですか？」

「ええ、勿論参戦しましたよ。でも、当時の私はまだまだ全然弱くて意気地なしで……皆さんのお役には立ちませんけれど――」

れど、その時に確固たる目標を貰いました。」

「目標？」

「はい、ラオシャンロンとの防衛戦で一番名を上げたハンター集団……《4カード》——あの人達から私は大事な事を教えて貰えました。」

嬉しそうに表情を崩すアイビスさんとは対照的に内心ではかなりびつくりしている私……

（まさか、こんな時まで師匠の話が出て来るなんて……）

「あの、アイビスさんに質問です！」

「？何でしょう？」

「ラオシャンロンとの防衛戦で名前を上げたって言うてましたけど、《4カード》ってそれまでそんなに有名じゃ無かったんですか？」

「お世辞にも有名と言う存在ではありませんでした——しかし、ラオシャンロンとの防衛戦を機にチーム名は大陸全土に知れ渡り、そこからG級の位まで登りつめて行かれた様です。」

知らなくてもしょうがない事だけど、師匠達もやっぱり苦労してたんだな——

「スウさん、私にも貴女に質問があります。」

「あ、はい何ですか？」

「貴女はヒュームの街を拠点に活動をしていくと仰っていましたが、行く宛、若しくは頼る宛はあるので？」

「いや、それは……正直、行ってから決めよう」と

言いよどむ私に彼女はヤレヤレと肩をすくめ――

「だと思いました。そこで提案です。」

「提案？」

「はい、宜しければ私の住まいを拠点として使ってハンターとしての活動を進めて行くのはどうでしょう？」

「え？マジですか！？」

「はい、丁度スウさんと同じ年の女の子と同居していますし、その子の良い刺激相手としても是非にと……」

「行きます！」

私はアイビスさんの提案に食らいついた。

「一緒に住んでる子って、どんな子ですか？」

「うーん、そうですね……キミちゃんは気難しくて頑固で寂しがり屋さんだけど、根は真面目で優しい良い子ですよ。」

気難しく、頑固で寂しがり屋だけど根は真面目で優しい良い子に疑

問符を感じつつ、アイビスさんが話すキミって奴と仲良くなれればいいな、とか考える私はこの後、アイビスさんに連れられ彼女の自宅へと向かうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6017j/>

モンスターハンター 師と弟子と約束の狩猟戦記

2011年10月6日15時51分発行